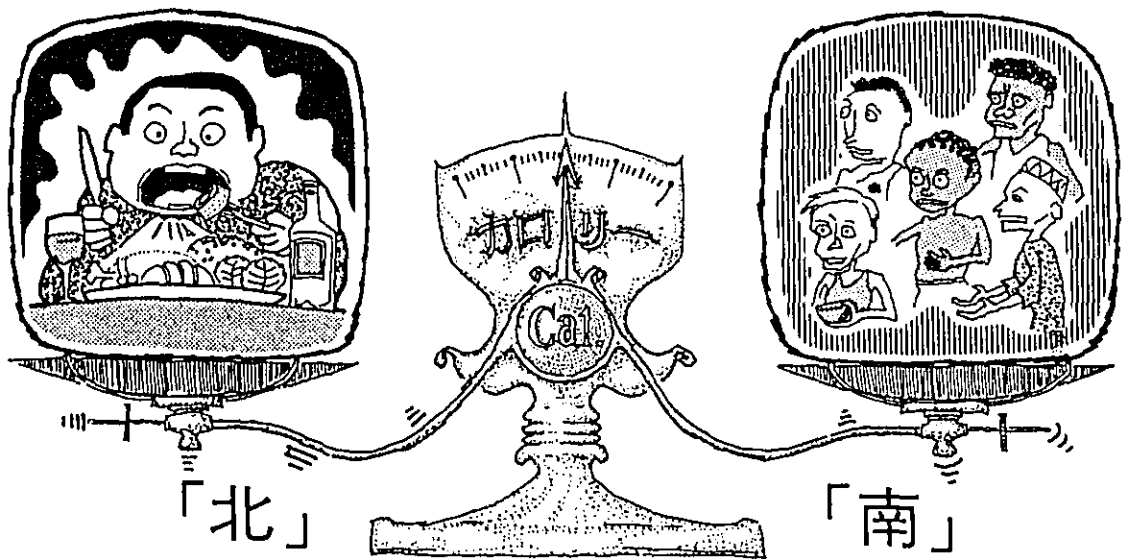


新たな『開発教育』をめざして

南北問題・開発途上国に関する教科書調査報告書



欧米先進国のことはよく知っている日本人が、開発途上国の実情や日本と途上国との関係には驚くほど疎い。この原因の一端は教育の場での途上国理解への取組み方に

あるのではないか。そう考えた私たちは、まず問題解決への手がかりの第一歩として、義務教育の場で現在使用されている社会科教科書の調査を思いついた。

はじめに



黒河内 康
青年海外協力隊事務局長

今、開発途上国とよばれるアジア、アフリカ、ラテン・アメリカで、日本の若者たちがそこの民衆と共に、汗水流して国づくりのためのボランティア活動をしています。彼ら青年海外協力隊員たちの献身的な活動は、開発途上国の民衆から高い評価を受けています。

この青年海外協力隊事業は、青年の情熱とボランティア精神をひとつの軸とする、日本及び日本国民全体の事業という特質をもつものであります。従って青年たちの積極的な参加と、同時に広く国民一般の理解と支援を得て実施されなければ本来の姿にあるとは申せません。

しかし、協力隊事業はもとより、わが国にとって日々ますます重要性をましている南北問題に対する国民の関心は、未だ充分であるとはいえません。国際化へ向って益々国民的知識を涵養する必要が増大している今日、その対策が多角的に考えられてよい時機に至って久しいとの声もたかまりました。

このような声に答えるための予備的な作業のひとつとして、義務教育段階で、児童・生徒に対し、南北問題、とくに開発途上国理解のためのとりくみが、どのように行なわれているか。教科書における記載事実について調査することで、新しい手がかりをつかめると考えました。

将来の協力隊員候補者層である青少年への正しい情報を提供することは、協力隊事業への幅広い理解者、支援者づくりと同時に、今後の課題であります。この調査の結果をふまえた努力が、多くの関係者の方々によってさらになされねばと考えます。

今回の調査にご参加、ご協力いただいた多くの方たちに心から感謝し、関係各位に対し調査の結果をご報告申し上げる次第です。

JICA LIBRARY



1018802[7]

内 容

はじめに 内 容	
なぜ調査が……目的とねらい	2
調査に参加した人	4
どのように調査は行なわれたか 視点、対象、基礎資料の作成	5
調査作業日程	7
調査対象社会科教科書リスト	8
小学校5年6年社会科	
記取箇所抽出一覧表	12
抽出作業を終えて・調査担当委員の所感	46
中学校地理的分野	
記取箇所抽出一覧表	56
抽出作業を終えて・調査担当委員の所感	134
中学校歴史的分野	
記取箇所抽出一覧表	144
抽出作業を終えて・調査担当委員の所感	156
中学校公民的分野	
記取箇所抽出一覧表	166
抽出作業を終えて・調査担当委員の所感	186
調査結果のコメント・調査とアンケート結果のまとめ(金谷敏郎)	195
調査を終えて	204
中学3年生 社会科アンケート	207
アンケートの結果	208
教科書のできるまで	209
教科書発行社一覧	213
おわりに	

国際協力事業団	
受入 月日 '84. 5. 24	000
登録No. 07527	36 JVA

なぜ調査が……………

目的とねらい

駒 田 錦 一
調査委員会委員長

ねらい

昨年、私は東アフリカのタンザニア、ケニヤ、西アフリカのガーナを訪問しました。私はダル・エス・サラーム大学で開かれた「教育と開発」を主題とする国際成人教育協議会主催の国際会議に参加し、またタンザニア、ケニヤ等の開発途上国で、青年海外協力隊のボランティアたちが、それぞれの困々の困づくりに協力している真剣な姿に深く胸を打たれて帰国しました。

ダル・エス・サラームの会議は、国連の提唱する第二次開発十年期もすでに半ばを過ぎようとする今日、世界の人類共通の世紀的課題ともいうべき南北問題や、開発の意義やその成果を反省検討し、その基盤である教育の望ましい在り方を追求しようとするものであります。この会議には世界の65ヶ国から約400名の代表が参加し、一週間にわたる真剣な討議が行なわれました。私は今世界の困ぐにが、先進国と途上国とを問わず、これらの問題にいかに真摯に取り組んでいるかに痛く感銘しました。同時にわが国の人びとが一般にこの問題についていかに無関心であったか、深く反省せざるを得ませんでした。

東南アジアをはじめ、第三世界といわれる開発途上の困ぐにとの貿易、そしてこれらの困ぐにの資源に依存せねばならない日本にとって、南北問題は今後、ますます重要な課題となることは必定と思われれます。

しかしながら南北問題の解決といい、開発といい、決して経済や財貨の開発が目的ではありません。開発の目的は人間 - 解放された人間 - にあります。開発は人間のための、人間による、人間のものでなければなりません。そのためには何よりも人間の相互理解、尊敬、協力が必要であります。

いま世界の人口は40億、そのうち70%が飢えと貧困と文盲に悩む第三世界に集中しています。この問題についてこれまでいかに日本人が無知で無関心であったか、これは国民教育のあり方に深くかかわる問題ではないかと改めて反省せざるを得ません。

はたして、現在の学校教育におけるこれらの問題への取組みは十分であったといえるでしょうか。

そこで、まず、現在使用されている社会科教科書を中心に、義務教育の場における南北問題のとりあげ方をみようというのが、今回の調査のねらいです。

現在全国で使用されている社会科教科書全部（但し小学校5、6年及び中学校全学年）について、調査委員会のメンバーたちが分担して作業を行ない、討論の結果出来上がったのがこの報告書です。

もちろん、こうした国際理解のための教育内容は、その教科のみならず、全教科を通じ総合的に検討が図られなければなりません。

また、道徳教育や学級活動、クラブ活動などの特別活動の内容や教材、あるいは先生方の指導方法などを含む、全般的な検討がなされなければならないでしょう。

総合的な調査を経て、国際協力、国際理解のための具体的な方針にもとづいた教育がおこなわれることが必要であります。今回の調査は、その一端を担うための第一段階であり、これを契機として南北問題、及び開発途上国理解への世論形成がなされることを期待するものです。これをひとつの足がかりとして、今後さらに、緻密で満足いく調査を行なっていきたいと考えております。皆様のご意見・ご批評を頂ければ幸いです。

調査に参加した人

委員長

駒田 錦一 東京理科大学教授 専門は社会教育。
1963年から、中央青少年団体連絡協議会（中青連）顧問をつとめるなど、青少年団体活動や教育問題にも深い関心を持っている。

委員

徳山 正人 教科書研究センター 常務理事。
文部省時代から、小・中学校の社会科教科書や青少年の社会教育関係の仕事を手がけている。

現行の教科書制度についての専門家。

斉藤 実 都立狛江高校政治・経済教諭
現場の教師としてこの調査に参加。
友愛青年連盟で活躍した経歴の持ち主。
同校は、全国高等学校海外教育研究協議会（高海協）加盟校でもある。

宮崎 幸雄 中央青少年団体連絡協議会51年度国際専門委員会委員長。
日本YMCA同盟国際部主任主事。

国際協力と開発問題育成運動のプロフェッショナル。

吉野 貴美子 (社)青少年育成国民会議事務局主査。
青年の船、各国青少年国際交流の実情調査等で東南アジア等に数回出かけ、南北問題についての関心が深い。

内藤 幸彦 青年海外協力隊エチオピアOB（天然痘監視員）で途上国の実情を肌身で知っている。英・サセックス大学、開発問題研究所（I.D.S.）で、開発社会学を専攻。

室 靖 青年海外協力隊事務局顧問。

なお、5回行なわれた調査委員会には、次の4人がオブザーバーとして出席した。

倉持 寛子 (国際協力事業団総務部広報課長)
北村 孝 (" 移住第2業務部移住広報課長)
黒河内 康 (青年海外協力隊事務局局長)
高橋 成雄 (" 国内課長)

どのように調査は行なわれたか

視点，対象，基礎資料の作成

○調査の視点

調査に取り組むにあたり、委員会は、調査の期間が極めて限られているため、何よりもまず、教科書における記載事実を抽出し、明らかにしていくことを最大の課題とした。

抽出対象教科書は、「南北問題」、「開発途上国のようす」が具体的に紹介されている「社会科」をとりあげた。

その視点は、途上国における、自然環境、住民の生活文化、産業、資源と開発、歴史的背景、さらに、国際協力、援助、南北問題を柱とした。

しかし、委員会は、この視点を基調としながらも、社会科で「先進諸国をどのように教えているのか」「日本をどのように教えているのか」を、関連して知ることが、途上国理解が、どのようになされているかを知る重要なポイントであるとして、その点を含めた作業を行なった。

○対象とした学年

小学校の社会科教科書の主な内容は、家庭、諸地域、国家の役割や、はたらき等、国内のようすについてふれられている。外国のようすや、世界とのつながりについては、「5年生の下」で、開発途上国を日本の加工貿易の相手国として、また、資源産出国として、きわめて簡単にふれている。6年になって、はじめて、世界の自然環境、国家間の相互関係など、国際理解のための基礎的なことがらについての概要が述べられている。

したがって、小学校の場合は、5、6年の社会科、中学校は、1年～3年の社会科（地理、歴史、公民の各分野）を調査の対象とすることとした。

○基礎資料の作成

作業は、上記調査対象となった教科書を、各委員が分担しあって読むことから始まった。そして、提言のための基礎資料として教

科書から視点にそって抽出したものを一覧表にまとめた。

抽出一覧表は、教科書別に、それぞれ担当した調査委員によって作られた。抽出の内容は、教科書の関連箇所をまとめたものである。一覧表には、さらに該当教科書出版社発行の教科書指導書の内容から、特に解説の概要及び、学習の着眼点、留意点を抽出し、並記した。

委員会は、各委員の抽出結果をもとに、教科書は、南北問題及び途上国について、どのようなことが書かれているかを確認した。

さらに、抽出の内容、抽出の方法についての調整を行った。この報告書には、抽出一覧表と、担当委員の所感、提言が載せられている。

○ 中学 3 年生へのアンケート実施

この作業をすすめていく過程で、これら教科書を使用している児童、生徒たちが、はたしてどのような理解のしかたをしているのか、調査してみたらどうかとの意見が委員から出された。

そこで、南北問題、途上国に対する認識の実態を把握するために、中学校 3 年生に対しての、アンケートを実施した。都内二つの中学校の生徒 265 名が対象であった。

このアンケート調査は、①時間的制約があった、②都内二校だけを対象にした、③中学三年生だけが対象であった、④人数は 265 名であった。そのほか⑤アンケートの内容が、かならずしも適切かどうか疑問が残る。以上のような問題を含んでいる。従ってこれだけで、南北問題に対する、児童、生徒の理解を判定するのは早計であろう。しかし、この調査の結果のプラスにはなるであろうとの判断から、今回の教科書調査報告に添附した。

尚、アンケート結果と、教科書の調査結果を、専門家である、金谷敏郎氏（国立教育研究所企画調整官・アジア地域研修室主任研究員）にみていただき、コメントを書いてもらった。

調査作業日程

- 準備 (76.12月中旬～77.1月末)
教科書調査の実施決定
調査委員会メンバーの人選及び依頼
教科書及び指導書の購入
- 調査 (77.2月初旬～3月中旬)
調査委員会開催
作業手順の決定
各委員が分担で、該当箇所抽出・整理作業
資料収集
中学校3年生へのアンケート調査
(中野区立第3中学校・小金井市立第1中学校計265名)
中学校社会科教師からの実情聴取
中野区立第3中学校、小金井市立第1中学校
品川区立平塚中学校、新宿区立戸塚第1中学校
朝霞市立朝霞第1中学校
討論及び報告書のまとめ方についての意見交換
2月9日 第1回調査委員会
2月23日 第2回 "
3月9日 第3回 "
(この他3回ほど小委員会をひらいてすすめ方について打合せた)
- まとめ (77.3月中旬～3月下旬)
抽出結果をもとに討論
報告書の内容決定
原稿分担
報告書の活用方法について意見交換
3月19日 第4回調査委員会
3月29日 第5回 "
- 報告書 4月中旬完成
関係官公庁、団体・学校・マスコミ等へ提出して意見を求め、次の調査への足がかりとすることとなった。

調査対象社会科教科書リスト

	小 学 校		中 学 校	
発 行 社	中教出版 日本書籍 東京書籍 大阪書籍 教育出版 学校図書	6社	中教出版 日本書籍 東京書籍 大阪書籍 教育出版 学校図書 清水書院 帝国書院	8社
種 別	5年生 上 下		地 理 的 分 野	
	6年生 上 下		歴 史 的 分 野	
			公 民 的 分 野	
冊 数	2 4 冊		2 4 冊	

南北問題・開発途上国について記載されている教科書

教科書発行社名	小学5年 上	小学5年 下	小学6年 上	小学6年 下	中学地理 的分野	中学歴史 的分野	中学公民 的分野	
中教出版	×	×	○	○	○	○	○	5
日本書籍	×	×	○	○	○	○	○	5
東京書籍	×	○	○	○	○	○	○	6
大阪書籍	×	○	×	○	○	○	○	4
教育出版	×	○	○	○	○	○	○	6
学校図書	/	○	○	○	○	○	○	6
清水書院	/	/	/	/	○	○	○	3
帝国書院	/	/	/	/	○	○	○	3
合計冊数		4	5	6	8	8	8	39冊

○印は記載されている教科書

×印は全くふれられていない教科書

小学校
5年, 6年 社会科

記載箇所の一覧表と
調査担当者の所感

調査担当委員

吉 野 貴美子



抽出一覧表

F 発行社 —小学校5年下—

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
第4章 日本の工業 2節 日本の工業のすがた 工業と貿易	工業原料の輸入 日本はアラビアの油田、アラスカのバルブ工場等海外の資源の開発にのり出している。 (図)おもな輸出入品と輸出入先 世界を結ぶ貿易 貿易がさかんになるためには、何より世界が平和で、国々がたがいに理解しあい、なかよくたすけあっていくことが大切だ。
第4章 3節 日本の工業のはってん 世界の工業国へ	平和のための工業 わが国の工業が生み出したすぐれた機械や高い技術を、今後も世界の国々の開発のためにはたらかせたい。 (写真)わが国がインドにつくった石油化学工場

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
43 44	日本が諸外国から工業原料燃料を非常に多く輸入していることを理解させる。海外資源の開発は、工業原料を確保することだけでないことを気づかせる。→世界へむすぶ貿易につなげる。	統計表 ○わが国の輸出入額の推移。 ○おもな輸入品と輸入先。
46 47	貿易の相手国は、その時代や国際関係から変わることに気づかせるとともに、貿易をさかんにするために、種々の努力がはらわれていることを理解させる。	○貿易をさかんにする 国々のようすを知りあふ 世界の人々が理解を深める。 世界の平和につながる。 ○表：戦前・戦後の大陸別輸出入先の比較。
73	日本の工業は、第二次大戦後、富国強兵のための工業から、国民のくらしをゆたかにし、世界の人々の平和な生活に役だつ工業へと方向をかえ、大きく発展してきたことを理解させる。	○わが国の援助には、開発援助と開発協力の他に平和部隊「日本青年海外協力隊」がある等協力隊の説明。 (資料) ○先進国の技術援助実績。 ○海外に設置されている技術センター。 ○わが国の工業は国民のくらしを高め、世界の人々の平和な生活に役だたせる目的で 1. すぐれた工業製品を外国へ輸出。 2. おくれた国々の開発をすすめるため、すぐれた機械や高い技術を役だてている。

抽出一覧表

E 発行社 —小学校5年下—

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
第4章 発展する日本の工業 4節 工業と貿易 これからの貿易	技術の輸出と輸入 研究を促進し、進んだ技術を輸出する努力が必要。 (図) 各国の研究者ひとりあたりの科学技術研究費 輸出をのばすために 1. 世界の国々とのまじわりを深める。→東南アジアなどの工業のおくれた国に、資金や技術の上で援助する。 2. いい製品を安く売る。→日本商品の輸出に対する批判→世界の国々が仲良くくらししていくため、相手国の立場も考える。 (写真) 国際見本市、コンテナ船

B 発行社 —小学校5年下—

第1章 3節 日本の工業の現状と特色 工業と貿易	貿易をさかんにするために 輸出をのばすために、すぐれた安い製品を作る高い技術と市場調査や宣伝の必要。貿易相手国の産業の発展をさまたげないよう、調和のとれた貿易をすすめる必要がある。 (写真) 日本万国博覧会の会場
---	--

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
67 / 68	分布図、グラフを見て、日本の貿易のおもな相手国について理解させる。	<ul style="list-style-type: none"> ○貿易において、技術の輸出入は、重視すべきものであり、その国の産業の発展に重要な影響をおよぼしていることを説明する必要あり。特に東南アジア地域、アフリカなどの工業の発展に、日本の技術輸出は、だいたいな役目を果たしている。 ○開発輸入の解説 鉱産資源の少ない日本は、低開発国に対して、日本の資本や技術や設備で、開発している。
69 / 71	わが国の貿易を発展させるため、いろいろ努力している姿を具体的な資料によって理解させる。	<p>わが国の輸出をのばすために</p> <ul style="list-style-type: none"> ○世界各国との交わりを深める。 ○開発途上国（東南アジア、西南アジア、アフリカ）に資金や技術の援助を行っている。 <p>技術援助の具体例として 工場・ダム建設を上げている。</p>

52 / 53	日本の貿易を盛んにし、工業を発達させるために、どんな努力やくふうが必要か。又、日本の輸出の増大とともに相手国の立場についても考えることができたか確かめる。	<p>(資料)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○電子式卓上計算機の生産と輸出。 ○技術を高める ○技術の開発と大型化 <p>} 解説。</p>
---------------	---	--

抽出一覧表

D 発行社 —小学校5年下—

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
第5章 日本の工業 3節 貿易と結びついた工業	工業と貿易 ○輸出と輸入のつり合いのとれた貿易を行うことが大切 ○わが国のすぐれた技術の輸出にも力を入れ、開発をすすめている国々を助けていくような貿易をさらにすすめる必要がある。 (図) 貿易額の移りかわり

A 発行社 —小学校6年上—

第2章 日本のあゆみ 7節 新しい日本	戦後の世界のようす ○国連の成立。 ○二つの世界の対立。 ○アジア・アフリカに独立国生れる。 ○二つの世界の対立アジアに現れる。 (地図) 現代のアジア 今日の日本と世界 ○国際社会における地位が高まる 日本は、アジア・アフリカなどの開発のおくれている国々に、資本や技術の援助をしている。 ○国際社会の変化と日本 ベトナム戦争終了→平和、公害、福祉。 ○これからの日本の課題 人間尊重の精神で社会の発展に努め、世界の国々と平和な結びつきを深めることが必要。 (写真) 札幌オリンピック冬季大会
------------------------------	--

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
68 / 69	工業と貿易をさらに発展させるために、 振興策について考えさせる。	(補充資料) 輸出政策の説明図 国際競争力の強化 輸出振興策 輸出秩序の確立 経済協力の推進 ○低開発国に対する信用供与、資本援助、 技術協力。

165 / 166	第二次大戦後、平和を守る組織として、 国連が生まれたが、アメリカとソビエトを中 心とする対立が深まったこと、一方新しい 166 独立国が次々と生れた事実をとらえさせ、 戦後の世界の変化の特色を明らかにさせる。	国連の成立 二大陣営の対立 アジア・アフリカの変化—独立 (地図) 現代のアジア 1945年以降独立
171 / 173	独立後、日本の産業は、めざましく発展 し、国際社会における日本の地位も高まっ 173 ているが、世界に果たす役割について考えさ せる。	(学習活動として) 国際社会における地位の高まりを調べる。 ① 国際会議やオリンピック大会等 ② 貿易の増大、ことに輸出市場の広まりや 発展途上国への資本・技術の援助など、を 指摘。

抽出一覧表

B 発行社 —小学校6年上—

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
第2章 日本の歴史 7節 戦後の新しい時代 日本の独立と発展	日本の課題 ○開発がおくれ、貧しい生活に苦しむ国々がある→日本は平和で、より豊かな世界を築くため努力することが望まれている。

C 発行社 —小学校6年上—

第6章 今の世の中 2節 世界の動きと日本	戦後の世界の動き ○国連の誕生。 ○アジア・アフリカ諸国の独立。 (表) 戦後の世界のおもなできごと。 (地図) アジアにおける2つの勢力の争いと新しい独立国。
--------------------------------	--

D 発行社 —小学校6年上—

第1章 日本のあゆみ 8節 近代日本のあゆみ 世界の中の日本	世界の動き ○アジア・アフリカの植民地の独立。 (地図) アジア・アフリカの独立国。
--	---

抽出一覧表

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
165 / 166	工業の発展に伴って解決しなければならない課題や新しい世界の動きの中で日本の果たす役割などについてとらえる。	日本の課題・果たす役割として ○後進国の開発援助。 ○平和で豊かな世界の建設を指摘している。

167 / 168	国連誕生、米ソ二大陣営の対立の中で、日本が独立し国連に加盟していた事情をとらえさせる。	(解説資料) ○中華人民共和国の誕生。 ○朝鮮戦争。 ○サンフランシスコ条約。
-----------------	---	--

133	第二次大戦後の世界のようすと独立後の日本が国連に加入し、国際社会に参加するようになったようすとを理解させる。	(解説) ○アジア・アフリカ諸国の独立。 ○国際連合。 ○アジア・アフリカ会議を取り上げている。
-----	--	---

抽出一覧表

E 発行社 —小学校6年上—

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
第1章 日本の歴史 5節 世界の中の日本 6項 新しい日本	平和への願いと日本の立場 ○アジア・アフリカ諸国の独立 ○平和共存への動き 話し合いによる平和をきずく。

A 発行社 —小学校6年下—

第3章 世界の自然と人々の生活 2節 熱帯と寒帯の人々の生活 1項 熱帯の人々の生活と開発	開発のおくれているボルネオ島のようす ○低い人口密度と未開発の島。 ○原住民の住居。 ○焼畑による農業。 ○おくれた農業の方法。 (地図) ○世界の熱帯 ○ボルネオ島・ジャワ島の土地利用 ○世界の焼畑の分布 (写真) ○ボルネオ島のジャングルを流れる川 ○ボルネオの焼畑 ○もみつき よく開かれているジャワ島のようす ○開拓された島
--	--

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
126 / 127	産業や文化の著しい発達を統計・年表等から理解し、これからの国民としての在り方について関心を深める。	(解説資料) ○めざましい工業の復興 ○公害の発生

24 / 28	ボルネオ島の人口密度、原住民の生活や農耕のようすから、熱帯の土地は開発がおくれているところが多いことをとらえさせる。	○焼畑農業の原始的なことに気づかせる。 ○焼畑の生産性の低さと、熱帯地域と焼畑の分布との関係。 ○世界の焼畑の分布図を見て、どのような地域に多いかを話し合う。 (読ませ方) ○人々が生活の知恵を生かしながらくらしていることや、今後の開発には、世界の人々の援助が必要。 (図表、地図・写真の見させ方の解説) ○文化生活からとり残された原住民の生活に対して抱く児童の感情を大切にしたい。 ○焼畑の世界分布……熱帯地域の広範囲で行われている。熱帯地域共通の今後の課題について考えさせたい。 ○ジャワ島の学習に入ると、同じ熱帯でありながら、地下資源を開発し、他の国々の援助を受ければ、ある程度の文化的生活が可能であることに気づく。
28 / 32	ジャワ島の農業のようすをとりあげることにより、生産方法のくふうや開発のよう	(読ませ方) ○米の生産高や栽培方法については、日本の

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
<p>第3章 3節 乾燥地域の人々の生活</p>	<p>○人口密度が高い ○さかんな農業 「化学肥料は、ほとんど使わず機械化も行われていないので、きまった面積あたりのとれ高は日本の半分しかない。」 ○大きな農園 ○地下資源の開発 「石油やすすなどの地下資源の開発が進められ、やがてこの国は、東南アジアの工業地帯の中心となる。」 (写真)・いねのとり入れ ・ゴム園 (地図)・ジャワ島付近のおもな地下資源</p> <p>農作物による熱帯の産業 ○タイ・ビルマの米 ○マレーシアのゴム ○スリランカの茶 ○ブラジルのコーヒー ○西インド諸島のさとうきび ○ガーナのカカオ (地図)東南アジアの産業 (写真)ガーナのカカオの生産</p> <p>遊牧民の生活 ○家畜を追う砂漠のくらし ○遊牧民とらくだ ○水不足とたたかう遊牧民 ○家畜を売ってくらす (写真)遊牧民のテントのすまい 羊を追う遊牧民 水をくむ遊牧民 砂漠を緑の耕地に変える ○砂漠を緑の土地に変える開発計画</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
	<p>すをとらえさせようとしている。 ジャワ島付近の地下資源の分布から、今後の開発の可能性に注目させようとしている。</p> <p>○この付近の今後の新しい開発の方向について、期待感を持たせる。</p>	<p>それと比較させ、まだ近代的な農耕技術がとり入れられてないこと、今後開発の余地のあることに気づかせる。</p> <p>○人々の開発への努力があったことに注目させる。</p> <p>補充教材として 資源開発の諸条件 インドネシア—資源豊富—鉱工業の開発がおこなわれている。それは、</p> <p>① 技術者や熟練技能者不足 ② 技術者、専門家の養成はかどらず ③ 外国からの民間投資は、石油関係を除き、みるべきものなし。</p>
3 2 / 3 4	<p>熱帯の気候を生かした農産物の生産が各地に行なわれていることから、熱帯の地域では、土地に合った農作物の生産によって産業の開発を進めていることをとらえる。</p> <p>○熱帯の産業が農作物の生産にたよったものであることをとらえさせ、日本の場合とのちがいに着目させる。</p>	
5 0 / 5 3	<p>水の少ない土地で生活している人々は、遊牧という方法で生活しているが、それは気候や土地のきびしい条件をくふうしていることを理解させる。</p>	<p>○図表・写真・地図の見せ方 ○サリム(18才)の放牧日程(補充教材)</p>
5 3 / /	<p>水の少ない砂漠も水を引くことにより耕地として利用でき、大規模な開発が行われている</p>	<p>(学習活動) ○開発までの各国の援助について。</p>

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
第4章 結び合う世界 1 節 世界の国々の結びつき 世界の結びつきを深める交通・通信・報道の発達	<ul style="list-style-type: none"> ○アスワン・ハイ・ダム ○開発された砂漠の例 (写真) ○ナイル川下流のピラミッド ○アスワン＝ハイ＝ダム (図) ○ナイル川付近の土地利用 ○ナイル川のかんがい地域 平和のとりでをきざくくふう <ul style="list-style-type: none"> ○争いのない世の中をつくる。 ○ユネスコの目的と活動。 (おくれた国に教育や技術の援助) ○国際連合貿易開発会議の開催 「北半球に多い工業の進んだ国々と南半球に多い開発のおくれた国々との経済問題をめぐって……」と述べている。

B 発行社 —小学校6年下—

第2章 世界の自然と生活 1 節 熱帯の生活	密林に住む人々 <ul style="list-style-type: none"> ○密林の世界 ○やしの葉の家と焼き畑 ○水田とゴム園 (写真) ○熱帯の水上の家とさばくの土の家 ○密林 ○ゆかを高くした家 ○水くみ場 ○もみつき ○焼き畑 ○たな田 ○ゴム園 ○ジャカルタ (図) ○ボルネオ島の密林の分布 ○ジャワ島の水田と農園 熱帯の草原に住む人々 <ul style="list-style-type: none"> ○広々とした草原で放牧と耕作をしながら生活している。 (写真) ・草原・牛の放牧
---------------------------------	---

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
55	ることを理解させる。	<ul style="list-style-type: none"> ○気候図で、アフリカの気候条件を確かめさせ、灌漑施設の必要性をとらえさせる。開発の遅れた理由を地形、気候条件によることを理解させる。 ○図表・地図・写真の見せ方。
99 / 101	国連が平時から平和を守るために、各種の機関を設け、紛争防止の努力をしていることを調べ、世界の人々が平和を守ろうとしていることを理解させる。	<p>(学習活動)</p> <p>国際間の対立紛争の要因となるもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ○経済上の貧富の差 ○人種の差別 ○領土の問題 ○人々の考え方の相違を上げている。 <p>(解説)</p> <p>ユネスコの成立</p>

23 / 30	熱帯の自然のようす、人々の衣食住のようす、生産活動について調べ、人々の自然への対応の仕方を理解する。	<p>(参考資料)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○熱帯の密林と草原の分布(図) ○ボルネオとジャワ島の人口密度。
31 / 33	熱帯の草原に住む人々の生活や放牧・耕作について調べ、生活と自然との関係を考えさせる。	<p>(参考資料)</p> <p>他の熱帯の気候(解説と表) } を掲載して ケニア(解説)</p>

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
<p>第2章 3節 乾燥地帯の生活</p>	<p>○耕作・土と草の家 (図)○ナイロビの気候 ○ケニアの草原の分布</p> <p>草原に住む人々 「砂漠の中の草原で遊牧生活をする人々の生活は不安定である。耕地をつくり定着する人々がふえている。」 (写真)さばくのような、草原の遊牧、テントの家、草原につくられた用水路 (図)モンゴルの砂漠と草原の分布</p> <p>オアシスに住む人々 乾燥地帯のオアシスでは、水路をひいて農業をしている所もある。また砂漠を開発して耕地を作っているところが各地にみられる。 (写真)陝西、オアシスの家、オアシスのいど、乾燥帯の都市、アスワンハイダム、スプリンクラーによるかんがい (図)イランのオアシスの分布 ナイル川の沿岸の耕地とダム</p>
<p>第3章 結び合う世界と平和 1節 結びあう世界 経済や文化の交流</p>	<p>開発の援助や協力 ○世界銀行 ○資金や技術の援助をし、その国の開発をすすめ、産業をさかんにするため協力している国もある。 ○日本の援助 開発をすすめているアジアやアフリカの国々へ、資金や技術の、援助をしている。 (図)日本の援助</p>
<p>3節 平和への努力</p>	<p>国連のしくみ・目的 その目的をはたすため、安全保障理事会、ユネスコ等の機関ができています。 日本も国連の中で重要な役割をはたしている。 どんなしくみより、平和を守ろうとする人々の心が大切。</p>

該当ページ	指導書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
		いる。
46 / 49	砂漠や草原に住む人々が自然に適応しつつ、よりよい生活へのくふうに協力し合っていることを理解する。	(参考資料) 世界のさばく(解説と表) 家畜の利用(解説)
50 / 55	乾燥地帯の自然の特色と人々が農業を営んでいる努力や、自然を克服し、開発に努力していることを理解する。	(参考資料) ナイル川開発の歴史
74 / 75	貿易や経済援助の統計地図などを手がかりにして、世界の国々が物資の交流による深い結びつきの上に国民生活を成り立たせていることをとらえる。	(評価として) 国々の間には経済力の差があり、そうした国へ資金や技術の援助で協力したり、世界銀行の組織を通して、国々が結びつきを深めていることをとらえたか。 (参考資料) わが国の主な貿易相手国(表)
88 / 94	国連の目的やしくみを手がかりに、世界の人々が協力して平和の維持に努めていることをとらえる。 日本と国連の関係、平和を強く望む日本の立場や世界平和への日本の役割をとらえる。	(参考資料) ○国連の成立、目的、原則(解説) ○国連のしくみ(図) ○国連の加盟国、費用の分担

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
	<p>(写真) 国連本部、国連総会、ユネスコの活動、アジア 極東経済委員会 (於東京)、国連本部前の各国 の国旗。</p> <p>(図) 平和を守るための国連の活動 世界の中の日本 アジアの国々への援助や協力が望まれている。</p> <p>(写真) 国連で核兵器実験の禁止をうったえる日本の代表</p>

C 発行社 —小学校6年下—

<p>第2章 世界各地の自然と人々の生活 2節 熱帯の自然と人々の生活</p>	<p>○他の熱帯地域 同じ熱帯地域でも、フィリピン、ガーナは開発が進んでいることを具体例を上げ指摘</p> <p>(図) ○フィリピンの農作物 ○フィリピンの輸出 ○カカオの生産高</p> <p>(写真) ○ルソン島北部のたな田 ○さとうきびしぼり (マニラ) ○ポルタ川につくられた水力発電所</p>
<p>第2章 4節 砂漠や草原の自然と人々の生活</p>	<p>水の得にくい砂漠 砂漠の遊牧生活のさびしさ</p> <p>(図) 世界のおもな砂漠や草原</p>
<p>第2章 6節 生活を高める世界の人々</p>	<p>進む開発 「ねむった資源を開発し、人々の生活を高めるため、産業の進んだ国の助けが必要だ」</p> <p>(写真) 世界のいねづくり (日本、インドネシア、イタリア)</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
96 / 97	日本の世界平和につくす役割について考える。	(参考資料) 日本の役割(解説) ○反日感情 日本企業進出 ○世界から好かれる日本にならなければならない。

31 / 33	熱帯地域における開発への努力に目を開かせる。	フィリピンの開発が進んでいる理由 ○かつてアメリカの植民地 ○アメリカの資本の助力 ○人々の工業化・生活向上への努力 ガーナの開発が進んでいる理由 ○農業適地にめぐまれている ○豊かな地下資源がある ○カカオの単一栽培に頼ることの不安 (解説資料) ○フィリピンの工業化への努力 ○アメリカに頼るフィリピン ○ガーナの総合開発
43 / 45	熱帯地方の気候や土地のようす、人々の生活の特色を理解させる。	(解説資料) ○乾燥気候の特性、遊牧生活
56 / 57	世界の人々は、生活を高めるため、新しい技術をくふうしたり、自然改造をしていることと、国際協力のたいせつな意味に目を開かせる。	(解説資料) ○産出量と埋蔵量 ○自然改造 (補充資料) ○ソ連の自然改造計画

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
第3章 結び合り世界と平和への願い 1節 日本と外国との結びつき	(図) 世界の石油分布 外国へ進出する日本の会社、日本へ進出する外国の会社 日本は、産業のまだじゅうぶんに発達していない国々に 資金を出して来た。→日本の技術や金の援助により、こ れらの国々の産業はさかんにっている。→問題が生じ ることはないか。 (写真) タイにつくられたガラス工場 (図) ふえる海外援助 ○政府のえんじょ。 ○政府・民間の合計。
5節 世界の平和をみざす国際連合	国際連合の目的と活動 1) 世界の平和と安全を守る—安全保障理事会 2) 国と国の対立や争いのもとになることをなくす。— ユネスコ (写真) 国連本部の加盟国国旗 (説明) 赤十字の運動

D 発行社 —小学校6年下—

第3章 熱帯地方の自然と人々の生活 2節 熱帯地方の自然と人々の生活	ジャワ島の人々の生活 ○人口の多いジャワ島 ○暑くて雨の多いジャワ島 ○くらしのくふう ○いな作とさとうきびのさい培 (写真) ○ジャワ島の農家のようす
---	---

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
	<ul style="list-style-type: none"> ○さとうきびの出荷のようす。 ○ジャワ島のたな田 (図) ○ インドネシアの人口密度 ○ インドネシアの農産物の生産 (日本との比較) ○ ジャワ島の農産物の分布 インドシナ半島の人々の生活 ○ インドシナ半島の低地。 ○ 三角州のいな作。 ○ 水の生活。 ○ 日本との関係 「日本は、東南アジアの国々の開発のために力をかしていますが、真に各国の発展に役だつ協力がのぞまれている。」 ○ 世界の熱帯地方 (写真) ○ 水路と高ゆかの家 ○ 雨季の田 (図) ○ 日本とインドネシア、タイとの貿易 ○ メコン川の開発計画 ○ 熱帯気候の地方
<p>第 3 章 3 節 乾燥地方の自然と人々の生活</p>	<p>サハラ砂漠の人々の生活 オアシス・遊牧</p> <p>(写真) オアシスのようす、土でつくられた家 ひらかれる乾燥地方 さばくの開発—ねばり強く開発をすすめている。 世界の乾燥地方—開発がすすめられている。</p> <p>(写真) 開発された油田</p> <p>(図) エジプトのナイル川開発計画。 乾燥気候の地方。</p>
<p>第 4 章 世界の動きと日本 2 節 人類の願いと国連</p>	<p>開発の援助 アジアハイウェイ建設の費用や技術のえん助について触れている。</p> <p>(図)</p>

該当ページ	指導書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
27 / 32	日本とインドネシアやインドシナ半島の国々とは、古くから深い関係があったが、現在でも、貿易、産業、文化などの面で結びつきが深いことを理解させる。アジアにおける工業国としての日本と東南アジアの今後の在り方を考えさせる。	学習のすすめ方として：日本との関係について、日本の工業原料の輸入、製品の輸出、留学生の交換、技術援助、芸術・文化の交流などをあげ学習を進める。 補充資料として： 1972年アジア諸国援助の状況
34 / 37 38 / 39	サハラの自然、人々のくらしのようす。砂漠の開発のようすについて調べ、人々の自然への働きかけを理解させる。	(補充資料) ○きびしい暑さと休息時間制。 ○乾燥帯の気候・オアシス。 ○水つぼ。 ○アスワンハイダム、天然ガス。
78 / 80	世界には、開発途上の国があることを知らせ、開発を願う人々の苦しみと、強い期待について理解させる。 国連は、開発途上の国々の開発をたすける	開発のおくれている国 アジア アフリカ } 南に多い。 中南米

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
<p>国連のはたらき</p>	<p>○大昔のアジアとヨーロッパを結ぶ交通路。 ○高速自動車道路のおもな路線。 (写真)さばくの旅のようす</p>
<p>第4章、2節 国際連合の成りたちと日本</p>	<p>国連と日本 ○経済社会理事会 ○日本は、国連をとおして、農業や「工業の技術などで たちおけているアジア・アフリカの国々をえん助す るために、各地に技術者を送っている。それらの国の 留学生が、日本の大学で研究し、技術を学ぶことがで きる」 (写真) ○国連本部前の日の丸 ○日中国交ひらく</p>
<p>第1章 地球儀と地図でながめた世界のようす 3節 世界の人々が住むさまざまな国</p>	<p>文化の進んでいる国 「日本はアジアから留学生の受け入れを行い、他の国に 留学生を送っている。世界には特色のある文化をもった国 々がある。」 (図)日本と交流し合う国々</p>
<p>第2章 世界各地の自然と人々の生活 2節 熱帯の自然と人々の生活</p>	<p>○緑の魔境アマゾン流域。 ○原住民のくらし(インディオ)。 ○年じゅう続く真夏の気候。 ○開発の試み。 ○ブラジル政府の移民の受け入れ。 ○日本人移民—アマゾン下流 流域の開発 (写真)○アマゾン流域の大密林地帯 ○インディオのすまいとくらし</p>

該当 ページ	指 導	書
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
	ために、いろいろな努力をしていることを理解させる。	<p>(補充資料)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○南北問題解決の必要性 南北問題の定義 <ul style="list-style-type: none"> { 解決の必要性 三つの指標 ○南北問題解決のための努力 <ul style="list-style-type: none"> 国連の「開発の十年」 アジアハイウェイ建設のための国際協力についてとりあげている。
85	国連とわが国との関連を明らかにし、国連に協力する姿を理解させる。	<p>(指導の観点として)</p> <ul style="list-style-type: none"> A A諸国への技術者の派けん } について触 留学生の受け入れ <p>れている。</p>
86	第二次大戦のわが国の産業の発達・発展について、自分の国に誇りをもたせたい。しかし、アジア・アフリカなどの国の援助から、それらの国々を軽べつしたり、自分の国が大国であるなどのうぬぼれの意識をもたないように配慮する。	
18	世界には、いくつかのことばが使われたり、いくつかの民族が集まっている国があることを知らせ、また、文化についても進んだ国、おくらしている国、特色をもった国があることを理解させる。	<p>補充資料として</p> <p>(図)世界の言語と文化地帯</p>
19		
26	○アマゾン流域の ①密林のようすと原住民の暮らしに目をひらかせる。	<p>(補充資料)○ブラジルの土地利用の割合</p> <ul style="list-style-type: none"> ○熱帯密林の分布(図) ○南アメリカの地形(図)
30	②気候の特色とこの地域の開発が進まない理由を気づかせる。 ③開発のすすめられている地域、その方法及び日本人移民の役割について目を開かせる。	<p>(解説)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○開発が進まないわけ <ul style="list-style-type: none"> ○1年中続く高温多雨の気候。 ○マラリヤなどの風土病。 ○交通路の未開発。 ○暗黒の大原始林。

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
	<ul style="list-style-type: none"> ○人力にたよる開発。 (図) ○世界の熱帯気候の所 ○アマゾン流域の密林 ○南アメリカの気温と降水量 ○日本人の移民

E 発行社 —小学校6年下—

<p>第3章 世界の自然と人々の暮らし 2節 さまざまな土地の暮らし 熱帯地方の人々の暮らし</p>	<p>熱帯の島での原始生活</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ボルネオ島ダヤク族の原始生活。 ○自給自足の原始生活。 (写真) ○ボルネオ島のジャングル ○ " " ダヤク族の生活 ○ジャワ島の農業 (図) ○ボルネオ島の土地利用 <p>熱帯の気候を利用した生活</p> <ul style="list-style-type: none"> ○エクアドル人の高原での生活。 ○密林の開発。 <p>エクアドル政府は、密林の開発によるバナナの栽培のため、いろいろと援助している。→このため、密林の開発がいっそう進み、農業の方法も進歩した。→物質や文化の外国との交流を深めている。</p>
<p>乾燥した地方の人々の暮らし</p>	<p>砂漠の中での遊牧生活</p> <p>砂漠での遊牧生活のきびしさを述べている。</p> <p>(図) サハラ砂漠とウズベク共和国の位置と砂漠の分布</p> <p>砂漠や草原に用水をひいて</p> <ul style="list-style-type: none"> ○草原を棉花畑に変えたウズベク共和国の人々 <p>乾燥地帯の開発。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○水(用水路) (図) ウズベク共和国の土地利用 (写真) ○ウズベク共和国の遊牧生活 ○ウズベク川の貯水池 ○ウズベク共和国の棉花畑 ○タシケントのにぎわい

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
		<ul style="list-style-type: none"> ○日本人の移住者について (補充資料) ○戦後における日本人のブラジル移住者(図) ○日本人の南アメリカへの移住者(表)

26 28	熱帯の島、ボルネオ島におけるきびしい自然と、そのきびしい自然に適応した高原での原始生活について、調べ、熱帯の自然と生活との関係に気づく。	(教材) <ul style="list-style-type: none"> ○熱帯気候の特色。 ○ボルネオ島について。 ○ダヤク族とその取り扱い方。 ○インドネシアにおける米作のプランテーション
29 31	熱帯のきびしい自然を生かしたエクアドルの産業開発と、そこで人々の生活の変遷について調べ、熱帯の自然の積極的利用によりくむ生活と苦心に気づく。	(教材) <ul style="list-style-type: none"> ○エクアドル。 ○パナナの生産。 ○ボルネオとエクアドルの自然。 ○ボルネオとエクアドルの人々の暮らし。 「自然への対処の仕方や、他地域との交流の有無により開発の度合が異なる」
41 42	サハラ砂漠におけるきびしい自然条件と、そのきびしい自然に適応したアラビア人の生活について調べ、乾燥帯の自然と生活との関係について気づく。	(教材) <ul style="list-style-type: none"> ○サハラ砂漠。 ○オアシスとオアシス農業。 ○サハラ砂漠における日較差。
43 45	きびしい乾燥帯の自然条件の中でも、人間は自然に適応した生活をしたり、また積極的に働きかけて生活を豊かにしてきていることを理解する。又世界の人々の未開発地域への協力や援助のようすを指導する	(留意点)：砂漠や、草原に用水路をつくることの意義や、その困難度を知らせるとともに、このような事業には、資金や技術等の面で、世界の人々の協力が必要なことを気づかせる。 (教材) <ul style="list-style-type: none"> ○ウズベク共和国と綿花の生産。 ○大フェルガナ運河の完成と綿花の栽培 ○首都のタシケント。

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
<p>第4章 結びあう世界 2節 物質や文化の交流</p> <p>3節 平和を求めて</p>	<p>開発のおくれた国との物質の交流(アジア・アフリカ)</p> <p>世界全体の繁栄のため、進んだ工業国の中で、開発のおくれた国々に対する援助をふやし、貿易を発達させようとし実行されている。</p> <p>(写真)横浜港についた外国の貨物船</p> <p>物質の交流と日本 貿易の自由化や開発のおくれた国への援助を行っている科学や技術の交流。</p> <p>「わが国では、農業や建設などのすぐれた技術が開発されています。これらの技術は、インド、東南アジア、南アメリカ、アフリカなどへ輸出され、それらの国々に対するわが国の援助として、産業の発達に役だっている。」</p> <p>(写真)日本の技術でできたメキシコの自動車工場</p> <p>交流をさまたげるもの 進んだ国と開発のおくれた国の中で、物質や文化の交流を進めているが、経済・政治上の問題でその交流がさまたげられることがある。</p> <p>(写真)東西に分けられたベルリン</p> <p>平和を守る活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ○国際連合の目的。 ○ユネスコの活動。 <p>(写真)国際連合本部</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
77 78	開発途上の国々との物質の交流のようすやその意味について理解する。 開発途上の国々の貿易を進めるには、進んだ国の援助の必要を理解させる。	(教材) ○乾燥帯の自然の特色から見た開発の意義 先進国の資金・技術の援助が期待される。 ○世界における乾燥帯への灌漑事業。 (教材研究)：日本の開発途上国援助を上げている。(1972年) 韓国、インドネシア、フィリピン、インド、バングラデシュ。援助の事例及びわが国の経済協力(1971年)を記述している。
79 80	科学技術の交流のようすを知ったり、文化や科学の交流の意味を理解する。	(教材)○すぐれた技術が開発されている。 ○半導体技術の開発。 ○万国博覧会のあゆみ。 文化や産業などの遅れている国の問題として ○第一次産業—資源産業。 ○技術者がいない。 ○資本金がない。 ○教育や訓練を受けていない。 ○人口は多いが働く者はいない。
82 85	物質・科学技術の交流をさまたげる問題のあることを考える。	開発途上国の実情 ○第一次産品の輸出—輸出価格不安定 ○工業製品の輸入 ○人口増加が開発の障害要因
89 90	国際連合の仕事や役割について理解する。	(国連の目的)：東南アジア・アフリカなどの文化・産業の遅れた国の援助 (ユネスコの活動)：産業や文化の遅れている国への援助 (教材)○安全保障理事会の任務や仕事。 ○ユネスコの成立。 ○ユネスコの目的。

抽出一覧表

F 発行社 —小学校6年下—

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
<p>第4章 世界の土地と人 1 節 わたしたちのすんでいる地球</p>	<p>世界の人々—人口 ○工業のすすんだ国々—人口のふえ方が減っている。 ○開発のおくれた地方(アジア・アフリカ・南アメリカ) —人口が急増している。 (図) 世界の人口分布 大陸別の人口の増加</p>
<p>2 節 さまざまな自然と生活 乾燥地帯のくらし—西南アジア</p>	<p>地下の水路—オアシス } 等の事例を上げ乾燥地帯の生活 草原と遊牧生活 } のきびしさを示している。 (写真) ○地下に水路をほりオアシスをつくる ○オアシスの村 ○ほそ道路をよこぎる陝商 ○遊牧民とテント (図) ○西南アジア ○地下資源の開発 (イランの油田開発) (写真) ○さばくをはしる送油管 (図) ○西南アジアの油田地帯</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
70	地域により、人口や人口のふえ方の違うこと、人々はそれぞれの地域の自然に働きかけ、産業を起していることを理解させる。	<p>(資料)○世界の州別人口(表) ○世界の人口密集地域(解説)</p> <p>(人口問題の解決策として) 高度の工業化、資源の開発、家族計画、海外移民。</p> <p>(子どもの考え方の傾向) 「人種問題や民族問題について、断片的な知識を持っている。人種・民族問題も、外国人への偏見とか、同和問題のような差別的感情といった具体的な事例からのアプローチが必要。幼いころからの人間愛の精神を育成することが大切で、世界平和と発展のためにつくすという考え方も、このような心情に根ざして、はじめてたしかなものとなる」と指摘している。</p>
71 / 75	乾燥地帯に住む人々は、自然と戦いながら苦しい生活をしている。豊かな生活への努力はしているが、自然的・社会的条件がこの地域の発展をはばんでいる。	<p>(解説資料) 遊牧民のテントとらくだ。</p> <p>(子どもの考え方の傾向) 「らくだを追う隊商や遊牧民の生活は、のんびりした楽しいものであると考えやすい。具体的な資料により、苦しい実際の生活を考えさせる必要有」と指摘している。</p>
76	西南アジアは、豊かな石油資源があり、アメリカ・イギリスなどの外国資本に開発されている。争いが起る。イランは、自分の力で石油資源の開発につとめている。	<p>○石油開発の資金が不足し、技術もおくれているために、先進国が進出してきたことにも注意させる。</p> <p>(解説資料) イランの石油探掘</p>

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
<p>熱帯の国づくり ーインドネシアー</p>	<p>○わが国の石油輸入先。</p> <p>○新しい開発 農業を進めるため、ダム建設等大がかりな開発行事が進められている。</p> <p>(図) ○世界の乾燥地帯 ○アスワンハイダム</p> <p>○とこ夏の間。</p> <p>○焼き畑と水田。</p> <p>○オランダ人の開発。</p> <p>○たちあがるインドネシア。 日本は、資金や技術援助また人物交流を通じ、インドネシアの開発に協力している。</p> <p>(写真) ボルネオの密林、焼き畑と小屋、ジャワのたな田、いねのとり入れ、ボロブドールの遺跡、ゴムの木から生ゴムをとる、日本の技術で石油の開発</p> <p>(図) インドネシアの人口密度 ボルネオとジャワの気候 インドネシアの生産物 インドネシアと日本の貿易</p> <p>熱帯の開発</p> <p>○未開発地の多い熱帯の密林。</p> <p>○開発しやすい熱帯の草原。</p> <p>○ヨーロッパ人による原住民の幸福をあまり考えなかった植民地の開発。</p> <p>○新しい国づくり。</p>
<p>第5章 平和への努力 1節 むすびついている世界</p>	<p>○うえている人々</p> <p>○ピアフラの独立宣言。</p> <p>○バングラディッシュの独立。</p> <p>○人口増加と食料不足。</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
77 78	乾燥地帯の農業は近代的な開発によって有望なものであるが、大地主の支配するおくれた社会のしくみが、この地方の発展をさまたげていることを考えさせる。	乾燥地帯の資源開発を人類のしあわせに結びつける為に、世界の国々の協力と科学の力による開発が必要。 (解説資料) イランにおける大土地制度の発達。
79 87	○ジャワ島のように早く開けたところと、ボルネオ・スマトラ島のように、おくれた地方との生活のようすのちがいを理解させる。 ○第二次大戦後、オランダの植民地から独立したインドネシアが、いろいろな問題をかかえながら、外国の援助をうけ国づくりに努力していることを理解させる。	発展途上国が、自助努力によって開発をすすめていくことができるような協力が必要である。日本は援助より貿易をさかんにするように、開発に必要な技術、生産拡大への意欲を刺激するような協力を行なっていることに気づかせる。 (解説資料) ○インドネシアの島々と歴史 ○インドネシアの産業 ○インドネシアの歩み等
87 88	生産力の大きい熱帯の正しい開発は、その土地の住民だけでなく世界の人々のくらしを高めるのに役だつことについて考えさせる。	子どものなかには、日本がなぜ協力するのか損をすることにならないかと考えている子がいる。ところが、熱帯の国々が平和と独立をまもりながら発展していくことによって、世界の平和がたもたれ、その地域の人々の収入がふえる。くらしがよくなることによって、日本との貿易もさかんになることに気づかせる。 (解説資料)アマゾン川の流域 コンゴ川の流域
106 107	世界では、うえとたたかっている人が沢山いて、うえとのたたかいを解決するためには、どのようにすればよいかを考え、それに世界の国々のむすびつきが、大切であることを理解させる。	(解説資料) ○ナイジェリアとピアフラ問題 ○インドの食料事情 ・バングラディッシュ ○世界の発展途上国

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
<p>第2節 平和のための協力</p>	<p>(写真) インドの子どもたち (図) 発展途上国の食料の需要と生産の見通し</p> <p>うえとのたたかい 世界中のうえをすくうための5項目。 (写真) タンザニアでやさいの栽培を教えている日本人</p> <p>国際連合 安全保障理事会 経済社会理事会 国連食糧農業機関 ユネスコ・ユニセフ</p> <p>の役割。</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
108 / 109		<ul style="list-style-type: none"> ○ 発展途上国への経済援助 ○ DAC加盟国による援助 ○ 日本の経済協力機関として 海外経済協力基金、海外技術協力事業団、アジア経済研究所、海外技術者研修協会、その他 ○ 先進国の経済協力(表)
119 / 120	世界の平和を守る国連は、国々の争いのもとや、利害の対立をなくすため、いろいろなしくみを通して協力していることを理解させる。	(解説資料) 国連の各機関についての説明

抽出作業を終えて

調査担当委員の所感

吉 野 貴美子

小学校の段階では、南北問題を南北問題として取りあげることはないので調査の視点を1.世界の平和や国々の発展のために、国際理解・協力が必要であると触れている所、2.さまざまな国を対比させながら開発のための援助や協力が必要であると述べている所、3.特に、地理の範囲で、文章や写真・図など全体から、開発がおくれている地域があることを理解させようとしている所に定め、みてることにした。

調査対象としたのは、6社である。5年下で前述の視点にあてはまる記述を載せているのは4社、6年上は5社、そして6年下は6社であった。

当然のことであるが、教科書によって、問題へのアプローチの仕方やとり扱い方が異なっている。しかし、全体的にみると、記述が抽象的であり、「貿易がさかんになるためには、何よりも世界が平和で、国々がたがいに理解しあい、なかよく助け合っていくことが大切です。」とか、「日本は開発をすすめているアジアやアフリカの国々へ資金や技術の援助をしています。」といった表現に終わっていることがわかる。それらの点に分析の主眼をおいたが、特に小学生の場合は、教師の指導の仕方に左右される割合が大きいので、教科書に付随する指導書の内容についても、あわせて分析してみた。

教科書の内容

1. 掲載内容

○産業（5年下）

「日本の工業」の章で、日本の貿易を盛んにし、工業を発達させるためにという視点から、①世界が平和で、国々が互いに理解し合い助け合うこと、②日本の優れた技術を今後の世界の国々の開発のために動かせること、③東南アジアなどの工業のおくれた国に資金や技術の上で援助すること、④貿易相手国の産業の発展をさまたげないよう調和のとれた貿易を進めること、などをあげ国際理解・協力の必要性に触れている。性能が良く安い日本商品

の進出に対し批判が生じていること、世界の国々が仲良く暮らすため、相手国の立場も考える必要があるとしているものもある。国際理解・協力はおろか、世界の国々との関わりという観点からの記述が全く見られない教科書もある。

この頃の指導書は、貿易を盛んにするためという教科書の視点にはほぼ対応しているが、1社だけが、日本の援助の形態を、開発援助・開発協力を平和部隊としその中で、日本青年海外協力隊の説明をしていた。その他、開発途上国の技術援助として工場・ダム建設を事例として記しているものもあった。

○歴史(6年上)

「日本のあゆみ(歴史)」の章の中で、戦後の世界の動きとして、①国際連合が誕生したこと、②アジア・アフリカ諸国が植民地から独立したこと、をあげている。また、日本は産業の発展に伴い、国際社会における地位を高めたが、今後の課題として、①開発のおこなわれている国々への資本や技術の援助の促進、②世界の国々との結びつきをさらに深め、平和で豊かな世界を築くための努力、が必要である、と指摘している。

この項の指導書は、戦後の世界の変化及び日本の発展と今後の国際社会での課題に視点を置き、国連の成立、二大陣営の対立、アジア・アフリカ諸国の独立について解説を加えているが、アジア・アフリカ会議について触れている指導書もある。小学校段階でのこの種の学習においては児童が実感をもてるような、具体例がほしいように思えるが、開発途上国への資本・技術の援助についてその種の具体的事例が取りあげられていないのは、残念なことである。

○地理(6年下)

「世界の自然と人々の生活」の章で、熱帯地方と乾燥地帯の人々の生活について触れた部分である。

熱帯地方、乾燥地帯ともに、未開発な地域と比較的開発の進んだ地域を対比させながら、そこに住む人々のよりよい生活への努力を考えさせ、同時に、まだまだ開発の余地があり、そのためには、進んだ国々の援助・協力が必要であると教えるようにしてい

る。しかし、一社の教科書は、石油資源開発のため、大国の資本が入り、争いが起る場合もあり、自力で開発に努めている国もあることに触れている。

熱帯地方は、ボルネオ島とジャワ島、ボルネオ島とエクアドル、アマゾン流域と他の熱帯地域、密林に住む人と熱帯の草原に住む人などを対比させている。前者は、原住民の焼畑農業による原始的な生活や高温多雨のジャングルでの原住民の生活に触れ、後者は、前者と気候条件は変わらないにもかかわらず、人々の開発への意欲と努力により、プランテーションもとり入れた農業が盛んに行われていること、また地下資源の開発も進められていること等について記述している。さらに、これらの地域と日本との関係に言及し、「資金や技術援助・留学生の受け入れを通して開発に協力している」「東南アジアの国々の開発に力をかけているが、真に各国の発展に役立つ協力がのぞまれる。」等の説明を加えている教科書もある。この項は、南アメリカの日本人移住についても触れている。

乾燥地帯の部分では、未開発の砂漠のくらしとして、サハラ砂漠の遊牧民の生活のようすをあげ、家畜を追っての遊牧生活は厳しく不安定なためオアシス周辺に耕地をつくり定着する人が増えているとの記述も見られる。開かれた乾燥地帯として、ウズベク共和国の棉花畑、イランの油田、農業を進めるためのダム建設としてアスワンハイダムの事例が取りあげられている。

なお、人口問題にも触れ、工業の進んだ国は人口の増え方が減っており、アジア・アフリカ・南アフリカ等の開発のおくれた国々は人口が急増していると指摘している教科書もある。

地理は全般に、写真の掲載数が多く、熱帯や砂漠の住居・農業・人々の生活のようすを目で理解することが出来、日本と比べると生活の状況はかなり遅れていることがわかるようになっている。

この項の指導書は、①開発の度合の違いは、人々の開発への意欲と努力及び他地域との交流の有無によること、②先進国の進んだ技術と資金の援助による開発の必要、を共通して指摘しているが指導書としては、これだけの指摘でよいのだろうか。さらに、人種・民族問題の取りあげ方にふれているもの、日本との関係を貿易面だけ

でとらえるのではなく、留学生の交換、技術援助、芸術・文化の交流をあげ学習を進めるよう指摘しているものがある。なかには、「文化について、進んだ国、おくれた国、特色をもった国があることを理解させる。」と記述をしているものがあるが、進んだ文化、おくれた文化という対比で子どもの理解をもとめることは、外国理解について誤った先入観を与えることにはならないのだろうか。

○ 平和と国際関係

「結び合う世界と平和」の章では、①経済や文化の交流と、②平和への努力の項が関係してくる。

開発の援助や協力のため、世界銀行を通して進んだ国が資金や技術の援助に努めていること、特に日本の援助として、アジア・アフリカの国々へ資金や技術援助を行い、それらの国の産業の発展に役立っていることが紹介されている。さらに、進んだ国と開発のおくれた国の交流が経済・政治上の問題でさまたげられることもあると指摘しているものもある。

ただ一冊だけであるが、「うえている人々」という項を設け、ピアフラとバングラデシュの戦い、人口増加と食料不足の問題をとりあげているものがあった。

平和への努力の項では、国際連合に触れ、その目的と安保理・ユネスコ等関係機関の役割、日本が国連で果たす役割を説明し、日本は国連を通して、アジア・アフリカに技術者を送ったり、留学生を受け入れていることの指摘も見られた。国際連合貿易開発会議の開催に関連し、「北半球に多い工業の進んだ国々と南半球に多い開発の遅れた国々との経済問題をめぐって……」と南北の問題を記述しているものが1冊ある。

この項の指導書では、一社のものだけが、教科書と直接関係なく、南北問題をとりあげ、その定義、解決の必要性、開発途上国の識別基準を解説している。また日本の援助の形態や経済協力の実態に触れているものもある。

掲載量、表現、資料について

- 1) 量：南北問題に触れたのは1カ所だけである。その他につい

ても、地理的部分を除くと、量が多いとはいえない。国際理解や協力のあり方が今後の日本を左右することを考えると、小学校において基礎的な考え方を身につけさせる必要があるし、そのために十分な量が割当てられているとは考えにくい。

2) 表現：最初に述べたが、抽象的、建前の表現が多く、子ども達の胸に焼きつくような提示がなされていない。また、用語も、同じ教科書がある時は低開発国、ある時は開発途上国ということばを使い、その教科書に付随する指導書では発展途上国と書れるなど、一貫性が見られない。これは単に用語の一貫性だけの問題ではなく、南北問題、あるいは開発援助についての執筆者たちの理解を疑わせるものである。

(例) 低開発国、後進国、発展途上国、開発途上国、後発国、開発のおくれた国々、開発をすすめている国々、工業のおくれた国々。

3) 写真：教科書によって、掲載写真数やその内容に大きな差が見られる。例えば、カラーグラビアの扱い方も、南の開発途上国の様子を数多く載せているものもあれば、一枚だけというものもある。写真説明は、例えば「アフリカで農業の指導をする日本人」式のものが多いが、「農林省から派遣されアフリカで農業の指導をする日本人技術者」あるいは、「タンザニヤで現地の人々と生活を共にしながら農業の指導をする日本青年海外協力隊員」など具体的な説明を添え、子ども達が少しでも身近なものとして受けとめられるものが望ましいのではないだろうか。

4) 資料：グラフ、数表がかなり多く用いられている。しかし、昭和51年度使用の教科書なのにもかかわらず、かなり前のデータが示されているものもあった。

指導書の内容

教師用教科書といわれる指導書をみると、教科書会社が、それぞれの教科書をどういうふうに使って教えてほしいと思っているかがわかる。教科書の補助資料としてその内容を見ると、すでに個々の点ではふれたが、總体的にみるとどのような順序で教えるかといっ

た種類のテクニカルな内容が多くを占め、教科書が提示しているさまざまな事象や概念の思想的・歴史的背景に迫っていくような深い生きた解説にとほしい。また着重点・留意点として上げている内容と提示される資料との間に明確なつながりがあるとは、必ずしも考えられないケースも目につく。一考を要する。

南北問題について解説を加えたものは6年下で1冊だけである。国際理解・協力についても「低開発国に対して、日本の資本や技術は大事な役目を果たしている」「これからの日本の課題は、後進国の開発と平和で豊かな世界の建設である」など、教科書の記述と大差ない場合が多い。

所 感

南北問題あるいは国際理解・協力という視点で教科書をながめてみると、その記載量・質共に充分でないというのが1つの感想である。教科書の国際理解・協力の視点は、1.日本の経済・貿易を発展させるために、2.日本の経済進出に対する批判が出ているのでそれに対処するために、といった経済本位あるいは日本人本位であり、相手国の立場を考えてとか世界人としてという広い視野からのアプローチは残念ながら見られない。これは資源の少い、多くの人口をかかえた島国が、国民の一定の生活水準を保ちながら生きのびていくためには仕方がない、あるいは当然であるという考え方もあろう。しかし、経済最優先の日本人の生き方が、国際社会の中でどう受けとめられ、評価されているかを、最近の諸情況と合せて考えた場合決して楽観ばかりしてはいられない。日本人の将来を考えるからこそ、競争より協力により、共に生きのびることを考えなければいけないのではないか。

また、経済最優先の考え方はすでに指摘したように、文化がおくれている、進んでいるという判断の基準にまで及んでいるが、これは生徒に視野の狭い間違った文化観を与えてしまうのではないかと心配である。

飢えや人口の問題を扱っている教科書は、唯一冊であったが、何不自由なく、過保護に育てている今の子供達に、世界の2/3の人

口は飢えているという厳しい現実をもっともっと知らせることが必要である。飢えという事実は、子供達が生々しく受けとめ、かつ他への思いやりという素朴な気持を引き出しながら、他の困々の人々への協力や援助が必要だという理解に素直に結びつける題材として極めて有効なものだと思われる。そのことを、十分に理解すれば、「給食を残さないで食べなさい。」と叱らなくとも、給食を食べる生徒の姿勢は違ってくるのではないかと思うのだが、これは甘すぎる期待であろうか。

国際理解・協力を扱っている大部分は6年下の最後に国連、ユネスコ、赤十字等の活動紹介と共に触れられているが、学期末にさらっと流してしまう場合が多いという。中味の充実と共に、実際に必要な時間をかけて教えるという先生方の配慮を願いたい。

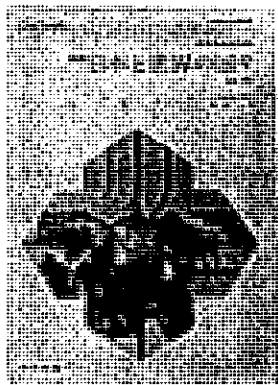
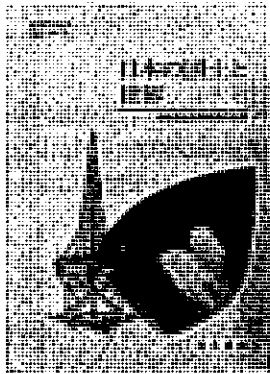
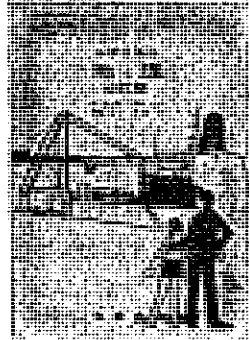
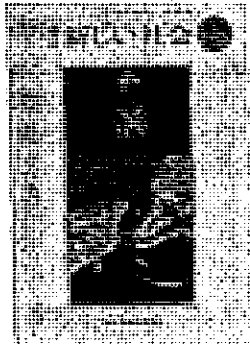
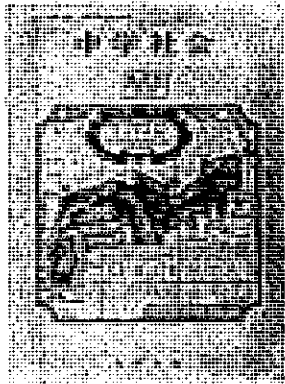
最後に、教科書は、その性質上、事実を客観的に収録すべきものなのだろうが、あまりにも公式的な見解で材料を料理していて、無味乾燥という印象も受ける。先生方が様々な補助教材を利用しながら、できるだけ生きた教育をする努力をおしまないことを望むと共に、何もかも網羅するのではなく、今、何が重点的に教えられなければならないかを考え、さらに編集者や先生方の自由裁量の効く余地のある、個性を持った教科書づくりができるようになることを期待したい。

中学校 地理的分野

記載箇所の一覧表と
調査担当者の所感

調査担当委員

宮 崎 幸 雄



抽出一覧表

A 発行社 —地理的分野—

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
<p>■ 世界とその諸地域 第1章 世界の自然と人々 4 世界の人々 〔世界の人口分布〕</p>	<p>近年の急激な人口増加により食料をはじめとする資源の不足が予測される。</p>
<p>第2章 世界の諸地域 1 アジア (1) 土地と人々 〔立ちあがるアジア〕</p>	<p>第二次大戦後、欧米諸国の植民地であったアジアの諸国が民族主義に基き、独立を達成していったが、教育や産業のおくれのため生活は貧しく、国家の建設に他の国からの援助を受けている。日本も貿易に加え、経済援助や技術指導に協力している。</p>
<p>(3) 東南アジアの国々 〔新興の国々〕</p>	<p>東南アジアが植民地となり、そして大戦後独立していく過程。日本と東南アジアの結びつき。その中で、最近の経済協力が経済進出に等しく、相手国の感情を害している。</p>
<p>〔インドシナ半島の国々〕</p>	<p>インドシナ各国の産業構造にふれ、メコン川流域総合開発には日本も援助している。マレーシアやシンガポールが複合民族国家としての悩みがある。</p>
<p>(3) 東南アジアの国々 〔マライ半島の国々〕</p>	<p>マライ半島の国々のプランテーションとその作物について触れ、地下資源の開発には日本も参加している。</p>

該当 ページ	指導	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
174	○世界の人口分布の現状とその背景を理解させる。	○世界の人口密度（教科書の地図）の解説。 ○人口密度の粗密差は自然環境と経済の発展段階の差から生じる。
179-180	○アジア諸地域の歴史の概略と新興国家の問題に目を向けさせる。 ○アジア諸国と日本の関係を理解させる。	○アジアの独立国と植民地の変化（教科書のグラフ）の解説。 ○アジアへの援助（教科書のグラフ）の解説 一経済援助には、①資本協力と②技術協力があるが大半が民間の信用供与や直接投資である。 ○援助は何らかの意味で政治的であり、余り自分の経済的利益追求が強いと相手の民族意識を刺激する。
195-195	○東南アジア諸国の独立の過程と国づくりの悩みを理解させ、日本との結びつきを考えさせる 「エコノミックアニマル」の実態を考えさせる。	○東南アジアの国々の一般的発展の解説。（植民地→独立国）
196-199	インドシナ半島の各国の産業や民族の特色 米の生産性の低さ、そして日本の技術援助の重要性を理解させる。	○主な国の米の生産と1 ha 当たり収量（教科書グラフ）。 ○世界の米の移動と緑の革命の解説（教科書グラフ） 奇蹟の米について。 ○東南アジアの主な農産物の解説（教科書グラフ）。
199-200	○プランテーション（熱帯農業）の内容とその変化、及び植民地型経済の理解。	○東南アジアの地下資源や輸出品（教科書グラフ）の解説。 ○熱帯農業による作物（教科書グラフ）の解説。 開発の進まない現状の説明。 ○日本の東南アジアへの経済援助についてー ーコロンボ計画から賠償、そして70年代におけるアジアへの援助強化。

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
<p>(4) 南アジアの国々 〔 変わりゆく南アジア 〕</p> <p>〔 インド 〕</p>	<p>南アジアの国々では長い間イギリスの植民地であった。カースト制度のために近代化がおくれた。</p> <p>インドの農業(食料不足)と工業の概略。</p>
<p>(5) 西南アジアの国々 〔 石油で生きる国々 〕</p> <p>(資 料) アジアの現状と課題</p>	<p>西南アジアの石油開発と石油の動きは国際間の政治・経済に大きな影響を与えている。</p> <p>(グラフ・地図)</p> <p>①世界の人口増加、穀物生産・国民所得。 ②アジア諸国の人口増加率と一人当たりの国民所得。 ③アジア諸国に対する主な国々の経済援助。</p>
<p>Ⅱ 世界とその諸地域 第2章 世界の諸地域 4 アフリカ (1) 土地と人々 〔 未来をめざす新しい国々 〕</p> <p>〔 開発途上の熱帯アフリカ 〕</p>	<p>1960年前後のアフリカでは、多くの国が独立を達成したが、産業構造等のおくれのため、工業国との経済的格差が増大し、アフリカ統一機構をつくり団結をはかっているが、反面、旧本国や外国からの援助に依存する傾向も強い。</p> <p>日本は各国の農・工業の技術指導に協力している。</p> <p>ギニア湾北岸の西アフリカ諸国の産業構造の概略とその開発の実状の説明。(例)ガーナのボルタ川開発計画。</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
202	近代化を進めるにあたっての問題点や人口問題を理解させ、一国の中での貧富の差に眼を向けさせる。	○カースト制度の解説。 ○南アジアの多様性について。
203-204	農業の現状と、国土の開発や近代化の努力とその困難さを理解させる。(南アジアは経済的だけでなく政治的にも不安定。)	○南アジアの農業分布と主な農作物の対世界比(教科書のグラフ)の解説。 ○南アジアの地下資源と工業の分布(教科書グラフ)の解説。
207-208	石油供給地域としての発展途上国と、石油需要国である先進国の関係を考えさせる。	○世界の石油の移動(教科書グラフ)の解説
209	○戦前・戦後のアジアと日本の結びつきを考え、何故最近エコノミックアニマルと呼ばれるにいたったのか、又日本は何を求められているのかを考えさせる。 ○アジア諸国の貧困とその原因に眼を向けさせ、経済援助のありかたを考えさせる。	○戦前・戦後のアジアと日本の結びつきの解説。 ○エコノミックアニマルの説明。 ○日本の求められているもの 脱アジア的日本の近代化が、反発をうけた。日本はアジアを利用するのではなく、アジアのために真の援助をしなければいけない。 ○日本の政府ベース援助の解説。
245-246	アフリカの未開発は、自然条件だけでなく社会条件も大きいことに眼を向けさせ、経済的自立の困難さや援助について考えさせる。	○アフリカの植民地の歴史と現在に至る過程の解説。 ○独立の増加(教科書地図)の解説。 1974年43独立国。
251-253	恵まれた資源をもちながら、開発のおくれていた熱帯アフリカの開発への努力に眼を向けるとともに、その開発が外国の資本や技術で進んでいる姿を理解させる。	○アフリカの農業地帯の解説。(教) ○ボルタ川総合開発計画(教科書の地図)の解説。 ○コンゴ(キンジャサ)の困づくりにおける

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
<p>(資 料) アフリカの現状と課題</p>	<p>(グラフ・地図) ①アフリカの主な国々の輸出。 ②石油生産に力める各国資本の割合と石油生産の増加。 ③アフリカにおける日本の技術協力。</p>
<p>6 ラテンアメリカ (移住) (1) 土地と人々 [ラテン民族の新天地]</p>	<p>明治以後、日本から多くの移住者が進出している。</p>
<p>第3章 世界の諸地域の結びつき 2 世界の貿易 [世界貿易の当面する問題]</p>	<p>増大する先進工業国の貿易と、のびやかな発展途上国の貿易。その経済上の開きを縮小する「南北問題」の重要性。</p>
<p>Ⅳ 世界の中の日本 第1章 世界からみた日本 1 世界と日本 [多極化する世界] [日本の国際的立場]</p>	<p>近年アジア・アフリカ諸国は、国連加盟国の約半数を占め、国際政治の上でも発言力を増している。発展途上国の地位を①国連加盟国数(1973年)②総人口③輸出総額④国民総生産のグラフで示している。</p> <p>日本はアジア第一の工業国としても、経済協力開発機構(OECD)の一員としても発展途上国の援助に努めている。又アジアの国々も日本の技術や科学の援助を期待している。</p>
<p>3 日本の海外交通と貿易 [これからの貿易]</p>	<p>貿易自由化のはげしい競争の中で、日本は、日本商品の信用を高めるとともに、多くの国々と経済協力を進めていくことが大切である。</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
255	アフリカ諸国の不安定な貿易構造、最近の資源ナショナリズムを理解させ、日本の技術協力の意義と動向を把握させる。	部族意識と国家としての連帯意識の問題の解説。 ○輸出品構成における一次産品の問題。 ○石油生産と外国資本。 ○アフリカにおける日本の技術協力の解説。 日本の経済的・技術的協力はまだまだ少ない。
(275-276)	ラテンアメリカには日本の移住者も多い上、近年は貿易の他に、資源の開発にも参加している。	○日本からの移住者(教科書統計)の解説。
302	国際分業による先進国型と発展途上国型の貿易品の流れを理解させ、現在の世界貿易の動向と諸問題を把握させる。	○南北問題の解説(GATT、IMF体制における発展途上国の不利は否めず、この体制の修正が南側より求められていて、1964年の国際貿易会議(UNCTAD)以後、南北の対立が国際化)。 ○自由貿易と保護貿易について。
304-305	多極化する世界情勢を理解させる。	○教科書の国民所得のグラフの補足説明として同じ国内での所得格差の説明。 ○発展途上国の地位(グラフ)の解説 先進国との経済的側面の格差。
304-306	○日本をとりまく国際情勢に眼を向け、経済協力、南北問題解決における、日本の責任を、世界平和と繁栄という基本の中で考えさせる。 ○大国意識や自国繁栄中心の狭い視野をいましめる。	○経済協力開発機構の解説。 ○日本の経済協力の解説(経済協力の推移のグラフと経済協力機関の説明。—海外技術援助協力事業団etc.)。 ○日本の低開発国援助に対する批判 みみちちくてがめつい。
320	○日本の貿易の今後について考えさせる。	○低開発国が日本に対して最も望んでいることは現地で加工することであるという説明—フィリピンのラワン材輸出の例。

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
----------------------	--------------

B 発行社 —地理的分野—

<p>第11章 アジア (プロローグ)</p>	<p>アジアの国々は一般に貧しく、日本や西ヨーロッパ諸国、アメリカ合衆国のような開発の進んだ国々とは大きなちがいがみられる。それは19世紀の中ごろから、日本など一部の国を除いて、西ヨーロッパ諸国や合衆国などの植民地となり、開発が遅れたためである。</p> <p>第1次、第2次の2度の世界大戦ののち、これらの国は次々に独立したが、経済の力が弱い。先進諸国から資本や技術の援助を受けるなどして、経済の発展に努めているが、先進国の影響をつよく受けるなど、それに伴ういろいろな悩みもある。</p>
<p>2 東南アジア あゆみ</p>	<p>東南アジアの国々は、タイを除くと、すべてヨーロッパ諸国や合衆国の植民地で、本国の求める原料や食料の生産地であり、また本国の工業製品の市場とされていた。そのため、外国人の経営する大農園が発達したが、現地人の経営する米作などの農業はおくれたままとり残された。また近代工業の発展もおさえられ、住民の多くは貧しく、文字の読めないものが大部分であった。これらの国々は第2次世界大戦後に独立を獲得したが、国内の政治は不安定で、外国の勢力も加わって戦争がつづいた国もある。(中略)工業をおこし、産業・経済を発展させようとしている国もあるが、資本や技術が不足しているため、合衆国、ソ連、ヨーロッパ諸国、日本などから援助を受け、資源の開発や工場の建設をすすめている。</p>
<p>米作とプランテーション</p>	<p>東南アジアの農業は米作とプランテーションに代表される。</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要

186-187		「ヨーロッパ諸国のアジア進出」年表。 「先進国からの資本や技術の援助」
199	①欧米諸国の植民地経営のあらわれについて具体的に理解させる。とくに、支配されたため国としての方針がたてられず、本国のための供給地になり、近代化がおくれた原因になったことを理解させる。 ②独立後も資金がなく、技術水準も低いため、多くの先進諸国の援助をうけていることを理解させる。	「東南アジアの近代化のおくれ」 —岩村忍氏による、特徴20項目— (1)人口1人あたりの低生産性、(2)第1次産業への高い依存度、(3)低い労働雇用、(4)低い労働能率、(5)児童労働、(6)不均衡な消費、(7)労働への軽視、(8)高い出生率、(9)高い死亡率、(10)高い文盲率、(11)不均衡な教育、(12)生活に対する不安感、(13)固定的価値観、(14)強い宗教的儀礼、(15)集団的排他性、(16)強い血縁的・地縁的結合、(17)個人関係の重視、(18)弱体な中間階層、(19)権威主義的制度、(20)世界的視野の欠乏 これらは個々ばらばらでなく、複合して社会を形成している。これらは、植民地時代の後遺症であるものが少なくない。
200-202		「プランテーション」等について説明、 メコンデルタの米作 インドネシアのたな田

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
開発をまつ資源	<p>栽培技術の水準も低いので、単位面積あたりの収穫は、日本の約3分の1である。</p> <p>(中略) マレーシアの天然ゴムは、その大部分がイギリス人の所有するプランテーションで栽培されている。</p> <p>(中略)</p> <p>インドネシアのさとうきび・コーヒー・茶なども、かつてはオランダ人が経営するプランテーションで栽培されていたが、独立後はすべて国が経営している。</p> <p>東南アジアには、木材や鉱産物などの資源が豊富で、先進国の資本によって開発され、それらの国へ輸出されている。(マレーシアのすずやインドネシアの石油等のように、外国の会社が経営する鉱山から採掘されている。しかし、北ベトナムの石炭やスマトラの石油などのように、国営のものや、日本など外国との協力によるものもみられる。(中略) 水力資源も豊富で、南ベトナム・タイ・ビルマなどでは、日本などの協力によってダムをつくり、かんがいや水力発電に利用している。</p>
「東南アジアと日本の経済進出」	<p>日本の援助</p> <p>東南アジア諸国の対日反感</p> <p>資本や技術面の援助強化で解決できる。</p>
3 南アジア あゆみ	<p>イギリスの勢力がこの地方へ進出し、19世紀の中ごろにはその植民地にされた。</p> <p>(中略) インドでは古くから綿織物の手工業がさかんで製品は輸出されていた。しかし、産業革命後、イギリスの綿工業がさかんになるとインドは棉花の供給地及び綿製品の市場にされ、綿織物の生産はおとろえた。(中略)</p> <p>(インド・パキスタン・スリランカ・バングラデシュなどの) 国々では、イギリス・合衆国・ソ連・日本などの先進諸国の援助をうけ入れて産業の発展に努めているが住民の生活はいっばんに貧しい。</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
203、205	豊かな資源をもつ東南アジアは、先進諸国によって開発されていることを理解させる	「メコン川の開発」 アメリカ合衆国が本流を、日本、カナダ、フランスほか数カ国が支流を担当し、流域の調査を進めている。 「インドネシアの資源」
203	東南アジアへの日本の進出の実情を理解させ、援助のあり方、相手国の立場にたった考え方を養う。	「東南アジアと日本」 図版解説「東南アジア諸国の貿易に占める日本の割合」 「タイに進出した日本企業の広告」 「東南アジアの輸出品」
206	①イギリスの植民地後、インドがイギリスの食料原料供給地・市場として従属させられたことを理解させる。また、イギリスの進出と世界史の中に位置づけたい。 ②南アジア諸国は独立はしたものの、国家として統一されず、発展途上国となっていること。 ③それは、植民地時代をもったことのほか多宗教・多民族・多言語・文盲・カースト制の残存など、文化的な要因が大きいこと	「イギリスの進出と独立の動き」

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
南アジアの農業	南アジアの住民の約70%は農業に従事し、多くは大地主のもとで、小規模な農業を営んでいる。ヒンドスタン平原、ガンジス川下流、半島部などでは、年に一度の雨季に米をつくっているが、かんがい設備がととのわず、栽培技術もおくれ、そのうえ人口の多いこともあって、インドやスリランカでは、外国から食料を輸入して、不足を補っている。
「発展途上国の食料問題」	インドを例にとり、途上国の人口問題と食料問題の悪循環を解説。 国民の大半が貧しい 人口増加が著しい 食料不足 農業施設の不十分さ 外貨不足 e t c .
工業化への努力	(インドでは)独立後は、先進国の経済援助などもあって、インド東部の国営の製鉄所をはじめ、機械・化学・紡績・繊維物などの工場が各地に建設された。(中略)インドは、日本と中国に次ぐアジアの工業国となっている。
南アジアの総合開発	インドでは、複雑な社会制度、いく種類にも分かれている言語、人口の大幅な増加などが、国の発展を妨げる原因となっている。そこで政府は公用語をきめたり、教育の普及をはかったりして、古い社会制度をなくそうと努力している。
4 西南アジア あゆみ	この地域ではかつてフランスやイギリスが勢力をもっていたが、第1次世界大戦後から独立運動がさかんになり、独立国となった。

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
207、209	<p>を把握させ、多くの障害を理解させる。</p> <p>・農業技術や農業経営からみて、近代化がおくれ、生産が高まらないことを理解させる。このような農業地域が形成されたことを、植民地時代にイギリスに影響をうけたこと、社会の複雑さ、自然との関係などから考えさせる。</p>	<p>「インドの農業」 } 指導資料解説。 「小作人の生活」 「インドの農業」</p>
208	<p>インドを事例として、食料ききんの発生、農業の近代化のおくれ、人口の爆発的増加などと関連づけて理解させる。</p> <p>経済的な自立のおくれ、社会制度などの近代化を阻むものなどとも関連させて、食糧問題は世界的な問題になっていることを理解させる。</p>	<p>「各国の1人あたり1日の摂取カロリー」 「インドの人口増加と食料生産の推移」 「インドの農業と問題点」 「緑の革命」 「食料需給の見通し」</p>
209-210		<p>「インドの工業」 「インドの開発」 「インドの貿易の移りわかり」</p>
211	<p>南アジアの複雑な社会について、近代化を困難としている大きな要因となっていることを把握させる。</p>	<p>「複雑な社会」 インドのカースト制度 200種の言語、宗教と生活などが複雑にかみあい「生きている古代」ともいわれている。</p>
212-213	<p>複雑な民族構成と植民地支配などのあゆみに簡単にふれ、イスラエルをめぐってアラブ諸国が対立している実状を理解させる。</p>	

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
石油の生産	<p>(前略) ペルシア 湾沿岸は、世界有数の大油田地帯として、各国から注目され、国際的な争いのもととなることもあった。(中略) 採掘された原油は、ヨーロッパや日本へタンカーで輸送される。(中略) これらの国々は、自国の力で油田を開発することができなかった。近代的な設備で石油を採掘するようにしたのは、イギリス、フランス、合衆国などで、現在では合衆国の大会社がその中心になっている。日本も、ペルシア 湾で海底の石油を採掘している。</p>
「石油産出国の動きと石油資源」	<p>西南アジア諸国が利権料をもとに国内の産業を開発、経済援助も行なっていること。 O P E O 結成。 資源ナショナリズムのうごき。</p>
第12章 アフリカ (前書き)	<p>アフリカは、アジアと同じように経済的におくれた国が多い。そこで、先進諸国からの援助により経済の発展に努めているが、効果があらわれていない。それは、長い間ヨーロッパ諸国の植民地となっていたことや、自然条件がきびしいこと、また住民・言語・習慣が複雑で、それぞれの国が、ひとつの国としてのまとまりが弱いことなどによるものである。</p>
1 北アフリカ あゆみ	<p>北アフリカは(中略) 19世紀になってイギリス・フランスなどの植民地となった。エジプトは1922年に独立し、(中略)、アルジェリアなどの国々は、はげしい民族運動の結果、第2次世界大戦後に独立した。</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
213	産油国は石油収入が財政上大きなウエイトをもっていること、産油国と消費国の関係を、最近の重要資源としての石油という面から、産油国の立場がよまったこと、日本がこれら採掘をめぐる問題の中に参加したことなどを把握させる。	
214	世界の石油資源の分布が、利用の多い先進工業国に少なく、発展途上国にかたよっていることに気づかせる。この中で、西南アジア諸国の世界にしめる地位の高いことを把握させる。 発展途上国や石油の開発をこれらの国々の歴史的経済的背景との関連で理解させる。利権料の用途について、国によるちがいのあることに留意する。	「OPECとOAPEC」 「国際石油資本」 「石油産出国の資源ナショナリズムの動き」 図版解説 「石油産出国の政府収入にしめる石油収入の割合」 「世界の石油の産出量と埋蔵量」 「マレーシアのゴムのプランテーション」 「複合国家 インド」 「西南アジアの原油—世界における位置」
218—219	○アジア諸国よりも独立がおくれ、発展にも多くの問題があることに気づかせ、地域の学習の課題として考えさせる。 ○アフリカ大陸全体の自然の特色を理解させると同時に、この自然の特色と開発の後進性との関連に気づかせる。	図版解説「アフリカの生活水準」 「アフリカの国々」 南アフリカの独立と非独立地域について説明されている。
219		

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
さばくの中の油田	石油は送油管で地中海沿岸に送られ、おもにヨーロッパへ輸出されている。アルジェリアでは、国営の会社によって石油を採掘する計画がすすめられている。
2. 中・南アフリカ あゆみ	この地方には、かつては黒人の国が栄えていた。しかし16世紀ごろから、ヨーロッパ人によって多くの黒人がどれいとしてつれ去られるようになり、19世紀の後半になると、フランス・イギリス・ベルギー・ポルトガルなどのヨーロッパ諸国が、エチオピア、リベリアなどを除く大部分の土地を植民地とし、黒人の国はほろびた。第2次世界大戦後、植民地は次々に独立し、ガーナ・ナイジェリア・ケニア・ザイールなど多くの国が生まれた。しかしアフリカ諸国は、長い植民地時代を通じて、一部の鉱業や農業のほかは、産業・経済の発達がおさえられてきたうえ、独立後まもないこともあって、経済の力が弱く、言語や宗教もさまざまであり、部族間の対立もあって、独立国としてのまとまりが弱い。そのため、先進国の政治的・経済的な影響をつよくうけている国も多い。
プランテーションと現地人の農業	東部の高原地帯や南部では、ヨーロッパ人は大規模な農地と牧場で、羊や牛を飼ったり、コーヒー、シガール麻、さとうきび、たばこ、ココヤシなどのプランテーション経営をしたりしている。 いっぽう現地人は、原始的な農業に従事したり、小規模な農地でとうもろこしやいも類の自給用作物を栽培したりしている。また、プランテーションで働いたり、都会や鉱山に働きに出たりする農民も多い。独立後は、土地をもち、自立する農民もあらわれている。
鉱産資源の開発	ザイールから南アフリカ共和国にかけての地域は、鉱産資源に非常にめぐまれている。(これらの資源は)おも

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
219-220		「ナハラ砂漠の石油」 生産量、推定埋蔵量、輸出先
222-223	ヨーロッパ諸国の植民地となっていく過程の中で、現地人固有の国家や文化が崩壊し生産活動が停滞したこと、これが独立後に与えている影響について考えさせる。	「アフリカの発展のための組織・動き」 ①アフリカ統一機構。 ②アルジェリア憲章。 ③アフリカ開発銀行。
223-224	農業については、プランテーションと現地人の経営の二重構造性をおさえる。	「プランテーション」 イギリス系住民の資本によって経営されていたが、ケニアでは1962年以降土地改革を進め、白人所有の土地は現地人に分配されつつある。しかし、現地人に対する農業技術の指導は白人によって行われており、白人の手から放置された場合は、生産が極端に落ちる。ガーナの場合は、これを乗り越えるための努力が政府の指導で進められている。
225-226	鉱産資源は豊富であるが、その開発も利用もアフリカ人のものとなっていなかった点	「鉱産資源の開発」 「ボルタ川の開発」

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
<p data-bbox="518 689 762 719">「ガーナのカカオ栽培」</p> <p data-bbox="491 898 651 927">人種差別の問題</p> <p data-bbox="440 1397 708 1462">第16章 ラテンアメリカ (前書き)</p> <p data-bbox="480 1682 595 1711">あ ゆ み</p>	<p data-bbox="879 584 1445 613">にアメリカ合衆国・イギリスの資本で開発されている。</p> <p data-bbox="879 689 1209 790">○イギリスの間接支配 ○独立後の国内開発 →カカオー辺倒からの脱出。</p> <p data-bbox="874 904 1453 1144">南アフリカ共和国(中略)では、アフリカで2番目に白人の多いローデシアとともに、白人による、有色人種に対する人種差別が行なわれている。有色人種は、賃金が安く、居住地もきめられていて、政治上の権利も与えられていない。こうした人種差別は、人間としての権利を認めない不当なものであるとして、国際的な問題にもなっている。</p> <p data-bbox="868 1406 1445 1619">この地域のほとんどの国は、19世紀前半に独立した。しかし、アメリカ合衆国などによる政治的・経済的な影響を強くうけており、経済の発展がおくれ、農牧業や鉱業が経済のよりどころとなっている。近年、キューバなどのように合衆国の影響をはなれて、自国の力や地域的な協力によって、経済の発展に努めている国もある。</p> <p data-bbox="868 1693 1445 1872">16世紀ごろに、スペイン人やポルトガル人が、メキシコやペルーなどに侵入してきた。スペイン人はインディアンを征服し、この地域から多くの富を本国へもち帰った。19世紀になってから、イギリスなどの援助によってつぎつぎに独立国がつけられた。(中略)</p> <p data-bbox="868 1906 1445 1935">ラテンアメリカ諸国のほとんどは、わずかな種類の農産</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
	をおさえる。	
225	ガーナのカカオ栽培を例にして一次産品依存の経済の特色を理解させる。なお、プランテーション農業については、東南アジアと関連づける。	図版解説「カカオの栽培」 「カカオの生産と価格の動き」 「ガーナの開発」
226	人種差別がただ単に人種の違いによるものでなく、生産・所有などあらゆる経済的要因にあることを理解させる。	図版解説 「南アフリカ共和国の人種差別」 「まともりの弱い国」 「アフリカの食糧問題と人口」 「アフリカ横断道路」 「アフリカ諸国への経済援助」 「南アフリカ共和国の人種差別」 法律上定められている人種差別について説明。
275	ラテンアメリカは(中略)アメリカ合衆国の影響をつよくうけている発展途上国であることをとらえさせておく。	図版解説「南北アメリカの言語」 「合衆国の資本の割合」 「原住民の市場(メキシコ)」
276-277	スペイン・ポルトガルなどラテン系民族により、ヨーロッパ本国への資源や食料供給地として開発がすすめられたこと、独立後もアメリカ合衆国との結びつきの強いことを理解させる。 ①スペイン・ポルトガルとの結びつき ②ラテン系と原住民その他との混血がす	「ラテン・アメリカの国々の貿易相手国」 メキシコ・ペルーは合衆国との結びつき強い。 アルゼンチンは弱い。キューバは革命以後、合衆国との貿易はなされていない。

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
カリブ海地方	<p>物か鉄産物を輸出して、国の経済をまかなっている。その輸出は、アメリカ合衆国がもっとも多い。キューバやアルゼンチンなど一部の国を除き、大部分の国は、経済だけでなく、政治にも合衆国の大きな影響をうけている。</p> <p>住民の主食となるところもこしなどが広くつくられているが、自給することはできない。この地域の農業は、バナナ・さとうきび・コーヒーなど。主に合衆国の会社によって開かれた大規模な農園で生産される。このような国々では1種類の輸出用作物だけをつくる単一栽培農業が行われている。従って、輸出先での農産物の価格の変動によって国の経済が強い影響をうける。</p> <p>この地域は、銀をはじめ、鉛、亜鉛、銅などの鉄産資源が豊富であるが、合衆国やイギリスなどによって開発されたものが多い。</p>
パナマ運河	<p>キューバは世界有数のかんしょ糖の生産国で、(中略)もとは合衆国へ多く輸出されていたが、1959年の革命後は、国が農園を経営するようになり、加工工業も国営となった。</p> <p>パナマ運河は、合衆国によって、1914年に完成された(中略)。パナマ運河をとって、南アメリカの鉄産物が合衆国へ、また合衆国の工業製品が、南アメリカの太平洋岸の諸国へ送られる。</p> <p>この運河地帯は、政治・経済・軍事のうえで重要であるため、合衆国はパナマから長期にわたって使用する権利を得てこの運河を経営し、軍隊をおいている。</p>
アンデス鉄産資源	<p>アンデス山脈の国々には、鉄産資源が多い。そのほとんどは、鉄石や原油のまま、合衆国へ送られる。鉄山の大部分は、</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
277-278	<p>すんでいること。</p> <p>③わずかの種類の農産物や鉱産物に頼っていること。</p> <p>④合衆国と政治的・経済的につよく結びついていることなどにふれる。</p>	<p>「合衆国資本による農園農業と単一栽培」 合衆国の経済の変動によって、栽培される作物の種類を変えることがある。</p>
	<p>バナナ・さとうきび・コーヒーなどの輸出用農作物を合衆国の企業によって大きな農園でつくり、単一栽培農業になっていること、また問題点にもふれる。</p>	
278-279	<p>キューバが革命後アメリカ合衆国から離れ、国営にし、輸出先のか変わったことにふれ、この地域の新しい動きにもふれる。</p>	<p>「キューバ問題」</p>
		<p>「パナマ運河」 図版解説「パナマ運河」</p> <p>「チリの鉱産物」 図版解説「ラテンアメリカの輸出品」</p>

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
	<p>部分は、合衆国の資本で開発されている。</p>
ブラジルの農業	<p>ベネズエラは、(中略)、外国の石油会社が生産の大部分を占めているが、自国の力によって石油を採掘する計画も考えられている。</p> <p>コーヒー園の多くは、農園を所有する大地主の経営するもので、イタリアや日本などからの移住者も働いている。</p>
新しいあゆみ	<p>1936年に、南北アメリカ大陸の太平洋岸に沿って、アラスカからアルゼンチンに通ずる高速自動車道の建設は、南北アメリカ両大陸をつらぬく幹線として、とくにラテンアメリカ諸国の経済的な発展にとって重要なものである。</p> <p>ブラジル高原では、鉄鉱石やマンガンが採掘され、日本とブラジルとの協力で、製鉄所が建設された。また、第2次世界大戦後、合衆国・西ドイツ・日本などの援助をうけて工業化に努めたため、現在ではラテンアメリカ第1位の工業国となった。</p>
ラテン・アメリカの移住者	<p>ラテンアメリカに移住したヨーロッパ人は、はじめ黒人をつれて来て働かせた。その後19世紀になってから、ヨーロッパの各国や、日本などからも移住する人々がふえてきた。このようなさまざまな移住者のあいだや、原住民であるインディアンとの間に多くの混血が行なわれ、人種が複雑である。しかし、合衆国のような人種間の争いはみられない。</p> <p>日本人の移住者は(中略)おもに農業に従事しているが最近では、工業技術の指導をはじめ、いろいろな面で指導的な役割を果たしている人が多い。</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
282-283	<p>○ブラジルのアマゾン川流域の未開発地の開発、南北アメリカを結ぶ高速自動車道の建設、ブラジルが先進国の援助をうけて工業化をすすめ、首都ブラジリアを建設した新しい動きを理解させる。</p> <p>○アマゾン川流域の開発に貢献している日本人の活躍。</p>	<p>「ラテン・アメリカの鉱産資源」 「ベネズエラの油田」</p> <p>「コーヒー園の経営」 図版解説「ブラジルのコーヒー園」</p> <p>「ブラジルの鉱工業」 イタピラ鉱山は、鉄鉱石の大部分を産出しており、日本は、長期安定の供給源として、この鉄山を確保している。</p>
283-286	<p>ラテンアメリカの開発は、移住者の活躍が大きかったことを理解させ、日本人の移民状況などについて理解させる。</p>	<p>「ラテンアメリカの日本人移住者数」 第2次大戦後1952年から移住が開始。ブラジルを中心に現在70万人の日系人がラテンアメリカにいる。</p> <p>「ラテンアメリカの開発史」 「ラテンアメリカとアジア・アフリカの共通点」</p>

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
<p>第17章 オセアニア やしのしげる島々</p>	<p>(前略) 島々には、西サモアやナウルなどの独立国もあるが、殆どは、合衆国、イギリス、フランスなどの植民地である。</p>
<p>第19章 世界の中の日本 1 日本と世界のむすびつき (1) 日本の産業別人口の変化 ○ 人口の増加 ○ 産業別人口の変化</p>	<p>(前略) 世界の工業国と比べると、日本の第1次産業人口の割合は、やや高い。産業のおくれているアジアやアフリカの多くの国々の産業別人口の割合をみると、工業化がすすむ以前の日本の産業別人口の割合に似ている。これらの国々の産業別人口の割合も、工業化が進むに伴って変化してきている。</p> <p>(前略) 世界各国の人口増加のようすをみると、工業の発達した国では、出生率も死亡率も低く、人口増加率は低くなっている。これに対して、工業化を始めた国では、人口が激しく増加している。また、産業の遅れている国でも、人口はかなり増加している。</p>
<p>(4) 貿易による世界でのむすびつき 日本の貿易の特色と問題点</p>	<p>(前略) 日本の貿易は、輸出の30%、輸入の25%を合衆国が占めている。このように、ある国や地域に、貿易が集中することには問題がある。また、東南アジアをはじめ、工業化を始めた国々に対しては、輸出入のつりあいがとれるように、産業開発に援助をしなければならない。</p>
<p>コラム 「日本の加工貿易と発展途上国の資源」</p>	<p>○日本の発展は、これまで、開発途上国からの安価な資源輸入に依存してきた。</p> <p>○途上国の方でも、自国の産業を発展させるため、資源輸出をおさえるようになってきた。</p> <p>○これからは、資源を保有する途上国に資本や技術面での援助を行なって、真にその国の経済発展につながるよ</p>

該 当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
291	太平洋の島々については、植民地や信託統治で開発が遅れていること、交通・漁業・鉱産資源などで果たしている役割について理解させる。	「キューバ封鎖崩壊へ」 「アルゼンチンの半月は肉なしデー」 「南太平洋の島々」
298	(前略)一般に、第1次産業人口の比率が低いほど先進国の産業構造といわれることを理解させ、日本を世界の中に位置づける。	図版解説 「先進国と発展途上国の国民総生産」
296、298	人口動態と産業の発達が深い関係にあり、人口増加率によってその国の産業の発達のしかたが判断できることを理解させる。	図版解説 「イギリス・日本・インドの出生率と死亡率の移りかわり」 「おもな国の産業別人口の割合」
315-316	(問題点では)、発展途上国の工業化、合衆国中心、海外経済協力、対共産圏貿易などを理解させる。	
317	日本の加工貿易が、海外資源の輸入に依存して成り立っていることを理解させ、発展途上国との関係の変化、資源問題と関連させて理解させる。 ①日本の経済成長と加工貿易の関係 ②発展途上国の動向と日本の経済協力の	「日本の資源問題を解決する方向」 日本の資源危機は、工業先進国の中でもっとも深刻である。「油づけの日本経済」と産業構造は根本的に改造して、重化学工業から付加価値の高い知識集約的な産業につくりなおすこと。(菊地利夫：資源のみかた)、より

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
	<p>うに経済協力をすすめる必要がある。</p> <p>○そして、これらの国から製品や資源の一部を輸入し、さらに高度な加工をして輸出するという方向が、これからの日本の工業にのぞまれている。</p> <p>○日本は、資源が有限であることを自覚して、その保護育成に努めなければならない。</p>

C 発行社 —地理的分野—

<p>世界の諸地域</p> <p>第2章 アジア</p> <p>米作と遊牧</p> <p>土地と農民</p>	<p>アジアでは地主が大きな勢力を持っているため、小作料は高く、農民が貧しく、農業改善の力もなかったが、戦後の土地改革によって改善の努力がつけられている。</p>
<p>植民地が多かったアジア</p>	<p>植民地では、政治も産業も本国の利益第一で、アジアの経済成長がはばまれ、住民の生活は低かったと。</p>
<p>新しい国のなやみ</p>	<p>大戦後独立した国々では、資本や技術者不足で自力による工業の発展が難しく、産業の進んだ国からの援助を受ける必要がある。しかし、その為に援助をする国の利害によって政治が動かされるようになると、実際に植民地とかわらなくなる。</p>
<p>第2章</p> <p>第3節 経済自立をめざす東南アジア</p>	<p>東南アジアにおける日本の進出はもうけ本位で、低賃金、公害の問題から各国の社会生活を尊重しないということで非難されている。</p>
<p>第4節 国づくりにはげむ南アジア</p> <p>インドの開発</p>	<p>独立後、インドは日本をふくむ各国からの経済援助をうけて開発に取り組んでいる。</p>
<p>第5節 石油の豊かな西アジア</p> <p>西アジアの大油田地帯</p>	<p>石油を産出する発展途上国が、その国の開発に石油の力を使うようになった。</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
	あり方 ③資源の消費国日本のあり方、などを考えさせる。	

176	農民の貧しさの一番大きな問題が土地問題であるということの把握。	○アジアの土地改革による食料問題や生活水準の向上の説明。
176-177	今日のアジアの貧困が、人口過剰や自然条件というだけでなく植民地であったということに基因していることを理解させる。	○アジアの植民地と独立国（教科書地図）の解説。
177-178	アジアの諸国が様々な困難をかかえながら前進しようと努力していることを理解させる。	新しい独立国のなやみや問題点の解説。（資本や熟練技術者不足、進まない土地改革、第一次産物にかたよった貿易、ヒモつき援助）
195	日本と東南アジアの貿易や経済的関連をつかみ、今後のあり方を考えさせる。	○タイ、インドネシアの反日感情について。
199	計画経済のもと、古い社会から脱皮しようとする姿に眼を向けるとともに、最近の社会事情を理解させる。	○インドの食料不足、社会の動きの解説。 ○インド農民の貧しい生活について。
203	石油財源を利用した自力開発の動きを理解。	産油国の国有化の解説。

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
<p>第3章 アフリカ 第1節 新興独立国の多いアフリカ アフリカの歩み</p> <p>第1節 団結するアフリカ諸国</p>	<p>15世紀ころまでアフリカは、世界でもとくにおくれた地域ではなかった。しかし16世紀になると、火器をもったヨーロッパ人が、ギニア湾沿岸などから黒人をつれだし、どれいとしてアメリカ大陸へ売ること(どれい貿易)を始めた。西アフリカはそのため働き手が少なくなり、生産はおとろえ生活は貧しくなった。</p> <p>独立はしたものの、経済産業構造、部族等の問題のため国民生活の向上が難しいので、アフリカ諸国は、「アフリカ統一機構」を作って協力し合っている。</p>
<p>第7章 ラテンアメリカ 少数の輸出品とおくれた工業</p> <p>コーヒーの国ブラジル (移住)</p> <p>日本との関係 (移住)</p>	<p>ラテンアメリカでは地主の力が強く農民は貧しい、工業が未発達のため、経済は欧米諸国の動きに左右されやすい。</p> <p>ブラジルコーヒーの中心であるサンパウロ付近は最も農業の進んだ所でコーヒー園の労働者として移民した日本人の子孫も多い。</p> <p>ブラジルはもとよりペルー、アルゼンチン、パラグアイにも日系人は多く、農業のみならず、商工業にも進出している。又近年は日本の会社の進出も増え技術者の移住も多くなった。</p>
<p>第10章 世界の結びつき 工業の発達と国際的分業</p> <p>三つの経済圏</p>	<p>イギリスの産業革命以来、工業を発展させた地域とその地域に、原材料を供給する地域が出来、それが現在の国際分業のシステムの中に組みこまれている。</p> <p>世界はアメリカ・ヨーロッパ・日本などの資本主義経済の発展した先進諸国、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国の発展途上国、そして、ソ連・中国・東ヨーロッパなどの社会主義国の三つの経済圏に分かれている。</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
209-210	アフリカ＝暗黒大陸というイメージが植民地に基因することに留意。	○アフリカの独立国（教科書地図）の解説。 ○植民地の分割、独立運動の解説。
210	大戦後、各国が国の建設に努力している姿を明らかにする。	○アフリカ統一機構（OAU）の解説。
267-268	○人種も多様で、モノカルチャー経済、その上地主の大土地所有がある。発展途上の国々であることへの理解。	○大土地所有制について。 ○ラテンアメリカの輸出品（教科書グラフ）の解説。
(270-270)	○ブラジルのコーヒーの歴史と日本人移民の関係に眼を向けてみる。	○日本人移民の説明。
(272-273)	○日本との関係と近年の動向を理解させる。	○日本との貿易について（教科書グラフ）。
287	○歴史の流れの中での各国の発展と世界の結びつきに眼を向ける。	○世界貿易と問題点。
287-288	発展途上国の理解と三つの経済圏の分業システムの理解。	○工業の発展と国際分業について。 ○三つの経済圏の解説。 ○資本主義先進国、発展途上国、社会主義国の解説。

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
異なる貿易の型	三つの経済圏の貿易の型の概略。 { 先進国→工業品輸出・食原料輸入 途上国→食原料輸出・工業品輸入
第10章 世界貿易の問題	発展途上国はその産業構造のため、どうしても輸入超過の問題がおき、そのための借款や延べ払いといった処置は、国の独立を害されるおそれがある。
世界の中の日本 第1章 農林漁業 漁業国日本	発展途上国の多くは漁業専管水域200海里を主張しており、国連が認めれば、日本は大きな打撃をうける。
第2章 鉄工業と貿易・交通 わが国の貿易の課題	東南アジアの国に対してつねに輸出超過である日本は、これらの国から農産物などを優先的に輸入するように求められている。

D 発行社 —地理的分野—

世界とその諸地域 2 アジアとアフリカ (1) 生活の舞台 発展の歴史 (3) 東南アジア ①インドシナ諸国 アジアの稲作地帯 マレーシアとシンガポール	16世紀より、ヨーロッパの支配をうけ、豊富な資源や広大な未開発地をもちながら、原住民の為の開発に必要な資本や技術をもつことができなかった。 ○第二次世界大戦後、多くの独立国が誕生し、先進国の援助をえて資源や土地などを開発しようとしている。 (東南アジアの国々の面積・人口・人口密度・独立年、おもな輸出品の統計資料) ベトナム民主共和国は石炭を産出。タイは米、天然ゴム、とうもろこし、すず。ビルマは米とチーク材。 ○マレーシアは世界の天然ゴムの約5分の2にたっている。すずの産地でもある。
---	---

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
288-289	貿易の型と実状の理解。	○発展途上国の貿易の解説（モノカルチャーのため経済自立が困難）。
291-292	○世界の諸地域の貿易による結びつき、経済をめぐる問題の関心を深める。 ○発展途上国が資本不足のため、モノカルチャーから抜け出せず、先進国との格差が拡大していく点に留意。	○先進国と発展途上国の輸出量指導（教科書）の解説。 ○先進国と途上国の貿易と経済圏別輸出額の解説。
305	○国際間の漁業問題に眼を向ける。	
317-318	○日本の貿易に対して、他の先進国、発展途上国からどんな要求がでてくるかを考えさせる。	○日本と東南アジアの貿易の解説。

194	○独立国の羅列に終わらず、例をとって具体的に指導する。	○民族独立運動について書かれている。
207-209	○灌漑施設のおくれと多期作の関係も説明したい。	○インドシナの稲作地帯・天然ゴムについて書かれてある。特にインドシナの農民が貧しいのは、生産技術がおくれていることもあるが、彼らの汗の結晶を地主や商人に吸いとられていること、農民は生産力を向上させるた

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
<p>②インドネシアとフィリピン インドネシア フィリピン</p> <p>東南アジアと日本の関係 (4) 南アジア ①インド 農 業 工 業</p>	<p>○農作物は米・天然ゴム・茶・コーヒー・キナ・ココヤシが栽培される。また、すず・ボーキサイト・ゴムのプランテーションが多い。油田もある。</p> <p>○米を栽培している。また、さとうきび、ココヤシ、マニラ麻を栽培し、ラワン材とともに輸出品としている。</p> <p>日本は、これらの国々の開発に資本や技術の援助をしたり、農業技術員による農業改良に協力してきた。最近では日本の企業のなかに、相手国の立場や発展を考えずに、自己の利益だけを考えた経済進出をし、批判が、タイやインドネシア中心に出ている。</p> <p>○ジュート・小麦・棉花・茶が栽培されているが、農業技術が低い。生産をのぼすために、かんがい設備の設置や農地の拡張、技術の改良などに努めている。</p> <p>○鉄鉱、石炭、マンガンなどの資源を利用して鉄鋼・機械・化学などの工業をおこした。</p>
<p>②パキスタン・バングラデシュとスリランカ パキスタンとバングラデシュ スリランカ</p> <p>(5) 西アジアと北アフリカ ①西アジア ステップと砂漠の地域 農牧業</p> <p>②北アフリカ 民族と生活</p> <p>(6) 中・南アフリカ ①中アフリカ 農業と鉱業</p>	<p>○パキスタンは小麦・棉花の栽培。</p> <p>○バングラデシュは米・ジュートの栽培が行われている。</p> <p>○ゴム・コーヒー・茶のプランテーションが営まれている。</p> <p>○油田の開発</p> <p>○小麦・大麦・なつめやし・ぶどうなどが、小規模に栽培されている。</p> <p>○トルコでは棉花・たばこの栽培。</p> <p>○イスラエルは果樹・小麦の栽培。</p> <p>○小麦・オリーブ・ぶどうなどの栽培。羊も飼育されている。</p> <p>○エジプトは農業や工業の発展に力を入れている。</p> <p>○ギニア湾沿岸ではボーキサイト、金鉱、石油。</p> <p>○コンゴ盆地は銅鉱・金鉱・すず鉱・ダイヤモンドなど</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
209～211	<ul style="list-style-type: none"> ○プランテーション地域と原始的な農業地域の比較も行ないたい。 ○日本の木材需給関係と結びつけて、ラワン材の生産を考えさせたい。 	<p>めの資金が不足し、いつまでも低い技術水準にとどまることを余儀なくされている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○プランテーション・焼畑耕作、インドネシアの油田について書かれている。特に油田について民族資本による石油会社を統合した国営石油会社とアメリカをはじめとする外国石油会社により急速な開発がすすめられている。
213～215	<ul style="list-style-type: none"> ○近代化をさまたげる問題は、多様な言語とカースト制度を中心にとらえる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○インド半島とモンスーン・ヒンズー教・ジュート・農業などについて書かれ、特にインド農業で、食料不足の国であることからして土地生産性、労働生産性の低さをあらためて認識できるとのべられている。
215～216	<ul style="list-style-type: none"> ○アジアのプランテーションのまとめ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○パキスタン・バングラデシュ・かんがいによる小麦、スリランカの茶について書かれている。また、鉱工業の中で鉄鋼などの重工業と炭田・鉄鉱などの産地、せんい工業地と棉花栽培地など原料産地との結びつきが強いことを読みとらせたいとのべられている。
218～220	<ul style="list-style-type: none"> ○西アジアの自然や産業。 ○地理的位置や石油問題に方向づける。 	<ul style="list-style-type: none"> ○石油問題。
224～226	<ul style="list-style-type: none"> ○第二次世界大戦後の急速な独立運動の原因。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ガーナのカカオ、アフリカのコーヒー、ザイールの鉄産資源、ボルタ川の開発計画、ア

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
<p>②南アフリカ 鉱業と農牧業</p> <p>人種差別 アジアとアフリカの課題</p>	<p>の鉱産資源にめぐまれている。</p> <p>○ザイールは、ダイヤモンド・すず鉱が大規模に採掘されている。</p> <p>○鉱産資源がゆたかである。ダイヤモンド・白金・アンチモン鉱、クロム鉱・マンガン鉱・バナジウム鉱。</p> <p>南ア共和国やローデシアでは、白人の現地人による人種差別が行われ、アフリカのその他の国をはじめ、世界の国々から非難を受けている。</p> <p>○ゆたかな資源にめぐまれているが、開発するのに必要な資本や科学技術が不足している。</p> <p>○先進国がこれまで以上に資本や技術を提供して援助すること、これらの国々と貿易をさかんにするのが大切である。</p>
<p>4 アメリカとオセアニア 13) ラテンアメリカ ①中部アメリカ 熱帯の国々</p>	<p>○低地ではバナナ・さとうきび、高地ではコーヒーがプランテーションにより栽培。</p> <p>○メキシコは銀をはじめとする鉱産資源にめぐまれ、中部アメリカのなかでは工業がすすんだ国である。</p>
<p>②アンデス諸国 高原の国々</p> <p>石油のベネズエラ</p>	<p>○鉱産資源にめぐまれる。ボリビアのすず、ペルー、チリの銅などは世界でも指おりの生産をあげている。</p> <p>○輸出向けの農産物も開発されている。</p> <p>○石油は世界第5位の生産。</p>
<p>③ブラジルとアルゼンチン ブラジル</p> <p>アルゼンチン</p>	<p>○重要な産業はコーヒーの栽培、さとうきび、棉花、カカオの生産高がふえてきた。工業の発達に努力している。</p> <p>○牛肉・羊毛・小麦は重要な輸出品。</p> <p>○産業は特定の鉱産物や農産物にさえられ貿易相手国も特定に依存する割合が高い。相手国の経済に産業が影響を受けるので不安定である。</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
226~227	<ul style="list-style-type: none"> ○世界の鉱産資源については、偏在と有限の点を強調する。 	<p>フリカの問題点・産業が書かれ産業の中でアフリカ各地には工業の発達は十分ではないが、多くの資源が分布していると書かれている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○鉱産資源・人種差別について書かれている。
229		
276	<ul style="list-style-type: none"> ○自然や産業。 ○鉱産資源の分布。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ラテンアメリカの開拓・プランテーション メキシコの鉱産資源・さとうの国キューバ・マラカイボ湖の油田について書かれている。開拓やプランテーションはくわしくのべられている。
277		
278~280	<ul style="list-style-type: none"> ○コーヒー栽培、日本人移住者、パンパの農業。 ○開発に関連づけて地図から交通問題。 ○政情の不安定について。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ファゼンダ・地主と農民・ブラジルの鉱工業・パンパ・アルファルファ草 ○ブラジルのコーヒー栽培 日本人移住と開発がのべられ、日本人移住を開発のなかで特にわが国の南米に対する技術協力は1958年から行われ、研修生教育・技術者派遣・開発協力や技術者

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
14) オセアニア ②太平洋上の島々 交通上の要地 オセアニアの課題	<p>これからの開発に大きな希望が残されている。</p> <p>19世紀の末になって、合衆国や、ヨーロッパ諸国の領土として分割され、アメリカ、アジア、オセアニアを結ぶ交通の要地として開発された。</p> <p>○太平洋上の島々では、コブラ・パイナップルなどの特産物の生産のほか、観光開発にも力をいれている。</p>
6 世界の結びつき (1) 貿易による結びつき 工業製品	<p>○工業製品は工業の発達した国から工業のおくれた発展途上国へと流れる。</p> <p>○第二次世界大戦後は、先進工業国は発展途上国にたいして、工場の設備や機械を輸出して、工業をさかんにするための援助をするようになった。</p>
貿易によらない経済の結びつき ①開発援助	<p>○第二次世界大戦後、先進国の多くは開発のおくれている国々に対して経済的に開発のための援助を行っている。</p> <p>○援助には開発のための資金・科学者・技術者を送ったりするほか、発展途上国の食料や原料を先進国が輸入するときに輸入の制限をゆるめる方法もとられている。</p>
(13) 世界貿易の課題 南北貿易 世界のなかの日本 (2) 貿易と交通による結びつき ○発展途上国との貿易	<p>先進国が発展途上国から、工業原料を輸入し、工業製品を、これらの国々に輸出する。これを南北貿易という南北貿易をさかんにして、途上国の産業を育て、人々のくらしをゆたかにすることは先進国のつとめである。残念なことにこの貿易の進展は著しくない。国際連合をはじめ、多くの先進国が、経済援助が、開発援助の手をさしのべているのはそのため。</p> <p>○日本は発展途上国から農産物や鉱産物を輸入して工業の原料とし、せんい製品や機械類などの工業製品を輸出している。途上国では、国内工業発展をめざして。日本は、これらの国へ工場の機械をまとめて輸出する、プラント輸出も多くなっている。</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
283～284	<ul style="list-style-type: none"> ○ 太平洋上の島々の自然や産業。 	<p>移住などで積極的に協力している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 太平洋上の島々について書かれており、その中で、メラネシアの原住民は低い段階の生活をしている。 ポリネシア、ミクロネシアの原住民はかなり知的程度が高く生活も一般に近代化に近いとのべている。
296～297	<ul style="list-style-type: none"> ○ 貿易の流れをしめす。 ○ 羊毛・棉花・石油・棉織物・機械類。 ○ 工業国の貿易というのは輸出先が発展途上国であるばかりでなく、工業国どうしで行われることに注意。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 工業原料として主要なものはせんい原料（羊毛・棉花）、鉄鉱・銅鉱・ボーキサイト天然ゴム・木材などある。羊毛・棉花・鉄鉱についてくわしくのべられている。
303	<p>貿易の発展というか、どこの国も、まず自分を守ることを強調する。</p>	<p>援助問題とならんで、先進国は、途上国産品だけの関税を低くするため、特惠供与の実施にふみきった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 発展途上国の開発を援助するための経済協力をしているが、地域別にみると東南アジアが総額の64.1%と圧倒的に多く、次いでラテンアメリカの16.6%、アフリカ8.6%、西アジア5.6%となっている。
322		

抽出一覧表

Ⅱ 発行社 —地理的分野—

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
<p>世界とその諸地域の結びつき 第2章 太平洋に沿うアジア・オセアニアの国々</p>	<p>アジアの人々は長い間貧しさにあえぎ、苦しい生活を続けてきた。今日では(日本と)となりあう開発の新しい地域である。</p>
<p>2 緑におおわれる東南アジア (1) 東南アジアの自然と生活</p>	<p>3億人ぐらい住んでいるが、人口密度低い。ヨーロッパ、アメリカの植民地だったが第二次大戦後独立したが、まだ産業がおくれている。</p>
<p>(2) 稲作中心の国々 米を輸出するインドシナ半島</p>	<p>米の収量の多い地域。重要な輸出品となっている。最近では鉄工業の発達のため、メコン川総合開発をおこなっている。</p>
<p>マライ半島と熱帯の国々</p>	<p>ゴムのプランテーションがおこなわれている。地下資源が豊かで、仲継貿易のシンガポールは、都市づくり、工業の発展をめざしている。</p>
<p>3 なやみの多い南アジアの国々 (1) 南アジアの自然と生活 <人口と都市化></p>	<p>貧しい人々が多く人口も急増している。農業と牧畜が中心である。 世界の人口増加のなかで途上国の急激な増加は問題である。 貧しい国では生産が増加したのに1人あたりの所得はふえず、今、この人口増加をおさえようとしている。また都市化が急であるのに、市街地の拡大や都市施設の整備がおいつかない。</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
176		
188～189	<ul style="list-style-type: none"> ○ 植民地から独立国への歴史のあゆみにふれ、植民地政策が残した歴史的きずあとが産業構造に残っていることを知らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自然や人口密度の説明。 ○ 中国やインドの文化の影響を多くうけてきた。 ○ 産業のおくれは植民地支配の為である。原住民が労働力の提供者。政治勢力をおそれ教育向上にも力を入れなかった。
189～190	<ul style="list-style-type: none"> ○ 政治問題に深入りしないように留意。 ○ 農業中心である。米への依存度が高いこと。 ○ 合衆国・日本などの援助による鉱工業開発への努力を取り扱う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 稲作の方法について説明。ただ自然依存的で、粗放的であり、収穫量が不安定である。 ○ メコン川総合開発は先進諸国の援助によって大規模におこなわれている。
190～191	<ul style="list-style-type: none"> ○ たな田がなぜつくられたのか日本と対比させる。 ○ ゴム栽培の歴史、条件、所有関係、生産量について調べる。 ○ 日本との経済的な結びつきについて。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ プランテーションの説明。 大資本（欧米諸国）によって大規模に栽培。技術指導も外国人が行い、用地は住民から買収又は没収したもの。
191～194	<ul style="list-style-type: none"> ○ 人口、文明の歴史、貧しい人々、人口の急増の4つが、どのような関係で結びついてるのか。 ○ 近代化のおくれている事実、植民地政策。 カースト制度などから考えさせる。 	

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
(2) 人口の多いインド 住民と文化 産業と都市	<p>ヒンズー教にあるカースト制度が社会の発展をさまたげた。言語、宗教が多い。</p> <p>小麦、綿織物、茶の産地の説明。</p> <p>鉄工業の発達にも努めているが、生活程度低く、教育の普及もおくれている。</p>
(3) パキスタンとバングラディッシュ	<p>第二次大戦後東西に別れる。パキスタンは小麦、バングラは稲やジュート。</p>
4 海と大陸のオセアニア (3) ニュージーランドと太平洋の島々 太平洋に散らばる島々	<p>原始的農業、漁業で生活している。地下資源の開発、また観光地として多くの人々が来るなど近代化が入ってくる。</p>
第3章 太平洋の東に横たわるアメリカの国々 2 開けゆくラテンアメリカ (2) メキシコと中央アメリカの国々 高原の国メキシコ、 中央アメリカと西インド諸島の国々。	<p>人口、気候、産業について説明。バナナ、さとうきびのプランテーションがおこなわれている。</p> <p>気候、バナナの大産地、生活程度は低い。パナマ運河が世界の交通に大きな役割を果たす。</p>
(3) アンデス地方の国々 高地に住む人々 特産物にたよる産業	<p>民族、都市の発達、おくれた農業、牧畜を行う。</p> <p>農業、特にコーヒーのプランテーションが行われている。地下資源の開発はアメリカ合衆国の資本であり、大部分は合衆国へ輸出される。</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
194～195 196	<ul style="list-style-type: none"> ○ インドが農業中心であり、その就業者の割合について。 ○ 産業の分布は南アジアを～括して取り扱う。 ○ インドの綿工業。その歴史、背景、工業都市の分布。 <p>世界における地位についてまとめる。その将来性について。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ バングラディッシュの独立にふれる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ インドは豊かな地下資源を有して、現地開発を促進中。日本の技術援助も期待されてる。 ○ インドの農産物、綿工業、工業化への努力について説明。
201～202	<ul style="list-style-type: none"> ○ 島々のおもな産業、生活、観光資源について。 ○ 南太平洋、日本のまぐろ漁場であること。 ○ 太平洋の楽園の原住民の生活を自然条件、位置などのうえにたってとりあげる。 	太平洋にちらばる島々について、人口、面積、民族、領地についてのべてある。
220～221	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土地利用にみられる、高度差、その分布が地形や気候と関連していることを強調する。 ○ 生産活動の共通点を理解する。 ○ 合衆国との結びつきを理解する。 	○ 産業について、近年特に自動車産業の国有化をめざし、工業の近代化に努力している。
222～223	<ul style="list-style-type: none"> ○ 経済が合衆国と結びついていること、土地利用について理解させる。 ○ この地方の国々と日本の結びつきが最近深まりつつある。 	農産物、地下資源、世界的な水産国のことについて。

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
(4) ブラジルとアルゼンチン 広大な国ブラジル 農牧業と地下資源 農牧業の国アルゼンチン	<p>海岸近くに人口集中し、生活程度も低かった。今、資源にめぐまれた内陸の開発、新しい首都の建設をすすめている。</p> <p>70万人に近い日本人移住者がいる。</p> <p>コーヒーが第1の輸出品である。地下資源は豊かだが、あまり開発されていない。</p> <p>農牧業が発達している。肉類の輸出国としても世界一であり、国民の生活程度は高い。</p>
第4章 ユーラシアの北部・西部とアフリカの国々 3 西アジアとアフリカの国々 (2) 石油と砂漠の国々 西アジアの国々 北アフリカの国々	<p>かんがい農業。石油の大産地。石油の開発は外国資本と技術による。ペルシャ 湾 一帯は、石油の埋蔵量、世界第一である。</p> <p>民族、宗教のちがいがから、紛争がおきる。</p> <p>広い国土の一部しか利用されていない。農業、オリーブ栽培が重要。</p> <p>エジプト文明の栄えたところ。</p>
(3) 新しい黒人アフリカと南アフリカ 黒人アフリカと土地の住民 熱帯農業と地下資源 南アフリカ	<p>資本、技術の不足や民族間の対立など多くの問題あり、先進国の援助にたよる面多い。人口、宗教について。農産物、地下資源について。</p> <p>ヨーロッパ人経営のプランテーションも多い。</p> <p>住民の大部分は黒人であるが、白人の勢力が強い。</p> <p>有色人種に対する人種差別はげしい。</p> <p>金、ダイヤモンドの大産出国。</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
224～225	<ul style="list-style-type: none"> ○ コーヒー単一栽培の問題点、世界経済の変動に影響されやすい。 ○ ブラジル産業の発達に果たした日本人の役割。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 日本人の移住の歴史とその地位向上のようす。 ○ コーヒー園、生産量について。 ○ 鉄鉱石のほかは開発されていない。
225～226	<ul style="list-style-type: none"> ○ ヨーロッパへの需要と結びついて発展した農牧業であること。 ○ ラテンアメリカに共通する地主の大土地所有形態を理解させる。 ○ 第二次大戦後、工業化がすすむ。 	<p>パンパ（大草原）の農業とスペイン人の移住によって大土地所有が成立、粗放的な牧畜がおこなわれていた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 牛、羊の肉、小麦等の輸出品について。
257～258	<ul style="list-style-type: none"> ○ 油田の分布、産出量や埋蔵量について具体的に。 ○ 石油採掘に対する外国資本の競合、その輸出先について。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 油田開発と石油権利について。 <p>国際石油資本によって支払われる権利が財政の主要収入源となっている。</p> <p>イランの石油国有化運動が契機となり、産油国の団結強まる→OPEC</p>
259～260	<ul style="list-style-type: none"> ○ 独立国、旧本国、農牧業の形態について。 ○ 近代国家になろうとするエジプトの努力。 ○ アルジェリアの民族独立戦争について理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ナイル川沿岸の産業、自然について。アスワンハイダム、サハラ砂漠の開発について。
260～262	<ul style="list-style-type: none"> ○ 独立国の動き。 ○ 熱帯農業と地下資源について理解させる。 ○ 新興国は、旧本国や先進国の援助にたよっている。 ○ 人種差別の原因とその深刻さについて知らせる（歴史的背景）。 	<p>黒人国家、その独立、人種差別、その国の産業について説明。</p> <p>白人と黒人の日常生活における区別、人権を持たない。</p>

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
第5章 世界の結びつき (2) 世界の貿易と生活の向上 大規模になる世界の貿易 貿易品の動き	原料と食料を輸出し、工業製品を輸入する南の国々。その反対の北の国々。また、アメリカ、ソビエト連邦、中国のように工業、原料、食料を輸入、輸出する国に別れる。貿易によってそれらの国々は結びついている。 ○先進国は工業製品の輸出で産業が栄えてきた。開発のおくれている国々も工業製品の輸出に力を入れようとしている。
IV 世界の中の日本 第1章 日本と世界との結びつき 2 世界貿易の中の日本 世界の貿易と日本	世界の貿易は先進国がさかんである。 日本の貿易の約半分は先進国が相手。途上国との貿易は輸出では工業製品、輸入では原料や燃料が中心で、日本から輸出する方が多い。
第2 国土の利用 3 新しい国土の建設 日本の国際的地位と役割	日本は世界の大国の一つとして、文化の発展や平和に重要な役割を果たしている。 各国から協力を求める要望が強い。

F 発行社 —地理的分野—

II アジア 「アジアの独立国と州別 1Km ² あたり人口密度」 1 歴史と自然 2 住民と産業 生活様式の相違と人口分布	(アジアの)人口の分布に疎密がみられるのは、それぞれの地域の地形・気候や住民の生活のしかたのちがいがや産業の発達程度の相違によるものである。
---	--

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
270~272	<ul style="list-style-type: none"> ○南北貿易がおこなわれているという事実に対する認識。 ○北半球の工業国へ南半球の資源や食料が輸出されていることを読みとる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○先進国、途上国、社会主義国の貿易の輸出総額の表。主な貿易品の動き（石油、米、鉄鉱石、小麦、綿、コーヒー、茶）。
286~287	<ul style="list-style-type: none"> ○先進国、発展途上国の概念を確実にして、世界貿易の大勢を先進国、発展途上国、社会主義国の観点からとりあげる。 	<p>地域別にみた世界の輸出貿易 先進国が世界貿易の中で大きな割合を占めている。その数字が示されている。</p>
304~305	<ul style="list-style-type: none"> ○世界の途上国への経済援助の動向や日本の役割を理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○国際的地位について、ここでは産業、貿易について復習し、途上国援助という国際協力関係だけにとどめる。 ○おもな国際経済組織。

186		<p>アジアにおける人口問題・食糧問題は、単に人口圧のみでなく、過去の植民地政策以来のゆがめられた社会経済構造に由来する問題である。</p>
187		<p>「資本主義の道・社会主義の道」 社会主義化→土地改革や重要産業 国有化の徹底遂行 資本主義化→外資や封建地主の勢力が残存 経済的独立が達成されない。</p>
190	<p>人口密度の高いところ……モンsoon = アジア→近代以前に米作が発達していたから。</p>	

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
資源と開発	資源の開発によって、鉱工業が発達すると住民の生活もゆたかになる。しかし、アジアの多くの国々はまだ開発途上にあり、資本も技術も遅れているので、資源を自国の産業の発展に十分結びつけることができず、開発された資源は、ほとんど先進国の工業の原料として輸出されている。
工業の発達	アジアの国々の工業の発達が遅れているのは、植民地時代を通じて、欧米諸国が本国の利益だけをはかる政策をとってきたためである。独立後は近代工業も少しずつ発達し、社会主義国やインド・イスラエル・トルコ等では重化学・機械工業が発達して、工業製品を輸出するまでになっている。
5 東南アジア 住民と産業	
インドシナ・マライ半島の国々	
インドネシアとフィリピン	(フィリピンは)アメリカ合衆国から独立したが、いまでも産業・貿易の面で合衆国とのつながりがつよい。

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
191		「資源の輸出にたよる国々」 モノカルチャ経済→価格の低下→先進資本主義諸国の経済侵略。
191-192		「輸出品の構成からみたアジアの国々」 輸出品構成は、その国の産業構造を反映する。 東南・西南アジアのモノカルチャ型は植民地時代における経済構造の残存を、インドは第2次大戦後の工業発展のようすを反映している。
203-204	首都名までは無理しなくても、国名とその位置、プランテーション農業や華僑などの用語については正確に理解、記憶させるよう力を入れたい。	「東南アジアの面積・人口・貿易」 日本との貿易関係の中で、輸入が国ごとにアンバランスなのが目立つ。 「東南アジアの産業」 「東南アジアにおける華僑の分布」
204-205	マレーシアは、政治的には独立したが、まだイギリスの経済支配が残っていること、モノカルチャ経済のゆがみがはつきり出ていること、植民地支配に由来する民族対立など、くわしくとり上げるとわかりやすい国である。	「マレーシアの複合社会」 「ベトナム戦争とインドシナ半島の動き」 esp・タイ→日本の経済進出への反感。 日本品不買運動。
205	両国とも、いまの政治状況は複雑であるから、深入りしない。	「インドネシア」 →外国資本が採掘する低公害石油。 「新植民地主義」

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
6 南アジア (1) 自然と住民	
(2) 南アジアの国々 インドの農業	インドの農業は、化学肥料の使用が少ないうえ、灌漑施設も遅れているので、単位面積あたりの収穫高が少ないしかも人口が多いので食糧は不足がちである。このためインドは中華人民共和国に次ぐ米の生産国でありながら世界的な輸入国でもある。
インドの工業	第2次大戦前からあったが、戦後さらに発達、綿工業では。
7 西南アジア 豊富な石油資源	西南アジアの油田は、いち早くこの資源に目をつけたアメリカ合衆国・イギリス・フランス・オランダなどの外国資本によって開発がすすめられてきた。(中略)西南アジアの産油国では、これらの外国資本によって支払われる利権料が、国の主な収入となっているが、なかにはクウェートのように、国民1人あたりの所得がアメリカ合衆国に次いで高い国もある。
トピックス「西南アジアの石油資源」	先進諸国の利権獲得競争。 産油諸国のOPEC結成。 1973年 オイル・ショック。
■ アフリカ アフリカの独立国	(前略)日本などに比べて、読み書きのできない人々の割合が高いのは、なぜだろうか。

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
206-207 207-208	<p>「インド」といえば、「おくれた国」という印象をもつ生徒が多い。現状ではたしかに「おくれた国」であるが、インドは、面積も人口も、歴史の古さでも、中国とならぶアジアの大国である。今後、政治の変化によって土地改革などが行なわれるようになると、すばらしいエネルギーで、食料難なども克服できるだろう。「おくれた国」よりもむしろ、「豊かな可能性とエネルギーを秘めた亜大陸」としてとらえさせたい。</p>	<p>「カースト」 「多元的なインドの社会構成」 「インドの大地主」 「大衆から遊離したインドの工業化」</p>
211-212		
212	<p>OPECの動きは、巨視的には、旧植民地国の独立運動の一環としてとらえることができる。政治的独立を達成したあとの、経済的自立をめざす運動である。1970年代に入って、資源や領海をめぐる、開発途上国の経済的要求がますます出されていることに留意する。</p>	<p>「イランの石油国有化事件」 「メジャー」 「国際石油資本の支配力」</p>
215	<p>○暗黒大陸や歴史なき大陸というのは、ヨーロッパが彼らの植民地支配を合理化するために用いた呼び方であることを理解させる。日本人に多い、「野蛮で未開</p>	<p>「アフリカの独立国」 ○アフリカは、アジアよりも激しく、ヨーロッパ諸国に蚕食された。 (植民地支配の歴史、人種差別政策)</p>

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
<p>1 歴史と自然 植民地から独立国へ</p> <p>台地性の自然 赤道をはさむ気候</p> <p>2 住民と産業 人口の分布</p> <p>地下資源と工業</p>	<p>北アフリカ以外の地は、砂漠や密林に妨げられて、長い間、他の世界と交渉がなく、事情もよくわからなかった。15世紀ごろから、ヨーロッパ人によって、沿岸地帯の探検が始まったが、19世紀になると、ヨーロッパ諸国は、資源を求めて争って内陸に進出しはじめた。そしてアフリカの大部分はこれら諸国に分割され、第二次世界大戦まえ独立国はわずか4カ国にすぎなかった。</p> <p>第二次大戦後、アジアと同じようにアフリカでも、各地に民族運動がおこり、多くの国々が独立を達成した。しかし、これらの新しい国々は、長い間植民地にされていたため経済力がよわく、言語や宗教もさまざまで、部族間の対立などもあり、その前途に多くの悩みをかかえている。</p> <p>アフリカは金・ダイヤモンドをはじめ、ゆたかな地下資源にめぐまれている。しかし、長い植民地時代を通じてその開発は、工業国に資源を供給するためにすすめられてきた。多くの国が独立した今日でも、工業の発達はまだ遅れており、新たに発見された石油なども、その大部</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
216 (216)	<p>の「アフリカ」のイメージは、ヨーロッパ人のアフリカ像をうのみにしたものであり、まちがいであることを明らかにしておきたい。</p> <p>○第二次世界大戦後、政治的には多くの独立国が誕生したが、経済的には、旧本国の支配が残っていたり、経済援助という名のもとでの外国資本の進出に依存せざるを得なかったりして、依然、植民地的・後進国的性格をその基本的特徴としており、経済的に自立して真の独立国になるための戦いが、まだ続いていることを踏まえて、独立の歩みが平坦でないことにも触れておきたい。</p>	<p>○識字率の低さも、植民地統治によるもの</p> <p>「どれい貿易」 「植民地の分割」 「アフリカの独立国」 「ケニアの溶接技術者」 「経済援助・技術協力」の名のもとに日本企業のアフリカ進出が著しい。 「モザンビークも独立ノ」</p>
216-217	<p>○台地性の地形や熱帯気候や砂漠がアフリカの開発を遅らせた原因であるというような自然条件だけにアフリカの後進性の原因を求めてはならない。</p>	<p>「サハラ砂漠」 「アフリカの地形」 「アフリカの気候」</p>
218	<p>○人口が少ないのは、奴隷貿易や残酷な植民地支配のためであることにふれる。</p> <p>○暑いアフリカ、黒人の国アフリカというように単純なとらえ方が多いが、アフリカは、自然環境のみならず、住民も社会も文化もずいぶん複雑で多様性に富むことをおさえておく。</p>	<p>「アフリカの人口」</p>
218		<p>「アフリカの産業」 就業者の7～8割が農民、ゆたかな鉱産資源を持ち「アフリカの人々は金貨の山に腰かけてる貧民」といわれ、資源の多くは先進資本主義諸国の資本と技術によって開発、利用さ</p>

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
<p>3 北アフリカ エジプトアラブ共和国 トピックス「アスワン＝ハイニダム」</p> <p>新しい国々</p>	<p>分は輸出されている。</p> <p>ダム建設の目的と経緯。 予期されざる数々のデメリット。</p> <p>地中海式農業がいとなまれている。 サハラ砂漠やリビア砂漠では、近年発見された石油の開発がさかんである。</p>
<p>4 中央アフリカ・南アフリカ ギニア沿岸</p>	<p>1847年に独立したリベリアのほかガーナ・ナイジェリアの国々 ガーナは世界一のカカオの産地。</p>

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
<p>南アフリカ 南アフリカ共和国の歴史</p>	<p>(前略) 現在、国の政治や経済は、植民地時代に移住してきたイギリス人やオランダ人の子孫が支配している。しかもこれらの白人は、有色人種に対してつよい人種差別政策をとっており、大きな国際問題となっている。</p>
<p>VII ラテンアメリカ ラテンアメリカの人種構成</p>	
<p>1 歴史と自然 ラテン民族による開発</p>	<p>(前略) (ラテン・アメリカは) 16世紀の初めに侵入したスペイン人やポルトガル人に征服され、その植民地とされた。(中略) それぞれの国では、いまでもポルトガル語やスペイン語が国語として用いられている。</p>
<p>2 住民と産業 人種の混合</p>	<p>ラテンアメリカは、アングロアメリカとちがひ、人種間の混血が複雑で、多くの国では、白人とインディアンの混血であるメスチソが住民の大部分を占めている。(中略) このように人種が混合しているため、ラテンアメリカ諸国では、人種的な偏見が少ない。</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
	<p>いることを物語っているのだから、これをアフリカの後進性だけの面にとらえないように留意する。</p>	
222	<p>○鉱業の学習に際しては、外国の大企業や一部の白人が資源のめぐみを独占しつづけていて、国民の多くは、貧しい生活をよぎなくされていることに重点をおく。</p>	<p>「ザイールの地下資源と外国資本」 「日本の資本で開発がすすむ『ムソシ鉱山』」 「人種差別政策をつらぬく南アフリカ共和国」 「黒人専用のバス」解説。 「南アフリカ共和国の鉄鉱をささえる黒人の低賃金」 「南アフリカ共和国の対外貿易」 「アパルトヘイト」 各項目について詳しく解説。</p>
223		
274		<p>「ラテンアメリカの人種構成」 —ラテン系植民地では、人種差別のトラブルが少なく、白人の多いアルゼンチンにしても人種差別の意識が稀薄である。</p>
275	<p>アングロアメリカも、ラテンアメリカと同様、インディアンの社会がヨーロッパ人によって破壊されたことは共通しているが、後者においては、富を略奪し、封建的支配をもちこんだことが、その後の発展に大きな差異をもたらしたことに、やさしく、かつ簡潔にふれたい。</p>	<p>「ラテンアメリカの独立とアメリカ合衆国の進出」 「アメリカ合衆国の進出」 1889年第1回米州国際会議から、米州連帯性の理念が実現された。 モンロー主義は、合衆国のラテンアメリカにたいする武力干渉を正当化する口実といわれるほど、その対外政策は侵略的な性格をおびた。</p>
276-277		<p>「ラテンアメリカにおける人種差別」 一般にここには人種差別はないといわれているが、インディオや黒人はもとより、混血のなかにも、社会の中核からしめ出されている。土地をもたない農民や都市の貧民の多くはこうした人々である。</p>

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
中心をなす農業	農地の多くは、少数の大地主が所有し、農民の大部分は小作人やプランテーション農業の労働者として働いている。(欄外、補足説明あり)
地下資源と工業	メキシコやアンデスの山地では、地下資源が豊かであるが、主にアメリカ合衆国の資本によって開発され、大部分は輸出される。
3 ラテンアメリカの国々 カリブ海をめぐる国々	中央アメリカの地峡部や西インド諸島の国々では、アメリカ合衆国などの資本によるプランテーション農業により、さとうきび、バナナ、コーヒーなどがつくられている。(中略) カリブ海南岸のベネズエラは、世界的な石油産出国で、鉄鉱石の産も多く、石油とともに、アメリカ合衆国に輸出される。
パナマ運河	(前略) 現在、運河地帯はアメリカ合衆国の管理下にあるが、船の大型化や、パナマ運河を国有化しようとするパナマの動きなどに伴い、新運河の建設計画が考えられている。
チ リ ブラジル	
アルゼンチン	アルゼンチンは、ほかのラテンアメリカ諸国ほど、アメリカ合衆国との関係が密接ではない。これは、緯度のうえで気候が似ていて、同じような型の農牧業がおこなわれ、合衆国への輸出が少なく、むしろヨーロッパ諸国との貿易関係がつよいからである。
「ラテンアメリカの大土地所有制」	→具体的説明

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
277	貧しい人々が多いのは、外国の強い影響や地主制度に原因することを理解させる。	「ラテンアメリカの大地主制度」 「モノカルチャ経済」 「ラテンアメリカの産業」解説。
278		「アメリカ合衆国の投資」
279	ここではカリブ海以下の教材に中心をおく。とくに、合衆国資本が、バナナなどのプランテーション農業やパナマ運河の管理について、政治的・経済的に強大な支配力を握っていること、その一方では多くの貧民がいることをしっかり押さえない。この状態は、キューバにおいて革命軍が組織された当時の状況と共通していることに生徒の目を向けさせたい。	「アメリカ資本によるプランテーション農業」 「キューバ革命の意義」 「ユナイテッド=フルーツ会社」 「キューバの社会主義革命」
279		「パナマ運河」 「パナマ新運河の建設計画」解説。
280 280-281		「崩壊したチリの社会主義政権」 「ブラジルの農業」 「ブラジルの工業」 「ブラジル民衆のくらし」
282	アルゼンチンの農業は大経営であるが、これが地主制度のもとで行なわれていることを説明する。	「停滞する農業生産」
282		「ラテンアメリカの大土地所有制」補説。
283		「おもな国とアメリカ合衆国との貿易」 説

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
VII オセアニアと両極地方 2 太平洋の島々 「ミクロネシアのコブラ産業」	気候はしのぎやすい。開発はおくれているが、プランテーション農業がいと生まれ、太平洋の航路、航空路の重要な中継ぎ地。 ○コブラ産業の説明 ○石油化学製品登場によるコブラ産業斜陽化のもたらした、島の人々のくらしの変化
IX 世界の結びつき 貿易による結びつき	工業国のなかには、アメリカ合衆国のように、ゆたかな資源にめぐまれて、食料や工業原料を輸出している国もある。(中略)いっぽう、インド・インドネシア・エジプトアラブ共和国などのように、農業国であっても、食料の不足する国もある。
政治・経済・文化でのむすびつき 網 外	世界には、開発のすすんだ国もあれば、開発のおくれた国もある。とくに第二次世界大戦後、植民地から独立したアジア・アフリカの国々の中には、資本が乏しく、技術もおくれているため、産業を発展させることのできない国が多い。先進国としては、これらの国々の経済的な自立と国民生活の向上のために協力することが、大切な問題となっている。
	先進国は北半球に多く、開発のおくれている国は南半球に多いので、この問題をとくに「南北問題」ということ

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
287-289	<p>中学校における世界地誌の学習としては、さほど重視しなければならない地感ではない。大切なことは、ニュージーランドを除く島々が世界全体の中で占めている位置、即ち植民地にされてから原住民が激減したこと、民族自立の流れの中で新しい独立国が生まれていること、経済的にはプランテーション農業などを通して先進資本主義国の影響下におかれていることなどを理解させることである。</p>	<p>「おもな国の輸出」 一汎アメリカ共栄圏構想の後退。</p>
288		<p>「太平洋の島々と原住民」 「島のくらし」</p> <p>「ミクロネシアのコブラ産業」補説。</p>
297-300	貿易の面から「南北問題」を理解させる。	<p>「アメリカ合衆国のように、ゆたかな資源にめぐまれて、食料や工業原料を輸出している国もある」 「インド・インドネシア……などのように、農業国であっても食料の不足する国もある」</p>
300-301	<p>○先進国の援助の実態を明らかにする必要がある。それとともに、開発途上国内部の問題にも注目させることが要点となる。</p> <p>○ヨーロッパ・アメリカ文化への無批判な迎合、A L A 諸国独自の文化に対する無関心という風潮をあらため、アジアなどの民族文化への理解を深め、日常的にも接触の機会を重視したい。</p>	<p>「各国1人あたりの国民所得」 「交易条件」 「先進国の経済力実績」</p>
301		<p>説明 表とグラフ</p>

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
第4章 世界の中の日本 2 世界のむすびつき (2) 日本の貿易 これからの貿易	<p>がある。</p> <p>(近年、日本の)輸出が急にふえたので、アメリカ合衆国をはじめ世界の工業国も、日本製品の進出が自国の産業に及ぼす影響を恐れるようになり、又東南アジアなどの開発途上国では、日本商品の激しい売込みに反対する動きもあって、大きな問題となっている。</p> <p>又、必要な工業原料をいつでも供給できるようにするため、石油・鉄鉱石など、海外の資源の開発に参加し、それを輸入する開発輸入もさかんになっている。</p> <p>貿易は国の利益をあげることだけが目的でなく、ゆたかで平和な世界の建設に役立てなければならない。それには、相手国の国情を理解し、その人々の意志を尊重し、ことに開発途上国に対しては、資本や技術による協力を通じてその国の産業を育て、人々の幸福に役立つ心がまえが必要である。</p>

G 発 行 社 —地理的分野—

第3編 世界とその諸地域 世界の諸地域を学ぶまえに 3 アジア 新生のアジア ※と資源のゆたかな東南アジア ○複雑な住民	<p>自然・産業・生活など、変化に富んだ多くの地域が存在している。これらのことを総合的に考える習慣を養おう。</p> <p>第二次大戦後、多くの独立国が生まれた。資源を開発、産業の発展をはかり、生活水準をあげようとしている。</p> <p>この地域は民族、宗教のちがいがあり、マレーシアをはじめ対立がめだってきている。</p>
---	---

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
	先進国から、経済・技術援助をうける。
東南アジアの米作地域	米の二期作・三期作がおこなわれるが、かんがい施設がととのっていない、単位収量は少ない。 世界第1の米の輸出地域。しかし人口増加で米の輸出量がへってきている。
商業的熱帯農業の発達	○マレーシア、インドネシアではゴム栽培がさかん。その他、ココヤシ、コーヒー、キナ、さとうきび等の栽培輸出している。 ○アメリカ合衆国の合成ゴムの産額が2倍になり、天然ゴムの輸出に打撃をうける。
資源の開発 東南アジアと世界の結びつき	○鉄鉱石、ボーキサイト、石油、チーク材、ラワン材は重要な輸出品である。 ○先進国からの経済技術援助をうけ、生活程度をあげることが大切だ。日本もメコン川開発計画に技術援助している。
インドを中心とする南アジア 南アジアのあゆみ 複雑な住民	17世紀イギリスは南アジアの大部分を植民地とした。カースト制度の影響もあって、住民は貧富の差が大きく、農民の大部分が小作人で生活程度低い。教育のおくれ、風俗、習慣もさまざま。
ゆたかな農産物	インドは世界第2の米産国でありながら、米の輸入国である。 南アジアは小麦、棉花、シュート、茶の輸出国。
工業の発展	インドは近代的綿工業が発達し、国際市場で日本の綿製品の競争相手国。鉄産資源、水力資源、労働力にめぐまれている。

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
	<p>いることを理解させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○米の生産は、日本より粗放的で技術も低い。 	<ul style="list-style-type: none"> ○米作に最もよい自然条件である。
204～206	<ul style="list-style-type: none"> ○商業的熱帯農業の成立と農産物の種類分布について理解させる。 ○第2次大戦後、植民地が独立し、プランテーションも変化していることに注意 ○農業だけでなく、鉱産資源の開発についても同じことがいえることに注意。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ゴム園、分布について。 ○プランテーション(栽植農業)について説明。
206～208	<ul style="list-style-type: none"> ○地下資源が豊富。それらが原鉱のまま先進工業国へ輸出されていることを理解させる。 ○鉱産資源の開発は外国資本にたよってることをおさえる。 ○自分の力で開発の動きあることに注意 	<ul style="list-style-type: none"> ○鉱産資源とすずの産額 ○東南アジアは工業国日本のたいせつな市場である。 途上国の工業化 プラント輸出もふえる。 ○アジアハイウェイ、メコン川の開発に、日本が資本、技術援助をしている。
208～211	<ul style="list-style-type: none"> ○古い文化を持つ南アジアが第2次大戦後、独立したことを理解させる。 ○宗教上の対立や身分制度が近代化をはばんでいることを理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○土地利用、1人あたりの国民所得を日本と比較→生活水準低い。 ○イギリスのインド支配。 ○カースト制度。 ○バングラディッシュの独立。
211～212	<ul style="list-style-type: none"> ○貿易、イギリス連邦を通して世界の国々との結びつきを理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○日本と南アジアの国々との貿易について。 インド一綿織物の生産高世界第1。農産物を輸出し、工業製品を輸入する発展途上国であ

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
南アジアと世界の結びつき	インド、パキスタン、バングラディッシュは工業製品を輸入。南アジアでは日本の技術援助を期待してる。
石油と結びつく西南アジア 古代文明の発生地	第二次大戦前はイギリス・フランスなどの勢力下にあったところで、現在もこれらの国々や、アメリカ合衆国からの援助をうけて開発につとめる。さばくのオアシスを利用して農業、商業がおこなわれている。
ゆたかな油田	<ul style="list-style-type: none"> ○ 石油埋蔵量、世界の 2/3 産油量は 1/3 ヨーロッパやアメリカ合衆国へ送られる。 ○ 石油産出国は、アメリカ、大会社から採掘利権料をとり、それが国の財政をささえる。その収入で国がどのように豊かに発展したかクウェートの例で説明されている。 ○ 日本の原油の 90% 西南アジアから輸入。
石油景気にわきたつ西南アジア	<p>石油を産する国々では、アメリカ合衆国その他の大会社から採掘利権料をとり、それが各国の最大の収入となり、国の財政をささえている。クウェートについて、石油の採掘利権料がどのように使われているかをみよう。クウェートは、石油が発見されるまでは貧しい小国にすぎないが、石油の採掘利権料によって一躍、財政のゆたかな福祉国家となった。</p> <p>学校はすばらしい設備や楽しさをほこり、教育費は、いっさい無料。そして、高校卒業者の大半は、国の費用でイギリス・アメリカ合衆国などの大学へ留学させている。病院も無料、近代的な下水道と上水道が完備。すばらしい道路や、公園・住宅・発電所などをつくった。海水を蒸留する大規模な工場をつくり、入びとの飲料水をすべてまかなっている。この水でうるおう街路樹は、あふれる緑をそよがせている。まさに「石油に浮かぶ国」である。</p>
4 アフリカ アフリカの人びと	低い人口密度 高温、多湿、乾燥、風土病、生産性のない土地。 過去、奴隷としてアメリカ合衆国、ラテンアメリカへ強制移住させられた。
アフリカの諸地域 さばくの広い北アフリカ	<ul style="list-style-type: none"> ○ ナイル川河谷と三角州の産業の発達と開発がすすみ、人口が集中している。 ○ 石油生産国として開発される。
熱帯アフリカ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 商品作物を生産する。 銅・ダイヤモンドがゆたかであり、ベルギー、英、米日によって開発される。

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
212-213	<ul style="list-style-type: none"> ○ 二大陸の結接点にあり変動をくりかえしてきたことを理解させる。 ○ アラブ諸国とイスラエルの対立など歴史的背景に気づかせる。 ○ 遊牧民がしだいに定着していくこと。 	<p>る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 石油との関係でアジアより国民1人あたりの所得たかい。 ○ エルサレム都市と宗教。 ○ イスラム教徒の生活。 ○ 西南アジアのかんがい。
213-216	<ul style="list-style-type: none"> ○ 豊富な石油資源が西南アジアの国々の財政をささえている。 ○ 油田の分布、石油の地位について把握させる。 ○ 国際石油資本と民族主義の動きにふれる。 ○ 日本の進出。 ○ 探掘利権料のもつ意味、使用について具体的に。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 中東油田。 ○ 日本の開発しているアラビアの油田。 ○ 世界の石油消費量。 ○ 西ヨーロッパ諸国の原油輸入先 } グラフ ○ 国際石油資本。 ○ 石油利権料。
220-221	<ul style="list-style-type: none"> ○ 開発の後進性。 ○ 最近の民族運動。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 文盲率の高さ、独立後教育に力を入れる国がふえる。 ○ 人種、民族。 ○ 国民所得。
221-224	<ul style="list-style-type: none"> ○ ナイルの開発が北アフリカの発展に重要な意義を持つてること。 ○ アラブ連合の生産の大部分はナイル川三角州で行なわれている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 緑にめぐまれたオアシスの町。しかし電気も病院もなく恵まれない生活を送る。 ○ 米・仏によるサハラ油田の開発。フランス油田確保のためにアルジェリアの独立に抵抗。
224-225	<ul style="list-style-type: none"> ○ 黒人の多い国。黒人による政治・経済のすすんだ国。 ○ 天然資源の豊富さと開発の方法。 ○ 独立国としての建国のようす。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ カカオの産額、ダイヤモンドの産額。 ○ 鉱産資源の分布。

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
温帯の南アフリカ	白人に住みよい気候なので、オランダ、イギリス人が移住している。白人による原住民、インド人に対する差別が国際的問題となる。資源、金の産出量は世界第1。
アフリカの特色と世界との結びつき	アフリカ人のアフリカ建設をめざし、生活水準の向上、教育の普及、資源の開発に努力している。そのためヨーロッパ諸国、アメリカ合衆国の経済や技術援助にたよる。日本は農・工業の技術指導を行い、文化的な協力をすすめている。
8 ラテンアメリカ ラテン民族のひらいた新天地	インディアン文明の国へラテン民族移住し、その母国のスペイン、ポルトガルの植民地となる。19世紀前半に大半が独立し、多くの共和国をつくったが、政治・経済上、合衆国とは深い関係にある。
住民と人口 人種差別のほとんどないラテンアメリカ	人口増加率、世界の大陸の中で一番。 白人、インディアン、黒人がいりまじって生活。皮膚の色がいくつもあり、そういう面からみる人種差別まったくなし。人種的偏見ほとんどない明るい国。(著者の体験談)
ラテンアメリカの諸地域 カリブ海をめぐる地域	商業的熱帯農業さかん。特に砂糖農園は国有になり主に、ソビエト連邦へ輸出。鉱産資源が多い。
アンデスの国々	○豊かな鉱産資源、石油、農業。さかんな漁業の紹介がしてある。
東部の高原	ブラジルのコーヒー生産は世界一。露天通りのイタビ 日本の資本はリオデジャネイロで造船、自動車、紡績などの工業おこす。
中央低地の特色	移住した日系人はシュート、こしょうを栽培してる。ア合衆国の必要とする産物がアルゼンチンは少ない。従って合衆国との結びつき弱い。
ラテンアメリカの特色と世界との結びつき	ラテンアメリカはインディアンの言語、宗教、政治、生活様式が影響した地域。

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
225-227	<ul style="list-style-type: none"> ○南アフリカの農業・鉱業 ○独立国の政治、経済的独立に励む姿と問題点 ○導入では、南アフリカに関心をもたせる程度で深入りしない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○日本とアフリカの国々との貿易、自動車等の輸出増がこの地域からの輸入金額との差が増大し、アフリカ諸国の外貨不足をおこす。日本から輸出している軽工業製品とアフリカ諸国の工業化と競合関係。 ○南アフリカの白人と有色人種の制度的隔離差別の確立の問題（アフリカーナ系白人）。 ○農業、鉄道建設にも日本の技術が生かされる。
277	<ul style="list-style-type: none"> ○ラテンアメリカの低い国際的地位を理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○植民地時代のラテンアメリカ、ラテン系の人々によって資源がヨーロッパへ持ち帰られ荒される。自由求めてヨーロッパから独立。現在、政治・経済・ア合衆国の影響をうける。
279-280	<ul style="list-style-type: none"> ○人種の構成複雑。そのなりたちと、人種差別がほとんどない事実を具体例をとりあげて理解させる。 南アフリカ、ア合衆国と対比させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○人種の構成。 複雑な人種構成が人種差別をなくしている。 ○混血のあゆみ。
281-282	<ul style="list-style-type: none"> ○産業の特色と、ア合衆国との関係。 ○経済のおくれの理由。 ①産業の構成 ②外国資本による収奪 ③大土地所有制度、おくれた農地改革 ④歴史性、民族性。 	<ul style="list-style-type: none"> ○パナマ運河の開発（交通）。 ○アンデス山脈の風土。 ○バナナの生産高。
282-283	<ul style="list-style-type: none"> ○ブラジル農業、鉄工業には日本もかわる。 ○移住民の活躍。 	<ul style="list-style-type: none"> ○コーヒー栽培産額、資源。
284-285	<ul style="list-style-type: none"> ○産業の特色。 ○日本との関係、ア合衆国の役割。 ○世界への原料供給国であるが工業化へも努力している。 	<ul style="list-style-type: none"> ○パンパ（草原）農耕、牧場の豊かさ。アルゼンチンの心臓部になっている。 ○広大で肥沃なパンパが国際市場の需要にこたえるため、農牧業中心として植民、開拓される。

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
<p>9 オセアニア オセアニアの島々 太平洋諸島</p> <p>第4編 世界のなかの日本 1 日本と世界との結びつき 外国に求める鉱産資源</p> <p>日本をめぐる交通、貿易 貿易にささえられる日本の経済</p>	<p>原料を輸出して、日常生活用品、機械などの製品輸入している。アメリカ合衆国とのとりひきは貿易額の40～60%。</p> <p>英、米、仏、豪の植民地や、信託統治領である。コブラ、パイナップル、さとうきび、ニッケル、リン鉱を輸出している。</p> <p>世界の石油の大部分は、途上国から先進国へ送られ、石油の海上輸送量は、世界の海上輸送量全体の約1/3をしめ、各国きそって大型タンカーをつくる。 日本は、イラン、クウェート、サウジアラビア等から輸入。西南アジアその他の石油を開発輸入。</p> <p>日本貿易のもっとも望ましいすがた一途上国の鉄鉱石、石油、林産資源などの開発輸入につとめ、加工して、重化学工業の製品を輸出する。</p>

H 発行社 ——地理的分野——

<p>第3章 世界とその諸地域 第3節 アジア 1 地図をながめて 位置とあゆみ</p>	<p>西南アジアは20世紀に石油が発見され、世界の石油の主産地として注目を集める。第二次世界大戦後、ユダヤ人の故郷のパレスチナにイスラエルが建国され、アラブ民族の国々との間で争いが起きている。民族運動が高まり多くの国々ができた。</p> <p>東南アジアは、16世紀以後、ヨーロッパ諸国、合衆国の植民地となり、第二次大戦後独立、今なお政治、経済は不安定。</p>
--	---

該当 ページ	指 導 冊	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
291	<ul style="list-style-type: none"> ○自然条件が類似していても、なぜ人間生活に差異が生ずるのかを考えさせ、人間の側に目をむける態度をうえつける。 	<ul style="list-style-type: none"> ○大土地所有制度と小作制度。
306	<ul style="list-style-type: none"> ○資源の利用と開発の必要性を国際分業という観点から考察させる。 ○資源確保をめぐる先進工業国間にあらそいがあること、発展途上国への援助の必要性気づかせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○世界の鉱産資源の分布。日本に集まる鉄・鉛・石、石油、石炭。 ○おもな鉱産物の海外依存率。
315	<ul style="list-style-type: none"> ○日本の貿易の今後の課題（先進国としての日本の役割）。 ○貿易の発展が、その国民生活を左右することに着目させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○発展途上国の輸出品目割合、第1次産品の需要の低さが先進地域との経済格差を生み出す。 国際経済における重要な課題。 ○低い東南アジアの生産性。 ①半植民地状態、工業未発達、土地の需要多く、地主制混存。 ②家族労働 経営規模小さい。 ③農業生産の改善できず、後進性と停滞性、貧困が一般化。

169-170	<ul style="list-style-type: none"> ○政治・経済問題に深入りせず、後の伏線とする。 ○歴史については古代、中世、近代の概略。 ○とくに植民地時代と民族運動。戦後の 	<p>アジアの民族運動・地形・気候などが書かれてあり、特に民族運動では次のように述べられてある。</p> <p>戦後は政治的独立をなしとげた国が多い。しかし経済的に自力する力が弱く、民族、宗教</p>
---------	---	--

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
人々の暮らし	<p>農業技術は日本のようにいちじるしく進んだ国から、非常に低い国まである。</p> <p>日本をのぞくとアジアの工業化はほぼんに遅れているが、農業技術の向上や工業化に努力している。</p> <p>政治の不安、資本が不足し、先進国からの援助を受けている国も多い。</p>
4 新興国の多い東南アジア 自然とあゆみ	<p>熱帯の開発には困難な問題が多いうえ、ながい間の植民地支配によって、東南アジアは開発の遅れた地域となる。第2次世界大戦後は独立国が増えたが政治や経済の面で不安定な状態を続けている国が多い。</p>
インドシナ半島の国々	<p>雨季の水を利用して稲作が行われ、主要産業となる。二期作も可能であるが、灌漑設備や稲作技術が遅れている。</p> <p>日本などの指導や援助を受け、稲作技術の改良、多目的ダムの建設に力を入れ、米の増産に努めている。</p> <p>生産高のわりに人口密度が低いので、米が重要な輸出品である。</p> <p>● 鉱山・ゴム・さとうきび・あぶらやし などのプランテーションを営んでいる。</p> <p>ビルマ・タイの山地ではチーク材、地下資源として、ビルマの石油、タイのすず、ベトナムの石炭。</p>
マレーシアとシンガポール	<p>マレーシアはゴムの栽培が急速に発展して、世界の天然ゴムの産出国となる。すずは世界1/3の生産、鉄鉱石も生産が増加している。</p> <p>シンガポールは中継貿易で栄えてきたが近年は工業化も進められている。</p>
インドネシアとフィリピン	<p>インドネシアは開発がいちじるしく遅れ、産業は農業で、ゴム・あぶらやし・さとうきび・茶・コーヒーなどのプランテーションがとくに重要。</p> <p>米は不足、とうもろこし・バナナ・ココヤシなどの自給的農業も行われている。</p> <p>石油・すず・ボーキサイトの産出量が多い。</p> <p>フィリピンは米・とうもろこしが広く栽培され、マニ</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
172	独立に焦点を合わせる。	上の争いなど困難な問題が多く残っている。
186-192	<ul style="list-style-type: none"> ○ 東南アジアにヨーロッパ人が進出した経過や、その後の民族運動、第2次世界大戦、独立後の政治情勢などについては深入りしない程度に補説する。 ○ プランテーションの経営について、戦前のような最近の変化について補説する。 ○ オランダの植民地時代におけるジャワ島の開発について補説する。 ○ プランテーションによる商品作物と自給作物。 ○ インドネシアは米の生産は多いが人口が多く食料不足の国で輸入していることに注意する。 ○ 経済の自立に努める国々に共通する技術や資本の不足を日本が援助していることや交易の歴史が古く深い結びつきがあることを理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 東南アジアの米の産地、移動プランテーション、天然ゴムの産出、ゴム園の経営、農林業、鉱業、自給的農業、マニラあさ、ラワン材などについて書かれているが、特に経済面で人口と食料、資源の開発、貿易と経済的自立などの諸問題をかかえていることが述べられている。

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
東南アジアと日本	<p>ラオス・コブラ・砂糖などは重要な輸出源。森林の開発が進み、日本へもラワン材を輸出している。</p> <p>東南アジアは、日本にとって重要な貿易相手地域である。</p> <p>土木建築をはじめとする技術援助、農業技術の改良、医療活動などで活躍する日本人がめだっている。鉱山の開発や工業の経営に進出する会社が多くなった。</p>
5 近代化に努めるインド地方 自然とあゆみ	<p>、イギリスが工業の発達をおさえたり、教育や社会の改革に力を入れなかったため独立後も近代化をさまたげる問題が多く残っている。</p>
大きな半島の国インド	<p>住民の約70%は農民。米・小麦・茶・砂糖・棉花の生産が多い。黄麻・わたが栽培され、世界有数の綿工業国となった。独立後、重工業の発展に努めた。</p>
パキスタン・バングラデッシュと スリランカ	<p>第二次大戦後、イスラム教徒の多い地域が、インドと分離して独立し、パキスタンとなった。</p> <p>国土が東西2つに分かれ、その間2,000kmはなれ、民族・言語・産業や住民の生活水準に大きなひらきあって対立。そのため、1971年、東部はバングラデッシュとして独立。</p>
インド地方と日本	<p>○日本はインドへ農業改善・工業の開発・ダム建設などに協力し、多方面に援助をしている。</p>
6 石油でうるおう西南アジア 自然とあゆみ	<p>○1869年スエズ運河が開通。20世紀にはいって油田開発。</p>
ゆたかな石油資源 石油の利権でうるおう国々	<p>○ペルシャ湾沿岸には豊富な油田地帯。</p> <p>原油や揮発物の値上げ要求など、産油国の立場を強めている。</p>
遊牧とオアシス農業	<p>○オアシスでは小麦、わた、たばこ、なつめやし栽培され、草原ではひつじやらくだの遊放を行っている、貧富の差が大きい。</p>
西南アジアと日本	<p>○海底油田を日本の石油会社が掘りあてた。日本が輸入</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
192		
193-198	<ul style="list-style-type: none"> ○ 東南アジアの産業構造を思い出させ、類推させる。 ○ インドのあゆみについて簡単に補説する。 ○ 軽工業については原料立地的な特色を重工業についてはダモダル川開発との関連から取りあつかう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 南アジアの住民の宗教、農業、綿糸の生産の推移。主要国の粗鋼生産の増加、人口増加と食糧問題。ダモダル川流域の総合開発が書かれているが特にダモダル川流域の総合開発の中で水源地の山地は森林に乏しく、雨季にはたびたび氾濫して沿岸に大きな被害を与えていた。政府はアメリカ合衆国の援助のもとで1948年からこの川の開発にとりかかったとのべられている。
198-200	<ul style="list-style-type: none"> ○ 油田地域、輸送方法、海底油田の開発、利権料の問題などに気づかせる。 ○ イラン・イラク・クウェート・サウジアラビア・中立地帯などの内陸油田に対して、ペルシャ湾海底油田の開発にも注目させる。輸送方法としてのパイプラインの規模の大きさ、地中海沿岸に集めている点。 ○ イギリス・アメリカ・フランスの開発と利権について補説する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ OPECと石油問題、石油資源、海底油田開発などについて書かれているが、特に石油資源の要地であり、スエズ運河の重要性などがのべられている。

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
<p>第4節 アフリカ</p> <p>1 地図をながめて 位置とあゆみ</p> <p>人々のくらし</p> <p>2 アラビア人の多い北アフリカ ナイル川にたよるエジプト</p> <p>地中海に臨む国々</p> <p>砂漠の開発</p> <p>3 新しい独立国の多い中部アフリカ ギニア沿岸の黒人の国々</p> <p>資源のねむる中東部の国々</p>	<p>する石油の90%をしめている。</p> <p>16世紀ごろから、多くの黒人が奴隷として南北アメリカに送られ、アフリカの文化・経済に大きな打撃をあたえた。19世紀には、資源を求めて、ヨーロッパ各国の植民地化がはじまった。</p> <p>第2次世界大戦後に多くの国が誕生した。産業の開発教育の普及など、国力の発展に努めている。</p> <p>アフリカの独立国は現在46カ国(1975年8月)を数え、国連議席の1/8をしめて、発言力を強めている。政治的・経済的に不安定なところも多く、人々の生活にまだ原始的なところも残っている。</p> <p>わた。小麦・米の生産がさかん。 電力により工業の建設をはじめとする国の近代化が進められている。</p> <p>オリーブ・ぶどう・オレンジ・小麦の栽培、地中海式農業。石油・鉄鉱石・リン鉱石。石油精製や石油化学工業がおこっている。</p> <p>石油の輸出は砂漠の国に富をもたらした。かんがい用水の開発で、砂漠の耕地化もすすめられている。</p> <p>○ガーナはカカオ生産量が世界一。 また、ボルタ川総合開発は、この地方はじめての工事として注目を集めてる。リベリア商船の保有トン数も多い。しかし原住民の生活はいっばんにひくい。</p> <p>サイザルあさ・コーヒー・綿花が栽培され、牧畜業もみられる。鉱産資源がきわめて豊富。ザンベジ川流域では大規模な総合開発がすすめられている。</p>

該当 ページ	指 導	書
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
	<ul style="list-style-type: none"> ○わが国はペルシャ湾のカフジ地域の利権を得て、その利権料をサウジアラビアに支払っている。最近の石油問題を取りあげて補説する。 	
203—205	<ul style="list-style-type: none"> ○民族・言語・宗教などのちがいが独立国家の発展に大きな阻害条件になっていることに注意する。 ○アフリカの古代文明・探検・奴隷狩り、植民地化、民族運動、独立などを補足説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○アフリカのおゆみのなかで、新しく独立した国々は、いずれも経済が不安定な上に民族間の対立が強く、政変もおこりやすい状態であって政治的、経済的に安定した国となるためには多くの問題をかかえている。
206—207	<ul style="list-style-type: none"> ○地中海農業については、産物中心に進める。 ○砂漠の開発は実感的な理解を得させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○農業についてのべられている。鉱工業についてとくに石油の開発は西南アジアの石油産出国の競争相手として脚光をあびるようになった。
208—210	<ul style="list-style-type: none"> ○カカオ・サイザル麻の生産は世界一であり、またコンゴ盆地の豊かな資源に注目する。 ○自然と産業、住民の生活を中心にまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○アフリカの農業について書かれている。

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
<p>4 白人の力の強い南部アフリカ 畜産と鉱業の南アフリカ共和国</p> <p>アフリカと日本</p> <p>第8節 ラテンアメリカ 1 地図をながめて 位置とあゆみ</p> <p>人々の暮らし</p> <p>2 合衆国と強く結びつく中央アメリカ 高原の国メキシコ</p> <p>カリブ海をめぐる国々</p> <p>3 近代化をめざす南アメリカ アンデス地帯の国々</p> <p>コーヒーで栄えたブラジル</p>	<p>○地中海式農業がさかん。 金とダイヤモンドの生産は世界有数。</p> <p>貿易がさかんにおこなわれている。日本からはまた農業 や鉄道の技術指導・医療活動も行っている。</p> <p>かつては、メキシコやペルーの高原に、古代文化が栄え た。16世紀以後、大部分がラテン民族の植民地となっ たが、19世紀にはいると各地にあいついで独立。合衆 国など、外国の経済支配をうける。工業も発展しつつあ り、資源がゆたかなだけに、今後の動きが注目される。</p> <p>人口の都市集中はげしい。人種差別は少ない。 鉄道は未発達のところが多い。自動車と航空機が利用 される。</p> <p>とうもろこし・小麦・わた・コーヒー・さとうきび・ サイザルあさが栽培される。 鉱産資源もゆたかで、銀・油田がある。製鉄、石油化 学、自動車などの重化学工業、農工業国となる。しかし 国民の大半をしめる農民の生活はまだ貧しい。 バナナ・コーヒー・さとうきび栽培。 キューバは砂糖生産国世界一。 ジャマイカは世界一のポークサイト生産国。</p> <p>鉱産資源がきわめて豊富。 チリの銅・ペルー・ボリビアの銀・すず・亜鉛・ベネ ズエラの石油。各国の経済をまかなう重要な輸出品。 バナナ・さとうきび・米・わた・カカオ・コーヒーな どのプランテーションが多い。しかし、農民の多くは、 すずしい高原で、自給農業を営んでいる。</p> <p>コーヒーの栽培が19世紀頃からおこり、日本やヨー ロッパから多くの移民をまねいた。 ○未開発の鉱産資源が埋蔵されている。近年、日本や合 衆国の援助で製鉄所も建設された。</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
211	<ul style="list-style-type: none"> ○政治・経済・社会生活上における黒人の差別について具体的な例をあげて説明するとよい。 ○金・ダイヤモンドは世界的な産物であること、南アフリカ共和国はアフリカ最大の工業国であることなどに留意する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○人種差別についてのべられている。
263--265	<ul style="list-style-type: none"> ○ラテンアメリカの開発がアングロアメリカの開発と異なることに注意。 ○熱帯雨林のため開発がおくれている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○アマゾン川と熱帯雨林について。民族、インカ帝国についてのべられている。
266--267	<ul style="list-style-type: none"> ○メキシコの鉱業はかつては、輸出の大部分を占めるほどであったが近頃は輸出総額に占める鉱産物の割合は15.9%と低下している。 ○キューバのさとうの最大の市場であった合衆国との断交でどんな影響があったか。 	<ul style="list-style-type: none"> ○農産物・銀・ボーキサイトの生産、貿易について書かれている。 特に、貿易の中では、原料・食料の供給がもて、工業はいちじるしく立ちおけている。
268--271	<ul style="list-style-type: none"> ○ラテンアメリカの産業に合衆国の影響のあることに留意する。 ○アンデス諸国の鉱産資源が自国の資本で開発されていく。 ○チリの日本への輸出は原鉱石であることに留意する。ペルーの水産業は日本とかなり異なる。 ○ブラジルのコーヒー栽培はプランテーションと異なることとコーヒー栽培だけにたよる危険を分散することから多角経 	<ul style="list-style-type: none"> ○南アメリカの農牧業、国による違いが書かれてある。 工業と農業、生産の変化、また貿易の中ではラテンアメリカからの輸入品は鉄鉱石・繊維原料・小麦・馬肉など、日本の工業原料となるものが主である。

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
肉と小麦のアルゼンチン	工業化に努め、自動車・船輸送用機械が自給できる。 肉類・羊毛・小麦・とうもろこしを輸出。 製鉄・自動車・機械工業・石油化学工業が発達している。
ラテンアメリカと日本	○日本とラテンアメリカの貿易がさかん。 ○鉱山・工業・水力開発などへの日本からの資本・技術の援助や企業の進出が活発。
第9節 オセアニア 2 オーストラリアとニュージーランド 太平洋の島々	ニューカレドニア島はニッケル。ナウル島はりん鉱石。 ブーゲンビル島では銅の開発がはじめられ近代工業もおこってきた。
第4章 世界のなかの日本 第2節 世界と結びつく日本 2 貿易による世界との結びつき 自由化のなかの日本の貿易 先進国と発展途上の国々	○日本の産業が技術やしくみのうえで改善を進め、発展途上国への援助にも力をそそぐ必要がある。 経済の発達に大きな差がある。途上国はかつて植民地。いずれも国土の開発に努めてるが、資金、技術がおくれ、先進国の援助にたよらなければならず開発も思うようにすすまない。人口の増加もはげしく、産業、経済、生活水準の差広がる。これを南北問題という。
第3節 あすの日本をめざして 3 世界のなかの日本 世界の一員としての日本	○日本企業が世界に進出し、現地との共同出資で工業や鉱山を開発したり、土木や建築を請け負うものもあり、海外投資額は急速に増加している。 貿易と関税に関する一般協定 (GATT) や経済協力開発機構 (OECD) に参加して途上国の援助にも積極的に活やくしている。

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
	<p>営につとめている。</p> <p>○合併会社による製鉄所。</p>	
276-277	<p>○フィジー島へ日本軽金属、昭和電工、住友化学工業のアルミ三社が開発輸入計画をもつ。</p>	<p>○マオリ族、ミクロネシア・メラネシア・ポリネシアについて書かれている。また、フィジー島のボーキサイト開発計画についてくわしくのべられている。</p>
299	<p>○先進国と発展途上国の格差だけでなく発展途上国の中にも格差が生まれていることに留意。</p>	<p>○発展途上国の人口・面積と国民総生産について書かれている。</p>
311	<p>○国連憲章を尊重する日本の外交であるが自由主義陣営の一つであることを認識する。</p>	<p>○条約機構・条約・共同体・自由貿易連合などについて書かれている。</p>

抽出作業を終えて 調査担当委員の所感

宮崎 幸雄

教科書の内容

- ① 南北問題の記載箇所——『世界の諸地域』中のアジア、アフリカ、ラテンアメリカの項と『世界の中の日本』の貿易に関する項である。
- ② 『世界の諸地域』中での取り上げ方——ここでは各地域の一般的な地誌に加えて若干の歴史的沿革、例えば植民地からの独立過程などに触れ、現在の産業構造の諸問題について解説し、発展のおくれについては、主として産業構造、社会制度上あるいは宗教にその原因を求めている。人口、食糧問題、資源の開発、産業とくに工業の振興について記し、それに対する先進国の資本、技術援助の問題が取り上げられている。開発の実情がのべられるところ、例えばメコン川総合開発、ボルタ川開発、ダモタル総合開発などはその名称だけが、場合によっては、計画の要点があげられている。日本の援助、技術指導についても、また発展途上国と日本の結びつきについても一応の解説はあるが、その内容に関しては教科書によって語句内容、掲載量にかなりの開きがある。
- ③ アジア——新生のアジアとして、第2次世界大戦後、植民地から独立した多数の国々の後進性と植民地であった事との関連づけはあるが、各国論になった時、産業構造、多民族の問題、農業技術のおくれなど後進性にふれ、商業的熱帯農業、プランテーションという語句を使いながら植民地政策がどのようなものであったか、そのアジアの現状への因果関係の形で説明するのではなく、それぞれ分離した客観的な事柄として羅列してある。先進国からの技術や資本援助をうけてとあるが、具体的にどんな形ではかかれていない。中近東では石油問題に多くの紙面が費やされ、その地域の住民のもつ石油以前の文化と石油以後の文化の葛藤の問題など、その国の住民の立場にたつての問題への提起がない。
- ④ アフリカ——奴隷の問題、ナイル川の昔と現在、商品作物、人種差別、欧米・日本の諸援助などが関連事項として出てくる問題であるが、具体性に貧しい。
- ⑤ ラテンアメリカ——植民地、インディアン、人口、農業、日本人

移住、外圍資本と関連事項はあり、それぞれ説明はあるのだが、語句が列挙されているだけという感をまぬがれない。もう一つ気になったことは、どの教科書もラテン・アメリカにおける人種差別の問題はないと云いきっているのだが、経済、権力の集中は白人の側にあるのが現実だとすれば、記述は正確さを欠き、この背後にこそ南北問題につながるものがあるとすれば放置しておけないのであろう。

総体的にいえば、極めて多様な抽象的な知識が地理の教科書には出てくる。そして指導書はそれをさらに詳述する形になっている。その地域あるいは問題について文学者などの抜萃文をのせていたし、このような断片的な知識がどのようにして子供たちの記憶にとどめられて行くのかかなり疑問をいだいた。「運動の瞬間をとらえ、それを無限につなぎあわせても運動の本質は、全体はとらえられない」といったベルグソンの言葉を思い出す。産業、公害、人口問題と開発、資源、人種差別、植民地、外圍企業の進出、先進国の援助など語句として取上げない教科書はないのだが、具体的な各国固有の文化や生活習慣などの記述が少ないせいか、煩雑なだけで印象がうすい。これらは南北問題理解への大切な基礎データとなるもの故、この扱いに再考を促したい。

- ⑥ 『世界の中の日本』における取り上げ方——日本の産業の推移から貿易問題に入って、日本の相手国としての先進国と発展途上国をとらえる。この時の格差の問題を経済面からのみとらえている。本によっては、多極化する世界情勢の中で発展途上諸国の発言力の増大という点について記述があったり、経済大国日本とあって、発展途上国と日本のこれからの結びつきについて、主に経済協力（援助）と貿易の観点から解説しているものもある。また国際競争、海外投資、海外進出、開発輸入など貿易上の問題に終始して、これからの日本の貿易の発展のためには各国と協調する必要を説く教科書もあって、各教科書の立場には一連性がない。

南北問題という語句そのものをとっても、A発行社やH発行社は先進工業国と発展途上国の経済上の開きと解説し、その差を縮小す

ることの重要性を述べているが、E発行社やO発行社には「南北問題」という語は使われていない。

これについて1頁をさいてこの問題をまとめて扱っているH発行社の次の例があるが、論旨は明解で余す所がないのだが、仄えてくるものがない：

「『先進国と発展途上国の国々』 世界には、産業や経済の発達している先進国と、開発に努めている発展途上国があり、経済の発達の程度に大きなひらきがある。発展途上の国々は、かつて植民地であった東南アジアやインド・アフリカ・ラテンアメリカなど、熱帯や南半球に多い。これらの国々は、いずれも国土の開発に努めているが、資金が不足していたり、技術が遅れているため、その多くを先進国の援助にたよらなければならず、開発も思うようには進んでいない。そのうえ、食糧や物資の生産が、はげしい人口の増加に追いつけず、北半球の温帯地方に多い先進国との間には、産業や経済生活水準などの差がますます広がる傾向にある。これを南北問題とって、国際社会の大きな課題となっている。」

- ⑦ 移住問題——これはどの教科書も「世界とその諸地域」の中で、アングロアメリカにおけるヨーロッパからの移民と黒人問題、ブラジルにおける日系移民の活躍の項である。農業開拓に大きな寄与をしているという程度の記述である。世界の人口の項で人口のアンバランスが説かれ、人口増加の問題も記述されるが、積極的に海外移住に対するすすめかけは技術協力に関してと同様何の記述もない。大国日本に求められる協調的な姿勢は記述されても全体的に常に客観性を失うまいとする文体のために、何となく、何事も「ひとごと」で自分の問題として受けとめられないのである。

掲載量と資料について

- ・語句の多少、掲載量、視点も教科書によってかなり差がある。
- ・各国の説明部分が南と北の各々の事情説明になっていけば、南北問題を扱う時うまい導入となるのだが、あまり脈らくはない。
- ・統計資料、挿入写真はそれ、使い方、撮っているものは教科書によって随分ちがいが、統計資料は少し多すぎる感があり、写真につ

いては発展途上国の実情を知らせるものは皆無に近い。それらの国の写真は僅も少なく、道路上のものか、野外で働いているものが多く、どんな家に住み、どんな物を食べているかなど生活を示す写真は全然ない。それらは貧しさを示すのでさけたのであろうか？ 別な文化をうつし出す写真もまた少かった。

所 感

- ① まずどの教科書にも「南北問題」または「開発問題」の語句とその解説が入るべきであろう。
- ② 地理という科目は政治やイデオロギーに余り影響されずに子供たちに世界の国々の実状をありのままに知らせ、現代の諸問題に目を向けさせることの出来る貴重な機会をもっているのだが、教科書は徒らに膨大な知識と統計数字の羅列に終って、そこにも自分たちと同じに生きた人間がいる現実の姿を知らせる工夫が少ないように思える。地理の学習に子供たち個々の興味をどうして引出すか。自らの興味にひきずられてなら可成り多量の知識を生きた知識として子供たちは頭の中にしまいこみ、それは必要時にすぐ出てくるからだ。地理の本を冒険の旅の話、旅行スケッチ、その国々の詩人の言葉を借りて描写するとか、縦方風土記にみられたように同年代の子供の生活を語らせるとか、これらは副読本あるいは器材の中で工夫しているのであろうか？
- ③ 発展途上国の文化や社会を勉強する前に、産業構造の良し悪しや、貿易上の観点からの解説が多く、発展途上国の山積みする問題の多面的解説が少ない。工業優先の産業感が全体をしめている割には、何故工業化が起り、それがどのように世界に影響を及ぼしているかについて説明が乏しい。
- ④ 発展途上国、先進工業国等と世界を区分して、南北問題を考えるというのでなく、世界のすべての国に等しく意味のある人類の開発問題といった理解や態度が望ましく、教科書を作る側の見解の統一がほしい。
- ⑤ 地理の教科書の中で南北問題が取上げられるのは、巻末に近い「世界の中の日本」という章の中で、貿易立国の必要上、国際協力

が説かれる時に、先進国と発展途上国の不均衡が問題となり、その時クローズアップされるのだが、そのとらえ方は概してあいまいである。国際競争のきびしさを子供たちに説くのもなく、発展途上国のおかれている立場にたつての問題の指摘でもないのである。

またアジアの章では人口増加と食糧問題が、取上げられているが細かな統計数字の推移から子供たちは何を学ぶであろうか？南北問題は現実の問題であって、単に子供たちの国際的理解を深めるだけでなく、大げさにいえば、子供たちの明日の行動を決定するものになり得るのだから、発展途上国の問題を彼らの身近な問題として把握させる努力がほしい。

食べるに食なく、水も乏しい生活とはどういうことなのか実感させる必要がある。南北問題解決の根本思想の一つは人類学、つまり他人への思いやりなわけだから、その他人の姿を飾り気なく子供たちの眼にふれさせるべきではなからうか？一つには写真を有効に使って。

⑥ これからの日本のあり方として、世界の平和と繁栄を前提にした、国際的視野に立った日本のあり方や役割を考えるとといった方向づけがほしい。

⑦ 教科書の視点はあまりにも日本中心である。明日のよりよい世界をきづく担い手になり得る子供たちに異文化、日本人の価値感とは違った世界があるといったことにも触れてほしい。

⑧ 本調査の目的外のことだが、すきのない文章というか教科書の文章は無味乾燥の筋りをまぬかれまい。文学者の名文集めたパリ案内記を覗んだことがあるが、含蓄の深い本であった。子供たちは常に名文すなわち生きた文章にふれた方がいいのではないか？

⑨ 視聴覚器材を有効に使って、教科書を補足してほしい。全ての国について2～3行知るよりは1回でもいいからもう少し広く、文化も生活も歴史も立体的にとらえてほしい。出来ればその国の人と交流をもってほしい。在日外国人を招くなり、交通姉妹校みたいなものを作るなりして。

⑩ 公平に客観的に世界を叙述することも大切な方法にはちがいない。そのため各教科書は短いスペースの中で努力している。方法を

逆にするのはどうであろうか？ 日本の項目がすんだ所で、日本と世界の関係にすぐ入るのである。私たちの食物が、着物がどういう過程で何を材料に作られている所からでもいい。貿易を通してのかかわりあいから話をはじめてもいいのだから、こうして関連するものの姿を追ってその原産地に入り、そこでその産業のあり方から気候風土、社会の歴史などをとらえて行く。次にある地域を選んで、その地域（国）の立場から日本をみる。そして世界の全体像を整理して行く。一つ一つの国については時間の許す範囲で深めてゆく。あるいは或国については歴史の中で取上げる。産業、人口、風土などをならべるだけならカード方式にした方が能率的かも知れない。

㉑ 写真に関連して、欠如の理由は貧困を出すことをその国の恥と考えるの配慮もあろうし、単純に写真が手に入らなかったことかも知れない。発展途上国に駐在員をおいている協力隊は写真のような up-to-date の資料の供給に貢献は出来ないのだろうか？学校の教材のパネルのホタを提供するというような形で。これは未来の隊員を育てるだけでなく広く一般の理解を育くむ可能性をはらんでいるのだから。

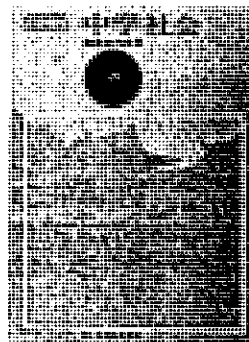
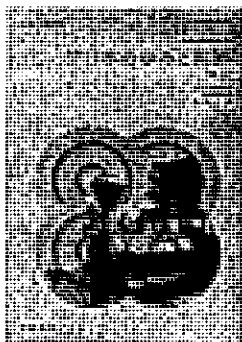
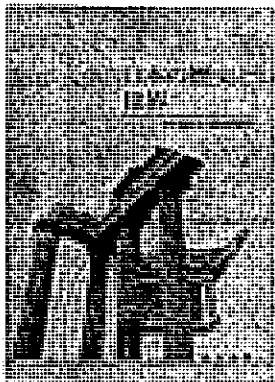
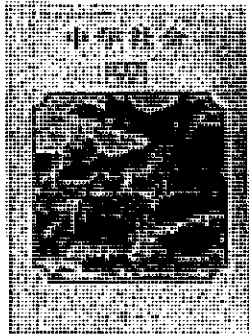
㉒ この種の調査を社会科に限らず、他の面でも実施してはどうであろうか？科目毎にばらばらに独立していた学習が一つの統合的な目的のもとに、有効に組合わされる。そして子供たちは人間の全体像をつかんで、学窓を出る。

中学校 歴史的分野

記載箇所の一覧表と
調査担当者の所感

調査担当委員

内 藤 幸 彦
室 靖



抽出一覧表

A 発行社 —歴史的分野—

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
1 2 章：現代の日本と世界 2 節：国際連合と二つの世界 アジアの変化	第二次大戦末、アジア各地に民族解放運動がおこり、つぎつぎに独立した。そのいくつかの例。
1 2 章 4 節：世界の中の日本 アジア・アフリカの動き	アジア・アフリカ会議以降の A・A グループの動きと、新興独立国の問題。
変化する国際関係	多様化する 1970 年代の国際関係の中で経済開発のおくれた発展途上国の問題があり、A・A・L A 諸国と北半球に多い先進工業国との不均衡は南北問題とよばれる。

B 発行社 —歴史的分野—

1 0 章：日本の復興と発展 2 節：第二次大戦後の世界 アジア・アフリカ諸民族の独立	植民地にされていたアジア・アフリカの諸民族は、第二次世界大戦で、イギリス、フランスの力がおとろえたため、独立を次々に達成した。 (ベトナムの戦いのはじまりについて記述)
---	---

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
293-294	○ 第一次大戦後よりはるかに組織的、目的意識的な、独立運動の性格を理解させる。	○ 1960年代までのアジアの独立国の地図（教科書293）とその説明。 ○ 第二次大戦後の独立運動の解説（アジア諸地域の植民地打破に果たした日本軍の占領の役割）。
299-300	○ 帝国主義・植民地主義をはねのけたA・A諸民族の動きとその意義、及び新興独立国のかかえている現実問題を理解させる。	○ 第一回アジア・アフリカ会議の解説。 ○ アフリカの独立国の説明— 1957年のガーナ以降。 ○ 新興独立国の諸問題の解説（脱脚出来ない植民地経済の著しい貧富の差から新植民主義の問題まで）。
302	○ 複雑・多様化する国際関係の諸要因の中で、大国・先進工業国に反発する開発途上国の動きを理解させる。	○ 多様化する国際社会の解説（次の4ブロックに分けて考えられる…… ①米・ソ超大国 ②日本・EC・カナダ等の工業発展国 ③資源のある開発途上国 ④資源のない " " ）。
302-303	○ 植民地からの独立（抵抗・独立の歴史） ○ アジア諸国の独立との中の背景のちがいがい。 ○ A・Aグループの国際社会への影響。	○ 地図「第二次大戦後のアジア・アフリカ」（教科書P303） ○ ㉠A・A諸民族の独立、 ㉡インドネシアの独立 ㉢アフリカ諸国の独立のそれぞれの背景についてのくわしい解説。 ○ アジア・アフリカの植民地からの独立について表示。 ○ 植民主義の罪にふれ、民族主義によるA・A諸国の独立が世界の新しい潮流として成長していることを今世紀の特色としている。

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
3 節：今日の世界と日本 変貌する世界	<p>戦後米ソの国家群と同盟しないアジア・アフリカの国々が、第三勢力とよばれるようになった。</p> <p>ラテンアメリカではキューバが合衆国の経済支配を断ち切って社会主義にもとづく国づくりを進めた。他国も合衆国の支配からはなれ、自主性を強める動きがおこってきた。</p> <p>先進国と発展途上国の経済格差がさまざまな対立をおこしている。これを南北問題とよぶ。</p> <p>先進国は、途上国の自主性を尊重しながら、各方面で協力すべきだ。</p>
3 節：日本の立場と課題 (173 時限)	<p>日韓基本条約、日中共同声明、南ベトナム共和国の承認 このようなアジア諸国と、日本との関係は日米安保の関係をあらためて考えさせることとなった。</p> <p>世界の有力な国家のひとつとなった日本の世界平和への貢献が期待されている。</p> <p>人権、相手国の尊重のうえにたつた民主主義を発展させ、平和を愛す豊かな日本を。</p>

C 発行社 — 歴史的分野 —

1 3 章：現代の世界 2 節：戦後の世界 世界の変化	<p>第二次大戦後、アジア・アフリカ諸国に独立運動がおこり、次々に独立したこと、インドの独立について。</p>
1 3 章 3 節：現代の世界と日本 世界の変化	<p>アジア・アフリカ会議において、被圧迫民族であった A・A 諸国が結束し、植民地主義反対の意志を独自に発表し、その後続いたブラックアフリカの独立が世界政治に大きな影響を与え、ラテンアメリカでは、アメリカの経済支配に反対する動きが強まった。</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
308-310	<ul style="list-style-type: none"> ○ 第三世界（A・A諸国）の台頭について、非同盟主義グループの強化に留意。 ○ 南北問題について、先進工業国と発展途上国との間の格差があり、それが両世界の対立をもたらしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 植民地主義と民族主義について。
314-315	<ul style="list-style-type: none"> ○ 経済大国となった日本の今後の進路について、自分たちの近い未来をどうきずいていくかという視点から話しあわせる。 	

324-325	<ul style="list-style-type: none"> ○ 被圧迫民族の独立していく姿を理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教科書（325）のアジア・アフリカの独立国（1970年）の地図の解説。
332-334	<ul style="list-style-type: none"> ○ 1960年代の世界の動きの中で、新興A・A諸国の果たした役割を理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ アジア・アフリカ会議の解説。 ○ アジア・アフリカにおける新独立国の勢力といくつかの独立例の解説。

抽出一覧表

D 発行社 — 歴史的分野 —

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
<p>現代の世界と日本 2章：現代の世界と日本 2節：アジア・アフリカ諸民族の独立 独立への動き</p>	<p>第二次大戦後、欧米諸国の植民地であったアジア・アフリカ諸国が独立した。そのいくつかの例。</p>
<p>2節 西南アジアとアフリカ諸国</p>	<p>1960年代以降、西南アジア・アフリカ諸国が独立を達成していき、国際政治の上でA・A諸国の活躍は増大したが、国内経済の不安定な国が多く、先進工業国からの援助をめぐる新たな問題が生じている。</p>
<p>5節：現代の世界と日本 アジアとアフリカの立場</p>	<p>アジア・アフリカ会議の精神をあげ、結束したA・A諸国が国連等の国際政治に大きな影響を与えている。</p>
<p>流動する世界</p>	<p>流動する国際情勢の中で米・ソはアジア・アフリカ、ラテンアメリカなどの開発途上国に、経済援助を通じて、影響を強めようと努めた。</p>
<p>日本の前途とわたしたち</p>	<p>東南アジアやアフリカにおける自己中心的な日本の経済活動の反省。</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
320-321	<p>○大戦中の解放運動の発展と、大戦後の独立の動きと、この大戦を通じて日本と東南アジア諸国との関係をふりかえらせる。(現在の反日感情にも触れている)</p>	<p>○戦後のA・A・L A独立運動の時期の解説 ○日本の占領支配、欧米植民地支配の二重の課題の中でのアジア諸国の独立の形態についての解説。 ○インド・インドネシア・パングラデシュの独立の解説。</p>
323	<p>○アラブ諸国、及びアフリカ諸国の独立運動の発展とその成功理由や経過を理解させる。 ○ナセル、エンクルマといった指導者にも留意。</p>	<p>○コナクリ宣言-第2回アジア・アフリカ諸国民連帯会議-の解説。 ○アラブ民族主義の解説。 ○第二次大戦とアフリカ-第5回パン・アフリカン会議の解説。 ○ナセルと新生エジプトについて。 ○アフリカ民族独立運動と新植民地主義について。</p>
330-331	<p>○1950年代の中頃から、国際政治に重大な役割を果たしたA・A・L A諸国の動きを理解させる。</p>	<p>○アジア・アフリカ会議の解説。 ○1960年、アフリカの独立国の説明。 ○1966年A・A・L A連帯会議の解説。</p>
331-333	<p>○米・ソの共存路線の一角に、第三世界への経済援助(南北問題)がとりあつかわれている。 ○欧米諸国に接近しすぎている日本はA・A諸国の動きに対して消極的である点も留意。</p>	同 上
336	<p>○日本と諸外国との外交上の問題点をとりあげ、今後の方向を考えさせる。</p>	

抽出一覧表

E 発行社 — 歴史的分野 —

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
<p>17章：新しい日本と世界 2節：第二次世界大戦後の世界 アジア諸国の独立と中華人民共和国</p>	<p>アジア・アフリカ諸国がイギリス・フランスの支配下から独立した。 インド・パキスタン・セイロンの独立、ベトナム民主共和国・ベトナム共和国の独立、アラブ連合共和国とイスラエル共和国の対立がおこった。</p>
<p>18章：現代の世界と日本 2節 現代の課題 科学技術の進歩</p> <p>わたしたちの任務</p>	<p>新しい技術の開発も兵器の研究と結びつくのではなく、生活水準の向上、発展途上国の援助に役だつものにする必要がある。そのために各国の緊密な協力関係をうちたてる。</p> <p>民主主義の理想の実現をめざし、広く世界の困の人々と手を取りあって、幸福で平和な日本と世界をきずこう。</p>

F 発行社 — 歴史的分野 —

<p>Ⅶ：現代の世界と日本 2章：新しい日本と世界 2節：二つの世界 欧米諸国の動き</p> <p>2節： アジア・アフリカ諸国の独立</p>	<p>第二次大戦後、アメリカがその経済力を利用し、ヨーロッパ諸国や開発途上国に経済援助をし、資本主義諸国の中心的地位を占めるにいたった。</p> <p>大戦後、アジア・アフリカの植民地諸国が独立運動を展開し、独立したが、これら新興国では生活程度の低さ、経済・文化のたちおくれ等問題も多い。独立国のいくつかの紹介。</p>
---	--

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
280-281	<ul style="list-style-type: none"> ○アジア・アフリカの民族主義・独立運動の高まりについては、歴史の大きな流れとしてとらえさせる。 ○292-293の見開き地図(現代の世界)を用いて、戦後多くの独立国が生まれたことを確認させる。 ○A・Aの新興国の国連における役割について考えさせる。 ○アジア諸国の独立のタイプに留意させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○教科書のP292~293地図(現代の世界) ○バンドン会議についての解説(第18章用)
298	<ul style="list-style-type: none"> ○公的分野との関連で、世界中の日本という立場から現在及び未来の国際社会に生きる日本人としての自覚をもたせる。 	

306-307	<ul style="list-style-type: none"> ○アメリカを中心とする資本主義諸国の再編成。 ○植民地の独立運動が増大してきたことを理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○マーシャルプランに関する説明 (但し開発途上国に関する説明はなし。)
307-310	<ul style="list-style-type: none"> ○大戦中・後のA・A諸国の民族独立運動を理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○南・北朝鮮、北ベトナム・インドの独立当時の背景説明。 ○第6回汎アフリカ会議の解説。 ○教科書(308)のアジア・アフリカ諸国の独立国(1967年)の地図の解説。

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
2 節 第 3 勢力の高まり	1955年のバンドンにおけるアジア・アフリカ会議より、A・A諸国が結束し、第3勢力として発言力を持つようになった。
4 節：現代の世界と日本 動揺する世界	新興のアジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国は、山積みする問題のため開発が進まない。
4 節 日本の課題	今日の世界の問題の1つに先進国と開発途上国との対立があり、平和的に解決がなされなければならない。

G 発行社 — 歴史的分野 —

10 章：新しい世界と日本 3 節：世界平和への努力 国際関係の変化 民族解放運動とベトナム戦争	民族解放運動とベトナム戦争 について。 発展途上国と北緯30度以北に多い先進国との経済的な格差→南北問題。これを解決するためにどのような経済的・技術的援助を行うかは、重要な課題である。
10 章 3 節 これからの世界と日本 わたくしたちの課題	アジア・アフリカ諸国の人口の急増による世界的な食糧の不足は深刻な問題である。 国がらや、人種のちがいなど、さまざまな困難にうちかち、協力して平和をめざす努力が必要である。

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
313-314	○1950年代、平和と独立をめざすA・A諸国のたたかひの発展状況とその阻害要因を理解させる。	○アジア・アフリカ会議の説明。 ○同会議におけるスカルノの演説。 ○植民地支配の説明。(新植民地主義と資本輸出、技術・経済援助との結びつき等の解説) ○アジア・アフリカ会議参加国の地図。
324	1960年代、長いたたかひをつづけているA・A・LA諸国の動向をつかみ、その問題の認識と、日本の果すべき役割を考えさせる。	○アジア・アフリカ・ラテンアメリカ3大陸人民連帯会議の「一般宣言」の解説。 ○アフリカ独立国の地図(1974年版)
324-326	世界情勢との関りの中で、日本の現状と、日本の役割を考えさせる。	

304-305	○「南北問題」は北半球の開発国と南半球に多い発展途上国の間の格差の問題であり、その格差からくる対立の問題であること。 ○公民的分野との関連で簡単にとりあつかう。	○「南北問題」についての解説。 ○別に資料編に、アジア・アフリカ会議を加え、スカルノ大統領の開会演説の一部と、同会議の決議を引用している。 ○各国歴史編に、アジア・アフリカの若干の国についての歴史を紹介している。
308	○これからの課題として人種問題の解消や資源問題をも加えている。	○資源問題についての解説。

抽出一覧表

H 発行社 — 歴史的分野 —

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
<p>9 章 新しい世界と日本 2 節：国際連合と戦後の世界 アジア・アフリカのめざめ</p>	<p>西欧諸国の支配下にあった アジア・アフリカ諸民族が独立を勝ちとった。 インド、セイロン、パキスタンの独立、東インド諸島、ビルマ、マラヤ、フィリピンの独立。ベトナムが南北に二分された。</p>
<p>9 章 4 節：今日の世界と日本 最近の世界のあゆみ</p>	<p>南半球に多い発展途上の国々と、北半球の先進諸国との不均衡をどのように改めるかという南北問題がおこってきた。</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
294-295	<p>○新興独立国の中立的指向</p> <p>○A・A諸国への協力に日本がどういう形で参加すべきか。</p>	<p>○教科書巻頭の地図(アジア諸国の独立)</p> <p>○P295の地図(アフリカ諸国の独立)</p> <p>○アジア・アフリカ(バンドン)会議の解説</p>
301-302	<p>○最近の世界のあゆみ。のうち、米ソ平和共存の動き、米ソ大国主義に対する反発、と並べ最近の諸問題をあげ、そのうち南北問題を一つとしてとりあげる。</p> <p>(他はベトナム戦争と中東問題)そして北の先進国から南の発展途上国への経済協力をあげる。</p>	<p>○南北問題の解説(「東西問題」に対して)</p>

抽出作業を終えて

調査担当委員の所感

内 藤 幸 彦
室 靖

教科書の内容

中学歴史において南北問題が取り上げられているのは、どの教科書も全部最後の章であり、「現代の世界」「新しい世界と日本」「日本の復興と発展」「現代の日本と世界」といったタイトルの中で扱われている。従って取り扱い時限は大体160時限前後である。その解説は内容の質、量、使用語句の点において、各教科書によって違いはあるが、概略してみると、以下の通りである。

- ① 第二次大戦後のアジア、アフリカ諸国の独立運動といくつかの独立国の例。(この解説は全ての教科書にある。)
- ② 新興独立国としてのアジア、アフリカ諸国の国内問題の解説。(8教科書中3教科書に説明がある。)
- ③ 1955年バンドンでのアジア、アフリカ会議以後のA・Aグループとしての結束と、国際政治における発言力の増大について。(8教科書中4教科書)
- ④ 南北問題の内容解説。(南北問題という語句が教科書に記載されているかどうかは別にして、この問題に触れているのは6教科書である。そのうち特に、低開発の現状の解説や、人口・食糧問題について別に記述している教科書が各々1冊ずつである。)
- ⑤ 発展途上国に対する先進諸国からの援助について。(2教科書で、一方は大戦後のマーシャルプランによるアメリカの途上国援助に触れ、他方は米ソの経済援助競争に触れている。)
- ⑥ 日本の国際政治上の役割や、日本人としての国際平和への責任、そして日本の自己中心的な経済活動の反省。(各々1冊)

以上大別して6項目に分けたが、発展途上国と言っても、アジア、アフリカとだけ書いてあるのもあれば、ラテンアメリカを含んでいるものもあり、記述内容に統一性は見られない。

南北問題という語句そのものが教科書中に記載されているのは、8教科書の内半分で、残りの4冊の教科書にはない。但し、その内の1社は、指導書においてこの語句とその内容解説をしている。南北問題の語句の説明であるが、教科書と指導書を並べて調べると、以下の通りである。

教：発展途上国と先進工業諸国間の不均衡。
指：東西問題に対しての南北問題。
教：現代の世界、特にアジア、アフリカ新興独立国に関わる重要な問題。
指：北半球の開発国と南半球に多い発展途上国の格差と対立の問題。
教：戦後の国際政治における南北問題の重要さと、その解決のための先進国の協力について。
指：先進工業国と発展途上国の格差と、そのための対立。
教：アジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国で経済開発のおくれた発展途上国と北半球に多い先進工業国との不均衡。
指：大国先進工業国に反発する開発途上国。
教：（教科書中にはこの語句の記載なし。）
指：第三世界への経済援助。

掲 載 資 料 に つ い て

次に写真、地図、統計資料について述べてみよう。どの教科書も、その記述内容に合わせて写真や地図を使用し、学生の理解をより深めようと努めている。南北問題に関連しては、アジア、アフリカ諸地域の独立国の地図や統計資料が必ず掲載されている。統計資料は最新の情報を提供するためにも新しい方が良いのだが、やや古いと思われるものもあった。また、発展途上国の生きた姿を知らせることの出来る写真は、教科書によって各々取り扱いも観点も違うし生きた姿といっても、各国の風物がほんの少し理解出来る程度のものだ。視覚から強く生徒達に貧困や飢餓を訴える写真はほとんど使用されていない。一般的に言って、教科書の中では、写真や統計資料によって、発展途上国の実状を知らせようとする努力は余りなされていないのが現状と言えよう。

所 感

1. どの教科書も、現代史の出来事を専ら政治的観点から取り上げ

すぎているように思われる。特に第二次大戦後の国際政治を東西冷戦（米ソの対立）の枠内でとらえようとしてきた観が強い。国際政治の力関係が世界の平和を脅かす可能性があることは確かであるが、同じく平和を脅かす第三世界の貧困や栄養不足等の問題に対し、どの教科書も十分な説明がなされていない。しかも前者は潜在的な脅威であるのに対し、後者の方は確実に増大してきている脅威であることが理解されていないように思われる。

2. 日本の現在の社会の傾向を反映しているということであろうが、たまたま南北問題を取り上げても、それを専ら経済的な問題としてとらえている。低開発の問題は、経済的な後進性の問題であることは否定出来ないが、同時に社会的なそれでもある。南北の格差と同様に、多くの開発途上国では国内の経済的・社会的不公正があることを理解させようとしている教科書は1冊もない。
3. 大部分の教科書は、最後に経済的に大国となった日本の国民のこれからの責任について考えさせようとしている。歴史を学んできた15才の学生たちが、真面目に国際的な責任を考えるとすれば、1) 食料・天然資源（特に化石エネルギー）の消費について、および、2) 世界人口の2/3を占める人々の貧困や飢えについて、であるはずである。しかしこれら2つの人類的課題に言及している教科書は1冊もなく、ただ抽象的に日本人の任務や責任とっているのは残念だ。
4. どの教科書も、アジアの諸国には特別な関心を示しているが、太平洋地域についての記述はまったく欠落している。日本にとって、オーストラリア、ニュージーランド及び南太平洋のいくつかの独立国との関係は決して無視出来ないはずである。特に開発協力を考える際、日本にとっては東南アジアと太平洋地域とを結んだ地域は一つの重要な場であると考えらるなら、この問題は考え直さなければならない。また教科書によっては、アフリカ、ラテンアメリカの記述が極端に少ない場合もあり、国際的視野での南北問題の解説にほど遠い教科書もある。
5. 一般的にどの教科書も国際的対立の方に眼を向け、国際間の協力—特に開発協力—についての記述が乏しい。20世紀後半の人

類史の特色の一つは、それ以前には全く考えられなかった「協力」の思想が初めて現れ、ある程度実現したことである。例えば、国連を取り上げてみても、どの教科書も安全保障面での国連の役割を述べているにとどまり、国連体制をあげて努力してきた開発協力のための国際協力については一切触れていない。

<提 言>

私は自分自身協力隊員として二年間アフリカで開発協力をたずさわっていたし、その後開発問題を勉強する機会もあった。私がそんな道に足を踏み入れた動機は、ある時アジア、アフリカを旅したことであった。百聞は一見に如かずの如く、自分の眼で見、肌で感じた印象は強烈であった。その後私が燃やした青春のエネルギー・二年間のボランティア活動に何の悔もない。現在は一社会人として、協力活動とそれを必要としている世界の問題に、より多くの人々が関心をもつようになることを心から希望している。

さて今回は南北問題に関する教科書調査委員として、歴史を担当したわけだが、<教科書の実状>の中で紹介した通り、まだ教科書の中でさえこの問題の取り扱いがバラバラだし、日本での研究の不十分さ、また教科書を書く側の説得力のなさを感じた。南北問題と一口に言っても、その内容は千差万別で、地域、国また人種等によって、各々の問題点は違うし、また、問題の見方によっても非常に多くの立場がある。従って中学の教科書の中で、その個々の内容を全部説明することは不可能に近いわけだし、その意味では、教科書を執筆・編集される方々の御苦労がよくわかる。但しどの教科書にも見られず、一番残念だと思うことは、この問題を「自分のこと」と見る眼がなかったことである。アジア、アフリカ、ラテンアメリカ等々は、一般の人々にとっては、それはとても遠い国々だろう。だが、それらの国々で起きている出来事は本当に明日の日本、私達の将来に何ら影響を与えないものであろうか。私はそうは思わない。この交通、情報、科学技術あらゆる文明の発達した世の中では自分達だけの平和や幸福を守っていて、他人の不幸に眼をつぶって

いることが許されるはずはない。否、これだけ狭くなった地球上で、自分達だけの平和や繁栄が、何ら他人の不幸に脅かされずに守られるなんてことは有り得えなくなっている。他人の、それも、見も知らぬ国の不幸は何らかの形で明日の私達に結びついてくる。そうなると、今日は他人事に見えた問題が実は明日へ向かう私達の共通の問題になり得る。そしてこの南北問題こそが、明日と言うより、もう今日の地球全体の問題なのだ。別に経済大国になったからというので、日本がこの地球の問題の解決に眼を向けるというのではない。人類という共同体の一員として日本および日本人は、自分達の問題の解決の一端を担うということなのだ。この問題も世界の果ての他人の出来事として見ているという立場は、国際的視野の広さ、狭さを云々されるというだけでなく、日本人一人一人の人間としての「資格」を問われることになるのだ。近年日本が先進工業国としての、又世界の富める者としての責任を問われる解説は多いが、これはつきつめれば、日本人一人一人が人類の一員としての自覚を持たねばならないということではないだろうか。その意味において、次の時代を担う中学生への教科書が、それを読む生徒達に、世界のあらゆる場所に住んでいる他人の問題を、どれだけ自分に関わりのあることと考えられる感覚や感情を引き出せるようなものであるかどうかが大変な問題であると思う。私自身、常々今の南北問題は他人への「思いやり（愛情）」の問題と解釈している。この調査の中で、その感覚や感情の糸口になるものを見出したかった。しかし残念なことに、前述した通り、現在の教科書は南北問題を記述した箇所そのものも少ないし、「思いやり」の精神を伝える以前の問題に終始している感じがした。教育とは子供達に感動をさせることだ。人生に、社会に、そして世界に眼を開かせ、それらの子供の身近に投げかけて、知識以上の心を彼らの内に芽ばえさせることだと思う。発展途上国で飢えてやせおとろえ、着る物も満足にない子供達が、何故日本の子供達にとって問題にならないのだろうか。私は教科書内に載っている解説、語句、写真の多少を論ずるよりも、現場を見て来た一人の人間として、感動の入り込むことのない現在の教科書に、どんどん遠ざかって行くアフリカの子供達の姿が浮ぶような思

いがする。最後に、委員としての提言をまとめてみよう。

- ① 南北問題を（勿論日本を含めた）世界全体の開発の問題とし、それを解決するために人類がひとつとなって努力する必要があると痛感する。それは、取りも直さず、国際的視野の中で、日本人の役割や責任を考えさせることに結びつくはずだ。
- ② 現実の記述方法としては、子供達の将来と地球の将来とを同一線上でとらえ、身近な問題としての認識を与えること。
- ③ 南北問題の現状を、生きた姿で伝えること。それには写真をもっと活用し、視覚を通して子供達に何かを考えさせる機会をつくること。
- ④ 南北問題を文化、社会の面からも取り上げて、広範囲な興味の対象にするよう心掛けること。
- ⑤ 南北問題、開発協力、開発途上国、第三世界、人口増加、食糧不足、エネルギー問題等の関連語句を広く活用する。

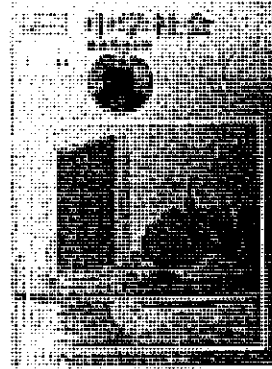
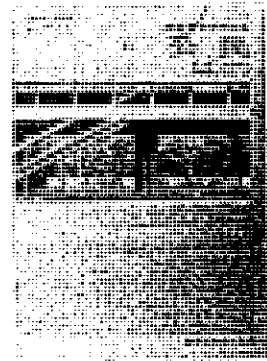
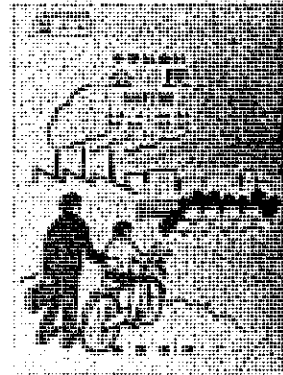
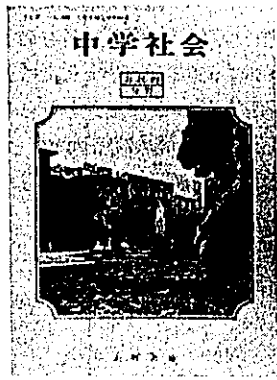
〈提言： 内 藤 幸 彦〉

中学校 公民的分野

記載箇所の一覧表と
調査担当者の所感

調査担当委員

斉 藤 実



抽出一覧表

A 発行社 — 公民的分野 —

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
<p>経 済 生 活</p> <p>5 章 日本経済と世界経済</p> <p>2 経済における国際協力 南北問題</p>	<p>アジアやアフリカの新興国の多くは未開発の資源をたくさん保有しながらも開発に必要な資金の不足や、教育水準の低さから起こる技術者の不足などのために開発は思うように進んでいない。先進国と発展途上国とのあいだの経済格差の問題は、いっばんに南北問題とよばれ、国際政治の安定と世界経済の発展をはかるうえからも重大な問題となっている。南北問題を解決するため、発展途上国自体の開発努力に加えて、先進諸国による資本、技術援助と貿易面での協力があげられる。</p>
<p>国民生活と政治</p> <p>4 章 国際政治と世界平和</p> <p>3 第二次世界大戦後の国際政治 アジア・アフリカ諸国の独立</p>	<p>第二次世界大戦後の国際政治上の大きな特色の一つは、アジア・アフリカで多くの植民地が独立したことである。これら新興独立国は国民生活を豊かにするため、国の近代化を進めることをめざしている。このため、世界の平和をもとめて、共同の歩調をとるようになった。1955年に開かれた第1回A・A会議はそのようなうごきの第一歩であった。</p>
<p>4 世界平和と日本 日本の外交とその問題</p>	<p>日本は独立後、三つの外交方針をとって来た。(1)は国際連合中心 (2)は自由主義諸国との協調 (3)はアジアの重要な一員としての立場をとること。日本の外交方針の問題として、つぎの点があげられる。 アジア地域の発展途上国との関係である。最近の日本経済のいちじるしい成長はアジアの多くの国々に日本による経済的支配という不安をあたえがちである。積極的な開発協力などをおして、相互理解を基礎にした緊密な結びつきを強めていかなければならない。</p>

B 発行社 — 公民的分野 —

<p>第3章 日本経済と世界経済 世界経済の現状と課題 南北問題</p>	<p>世界経済の将来にとって最も大きな問題のひとつは主として地球の北にある先進国と南にある発展途上国とのあいだの経済的格差がますます広がり、発展途上国の貧困の問題が大きく浮かび上がったことである。この問題は南北問題とよばれており、発展途上国の産業、経済をど</p>
--	--

該当ページ	指導	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
168	<p>南北問題の重要性を認識させその解決方法について考えさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 発展途上国への経済援助は先進国の一方的押しつけであってはならず、発展途上国の民族的誇りを重視するだけでなく、真にその国の経済発展に寄与するものでなければならないことをおさえさせる。 ○ 最近発展途上国どうしの中にも経済格差が広まってきているが、この点についてもふれる。 ○ 援助より貿易の意味を考えさせる。 	<p>南北問題の抬頭</p> <p>1950年代の後半から60年代の前半にかけて、世界の先進諸国は概して順調な経済成長を遂げたのに対し、発展途上国は全般的に経済的停滞をつづけた。こうして先進諸国と発展途上諸国との間に経済格差が広まり、それが双方間の対立を生み南北問題として意識されるようになった。</p>
274-275		<p>新興独立国の問題</p> <p>(ア)人種宗教問題…… 1.キプロス紛争 2.レバノン</p> <p>(イ)言語問題……インド</p> <p>(ウ)部族問題……ピアフラ紛争</p>
280-281	<ul style="list-style-type: none"> ○ わが国の経済援助を期待しながらもかつてのような侵略を恐れる諸国が多い。アジアとの間にも解決しなければならない問題が多く残されている。 	<p>日本外交の基本方針</p> <p>日本はより根本的な問題に直面している。</p> <p>①資源問題 ②発展途上国の援助 ③環境保護 ④自立外交</p>

169	<ul style="list-style-type: none"> ○ 南北問題は世界における経済的民主主義の確立および人権の尊重に基づく国際連帯という視点で指導する。 ○ 真の世界平和を樹立するためには、南北問題の解決がきわめて重要である。 	<p>南北問題をとらえる考え方</p> <p>「なぜ富める国は、よその国を助けなければならないか、もてる者がもたざる者に分かたのは、正しいことだからである」と、世界銀行の南北問題に関するピアソン報告が述べる。</p>
-----	--	--

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
発展途上国の経済	<p>のようして開発するかが、世界的に大きな問題として論議的になっている。</p> <p>世界の人口は社会主義諸国を除くと、約2.4億人であり先進工業諸国はおよそ6億人、残りの約1.8億人は発展途上国に住んでいる。社会主義諸国を除いて、世界の人口の2/3をしめるこれらの人々の生活はたいへん貧しく農業国でありながら、慢性的な食糧不足に悩まされている。第2は、生活水準が低い。栄養の不足、悪い衛生状態、教育水準が低い。第3は社会構造が前近代的、大地主による大土地所有制がまだ根をはっており、貧富の差が著しい。第4は人口の増加率が高い。発展途上国がその貧しさを克服して、経済の発展をとげるためには、足りない資本や機械・設備・技術を先進国から導入して、経済開発を進めることが必要とされている。</p> <p>そのため、先進工業国によって、いろいろな方法で発展途上国への援助がなされている。</p>
発展途上国の経済開発と国際協力	<p>南北問題の解決のためいろいろな国際協力がなされている。(例) 国際連合貿易開発会議</p> <p>先進国がわも真の国際連帯の立場から経済協力を努めることがたいせつである。</p>
アジアの日本	<p>日本は、アジアの一國であり、また最も工業化の進んだ國である。アジア諸國が期待しているのは積極的な日本の援助と協力とともに、苦惱するアジア諸國民の立場を理解して、日本がこれらの國々とともに、進んでいくことである。</p> <p>日本は、これまで資本や技術協力など経済協力をとおしてアジア諸國の経済開発に協力してきた。技術協力ではアジア諸國から留學生のほか技術研修生を受け入れて訓練したり、日本から専門技術者を派遣したりしている。</p>
第5章 国際政治と平和 国際社会の動き アジア・アフリカ諸國の動き	<p>現在世界の約140の獨立國のうち、約60ヶ國が、戦後に獨立したアジア・アフリカ諸國(A・A諸國)である。第3勢力とか中立陣營とかよばれたこれらの諸國は長いあいだ非獨立國として劣悪な状態を押しつけられていた</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
172—173	<p>○ 発展途上国の経済構造の特徴を理解するためには、長い間植民地として苦悩のあったこと、政治的には独立したものの経済的・社会的に多くの問題をかかえていることをつかませる。</p> <p>○ 発展途上国の経済開発と、国際協力の重要性。経済協力は全人類的な平和主義の立場が貫かれなくてはならないことを把握させる。</p> <p>○ 経済協力のためにどんな国際機構があるかを理解させ、各国の経済協力の現状および動向をつかませる。</p> <p>○ 日本はアジア諸国に対しどんな経済協力をを行っているか、今後この援助をどう進めたらよいかを理解させる。</p>	<p>南北問題</p> <p>南北問題とは、急速に伸びる先進諸国と停滞的な発展途上国との経済的格差をどうしたらつめることができるのかという問いかけである。貧困の泥沼から発展途上国を「離陸」させる努力は1940年代の終わりから始まっている。</p> <p>1970年代の実績をふりかえって見ると、人口増加率が高いためいぜん所得格差は開いている。この悪循環を断ちきるため国連は1970年の総会で「第2次国連開発の10年」計画を採択した。目標達成の戦略は①援助目標を国民総生産の1%とし、債務返済を楽にするためその7割は長期低利の政府援助とする。②発展途上国の工業を保護育成し、経済自立に導くため保護関税を認める一方、発展途上国の商品の自国への輸入は自由にし、または税率を引下げるのである。</p> <p>○ 発展途上国の輸出</p> <p>一次産品の需要の低下、価格の不安定などから発展途上国と先進国との格差は貿易面でも拡大。</p> <p>後発発展途上国の問題</p> <p>GNP、文盲率、製造業の割合等定義について説明。</p> <p>主な先進国の発展途上国への経済協力の実績について説明。</p> <p>○ わが国の経済協力の内容</p> <p>1972年のわが国の経済協力実績は27億2500万ドルでGNPに占める比率は0.93%であり、1971年のそれが0.95%であったことからかなりシブりがちの傾向が見られる。政府開発援助も0.23%から0.21%に下がって、先進国が目標としている0.7%から遠のいた。日本の援助を受けている途上国では日本のきびしい援助条件が被援助国の債務負担をふやすだけでなく、国内経済の発</p>
273—275	<p>○ 第2次世界大戦後の民主主義思想の世界的な潮流は、アジア・アフリカの民族に独立運動への大きな影響を与えた。</p> <p>○ パンドン精神にもとづく民族自決主義</p>	

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
	<p>ため、経済的に自立できる産業の基盤をもっていない。 これら諸国が近代化を進めるためには、先進諸国の経済援助などに依存せざるを得ない。これらの国々が国内の条件を整備し、経済自立が達成されれば国際政治のうえでも大きな役割を果たせるようになるであろう。</p>

C 発行社 — 公民的分野 —

<p>5章 世界経済と日本経済 1 世界経済の動き 今日の世界経済の構造</p>	<p>発展途上国は資本がとほしく、国民は一般にきわめて貧しい。したがって先進資本主義国に対して、無条件の経済援助や、農産物・鉱産物を大量に優先的に買付けることを要求している。先進資本主義国と発展途上国との経済関係は南北問題とよばれる問題を生み出している。南北問題には、資本主義諸国と社会主義諸国との対立もからんできている。</p>
<p>発展途上地域への資本輸出</p>	<p>先進資本主義諸国の鉱業や繊維・食品・鉄鋼・機械などの大企業は工場設備や鉱山開発の設備、あるいは農業開発の設備を輸出しはじめた。これをプラント輸出という。発展途上地域は先進諸国の資本を受け入れ、原材料や労働力を供給して、食料その他の生活用品を生産する軽工業を発展させることができる。</p>
<p>経済援助と三つの体制</p>	<p>工業を中心とした先進資本主義国では、技術革新によって経済はいちじるしく成長してきた。しかし農業を中心とする発展途上国では、こうした経済成長をとげることができなかった。その結果、先進工業国と発展途上国と</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
	<p>や平和主義について、A・A諸国の意気と希望とともに理解させる。</p> <p>○大戦後の独立国は、一つの勢力を形成して成長し、国連を舞台として国際政治の上でも、発言権を強めていることを把握させる。</p>	<p>展さえ阻害しかねないという批判が強く「日本は援助の寄生虫」だと非難さえある。</p> <p>第三勢力 ①平和共存 ②反帝反植民主義 ③非同盟諸国間の連帯を原則に世界平和の実現を図ろうとするものである。</p>

210	<p>○南北問題とはどういうことか</p> <p>○発展途上国の経済はどんな状態にあるか、何が経済の重要問題か。先進資本主義国との関係ではどんな問題があるか。</p>	<p>発展途上国 低開発国とも呼ばれる。植民地かそれに近い状態におかれた国である。何をもって発展途上国とするか明確な基準はないが、人口1人当たりの国民所得が低く農村人口の比率が圧倒的に多い国をいう。</p> <p>南北問題 先進資本主義諸国はアジア・アフリカなど経済的後進国を援助し市場として開発することだと考え、後進国は外国帝国主義の支配と国内反動勢力と戦って、土地改革や工業化を進めることだと考える。そこで後者は前者を新植民主義的な支配と搾取のための国家だと見る。</p>
216-218	<p>○発展途上地域は現在では、ほとんど独立国になっている。しかし経済的には植民地的状態を脱脚できず、自立することが困難であること、しかも産業発展の度合が先進資本主義国や社会主義国より遅く経済的には従属の度を深める傾向もあること。</p>	<p>南北両地域の経済力の開き 約100か国にのぼる発展途上国は「第三世界」とも呼ばれ世界人口の70%を占め世界の国民所得の30%しかあげていない。先進資本主義国では1人当たり年間所得が平均2000ドルに達しているのに、発展途上国では平均220ドルである。</p> <p>日本企業の海外進出 日本企業のアジア進出、日本人への悪評—このままの協力を拡大再生産すれば、アメリカの不評を肩代わりする可能性もある。</p>

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
わが国の対外経済問題	<p>の経済力の開きは、ますます大きくなった。</p> <p>東南アジアをはじめ発展途上国に対しても相互の利益を尊重し、相手国の産業の発展や国民生活の向上にも役立つように配慮しなければ、反日感情を強め1972年にタイでおこなわれた「日本製品不買旬間」のような運動がひろがるおそれがある。</p>
第4章 国際政治の平和 3 今日の世界社会 民族の独立	<p>新しい独立国は自国の独立を維持し、おくれた国民経済を発展させ、国民生活を向上させるために世界の平和が続くことを強く望んでいる。そして国連その他で協力し合うように努力している。</p>
発展途上国の悩み	<p>発展途上国の多くは、植民地時代の経済基盤をそのまま受けついでいるため、経済的に先進諸国に従属していることが多い。これらの諸国は独立後、外国の権益を排除して経済の面でも自立しようと努力しているが、先進諸国との経済的格差がますます開いていく傾向がある。</p>

D 発行社 — 公民的分野 —

<p>国民生活と経済</p> <p>3 日本経済と世界経済</p> <p>(1) 世界経済 先進国と発展途上国</p>	<p>さまざまな国際的な関係が国々を結びつけている。たとえば、先進国の途上国に対する援助もその一例である。資金や技術、医師や薬品を送って援助することもある。留学生を引き受けたり、指導者を送ったりすることなど</p> <p>発展途上国との間には、商品の売買や資本の貸借のほか、このようなたすけあいにより結びつきもある。先進国や発展途上国をふくめて、世界全体の国々はこのような結びつきを守るための条約や機構をつくっている。</p>
<p>(4) 世界の中の日本経済 発展途上国との関係</p>	<p>工業化がおこなわれている発展途上国はふつう、経済の成長がおそく、輸出相手国としては不十分であり、また、輸入相手国としても適当な輸入商品をもっていないばあい</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
224-225		
321-323	二つの世界の対立は新興独立国にどんな影響を及ぼしているか。	<p>世界貿易に占める発展途上国との割合 1人当たりの国民所得の比較 植民地民族の苦しみ(インドの例)</p> <p>新興独立国の願い ○コナグリ5原則(AA人民連帯機構) 1.法令がその国民の決定なしに制定されるとき、2.外国軍軍事基地が存在するとき、3.帝国主義国との軍事同盟、4.政治、軍事、経済上の主権が制限されているとき、5.世界人権宣言のいう自由が犯されているとき、その民族は真の独立をしていない。</p>

166	○先進国と発展途上国については、ここでは世界経済の導入であるので、南北問題まで深入りしない。	<p>先進国と発展途上国 第2次大戦後、途上国は生活水準を高めようとする機運がすんだ。先進国はこの動きに応じ、開発計画を国際的に推進しようという努力をみせている。 先進国は均衡し多角化した国民経済が組織されるように、後進国を指導し、世界経済の総合的な発展を理想としている。</p>
180-181	○南北問題の主要性を気づかせる。 ○貿易高の比較は順位だけでなく相手国に目をむけさせる。	<p>南北問題の台頭 1950-60年までの発展途上国に対する問題は、先進国が発展途上国を政治的、経済的、</p>

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
<p>国民生活と政治 3 国際政治と平和 (2) 国際政治の現状 南北問題の発生</p>	<p>が多い。このように発展途上国との貿易をのばすことはよいではない。先進国である日本としては、近隣諸国の順調な発展なしに自国の安定した発展もありえないはずである。したがって日本は発展途上国の発展のためにできるだけの力をつくさなければならない。それらの国々への援助や資本輸出にあたっては各国の事情にあわせて適切な発展をたずけることが必要であろう。</p> <p>アジア・アフリカなどの独立国はこれまで国内産業は少数の先進国によって左右され、植民地化されて利益の大部分を国外にもっていかれ、自国の開発に使えることがほとんどなかった。多くの国々で、国民は人口の増加や貧しさになやまされ、教育の程度も低く、高度な文化にせつする機会が少なかった。</p> <p>先進国々の経済力や政治力の不均衡や対立が南北問題とよばれる新たな国際問題となった。ときには、戦略上たいせつな国のようなばあい、東西両陣営からの援助競争が行われることもあるが、援助の条件によっては先進国の支配を強く受けるおそれあって受け入れにくいこともある。また反対に、東西の対立から、先進国がたがいにけん制し合いじゅうぶんな援助が期待できないばあいもある。あるいは政治的には独立しても、国内の政治に不安や深刻な対立があって、開発に手がつけられないこともある。</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
251-253	<p>○発展途国ののびなやみの原因を追求する。</p> <p>○わが国の発展途国に対する経済協力を教科書181の図からとらえさせ、今後これらの図々どどのように結びついていったらよいかを考えさせる。</p> <p>南北問題の年表をつくらせ、第二次大戦後の世界を整理する。</p>	<p>軍事的に、いかにして自分の陣営に引き入れるか、または引きとどめておくかという観点から争われていたといえる。発展途国の経済をどのようにして発展させ、先進国と発展途国の間にある経済格差をいかにして縮小させ、世界経済の均衡をとり返していくかという問題に発展してきている。これが南北問題である。</p> <p>日本の経済協力・援助</p> <p>途上国からの要請に応えわが国の経済協力はアメリカに次いで世界第2位になったが、第2回UNCTAD(1968年)の合意事項のGNP1%援助、DAC(OECD開発援助委員会)の目標である政府開発援助の対GNP0.7%からほど遠い。途上国が近代化に必要な技術援助の比重は他のDAC諸国にくらべ低いし、援助条件もきびしく返済期間の延長や金利を安くするなどアン・タイピング(援助に条件をつけない)を実施しなければならないだろう。</p> <p>南北問題という言葉</p> <p>1959年11月世界銀行のインド調査団に加わったイギリスのロイド銀行総裁、サーオリヴァー・フランクスが低開発国の大半は赤道付近から南半球に集り、先進国は北半球に位置しているところから用いたものである。</p> <p>第三勢力</p> <p>世界を三つに区分する見方は中国の対外政策に、より明瞭に現われている。1974年4月の国連資源特別総会で鄧小平副総理の演説に世界を三分して、中国の対外政策をすすめていることを表明したものである。すなわち米ソ超大国からなる第一世界、この第一世界は特にアジア、アフリカ、ラテンアメリカの第三世界に対して覇権をおよぼそうとしているわけで、第三世界と直接的に対抗関係にある。</p>

抽出一覧表

Ⅱ 発行社 —— 公民的分野 ——

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
<p>第5章 日本経済と世界経済 2 世界経済の現状 南北問題と日本経済</p>	<p>発展途上国の経済は産業の中で第1次産業のしめる割合が大きいこと、資本の蓄積がじゅうぶんでない。そして技術も未熟である。これらの結果、労働の生産性は低く生活水準も低い。これは、先進諸国のめざましい成長にくらべて世界経済の大きな問題になっている。 経済発展の大きな障害になっている南北貿易の停滞を打開することがたいせつである。 南北貿易では、とくに先進国むけの第1次産品の輸出が先進国における人口増加率の低下や代用財の開発などのためにのびなやんでいる。先進国は、資本や技術を積層的に援助することが必要であり、資本主義諸国と社会主義諸国は競争して援助を行っている。</p>
<p>発展途上国への協力</p>	<p>爆発的な人口増加や南北貿易の停滞などで、経済発展がおくれるいっぽう、先進諸国は、発展途上国へ援助投資を増大させ、発展途上国からの輸入をふやすことにより経済発展の促進をはかっている。わが国は地域的、文化的、経済的に深い関係にあり、アジア諸国の期待は大きい。</p>
<p>新興国家の動き</p>	<p>第二次世界大戦後、アジア・アフリカに多くの国家が誕生した。これらの新興諸国はいずれも長い間の植民地支配から独立を達成したため、強い民族主義にささえられている。 新興諸国は、国際連合加盟国の過半数をしめ、国際政治のうえで第三勢力を結成する。</p>
<p>複雑化した国際的政治</p>	<p>新興諸国は、開発途上にあり、先進諸国の援助が必要であるが経済交流は、先進諸国に有利になりがちのため、先進諸国と新興諸国との利害の対立が、いわゆる南北問題として国際政治の上に新たな問題を生んでいる。またそれぞれ独立してまだ年月が浅いため、国家の内部統一の弱い国もあり、新興国相互間にも対立紛争が起こっている。そのため、新興諸国は、国際社会の場で必ずしも第三勢力としての大きな力を発揮できないでいる。</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
171	<ul style="list-style-type: none"> ○先進諸国と発展途上国の経済上の特質を理解させる。 ○発展途上国と日本経済との関係について理解させる。 ○発展途上国について、先進諸国との経済的な特色の違いは何かを理解させないで発展が遅れたかを考えさせる。 ○経済・技術援助にはいろいろな方法があること、わが国の援助も政府・民間などでなされていることに気づかせ、経済協力への問題意識をもたせる。 	<p>発展途上国の問題点</p> <p>先進諸国と発展途上国の経済力の格差は大きい。途上国の人口増加率は先進国の2倍の高さを示しているため1人当りの所得の伸びが低下している。1人当りの国民所得を比較すると、先進国全体が68～69年102ドルの増加に対し途上国は9ドルにすぎず、先進国の11分の1で所得額の格差も拡大。</p> <p>先進諸国の発展途上国への経済協力</p> <p>発展途上国は主として原料・燃料・食料を先進諸国に輸出する。そして工業製品を輸入する。途上国の貿易をふやすには、経済開発に必要で十分な資材を与えることである。</p>
173-174	<ul style="list-style-type: none"> ○国連貿易開発会議が、途上国援助においてはたす役割。 ○日本の援助のあり方について考えさせアジアの一員としての自覚を深めさせる。 	<p>発展途上国への経済援助</p> <p>IBRD OECDによる援助活動は特に活発。</p> <p>後発発展途上国</p> <p>途上国の中で特に経済発展が遅れている国、①GNP100ドル以下、②文盲率(15才以上)80%以上 ③国内総生産に占める製造業の割合10%以下の国。</p>
246	<p>発展途上国の経済的な自立がA・A新興諸国の平和・安全の基本問題であることに気づかせる。</p>	<p>南北問題とその将来</p> <p>先進工業国が発展途上国に経済援助を行なうという南北問題は1962年国連の「国連開発10年計画」として画期的な出発をした。ソビエト連邦が後進国の経済援助にのり出してきてから、米ソの平和的な経済競争は後進国の援助に向けられ、東西の対立は、南北問題をはらんで進展。</p>

抽出一覧表

F 発行社 — 公民的分野 —

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
<p>3章 わたしたちの生活と経済 5節 世界経済の動きとわが国の経済 2 国際経済協力の発展 南北問題</p>	<p>世界経済の問題として、南北問題がある。主として北半球の先進諸国とアジア・アフリカ・中南米などの諸国との経済的格差がきわめて大きく南の開発途上国の国々が困連に加盟して以来、南北の経済的格差についての関心がたかまってきた。</p> <p>工業製品は技術革新によって原材料節約の合成・人造品にかわりつつあること。また、先進国では強力な農業保護政策がとられているため、食料や原材料がおもな輸出品である開発途上国の貿易を減少させていることなどがあげられる。</p> <p>国際連合貿易開発会議の第2回(1968年)では、開発途上国の強い要望によって「先進国は国民総生産の1%を開発途上国への経済援助にふりむけることに努力するという決議が採択され、開発途上国の成長が世界経済の繁栄につながるとの観点からいっそうの推進がのぞまれてきた。なお1972年の第3回会議では「環境と開発」「軍縮と開発」などの問題が新たにとりあげられ、平和と繁栄の条件について論議された。</p>
<p>4章 国民生活と政治 5節 国際政治と平和 3 現代の国際社会 AA 諸国の課題</p>	<p>新興諸国の国づくりには、これらの国々自身の努力はもちろん、先進国の協力が必要である。先進国はこれらの国々の立場を十分理解して、文化や物資を交流するとともに、あたたかい協力を進めなければならない。</p> <p>これらの新興諸国がその国の建設にあたって何よりも関心をむけているのは経済自立の問題である。すなわち生産をたかめて国民に人間らしい生活水準を確保するとともに、国家の発展のために必要な経済の基礎をととのえることである。</p>
<p>4 核時代におけるわが国の課題 原子力時代</p>	<p>国家間の緊張をやわらげ、積極的に「国際協力」への努力をつづける、世界平和の達成は、貧困・疾病・無知を克服することにある。わが国の教育、科学、技術を生かして途上国の発展に寄与する必要がある。</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
165	<ul style="list-style-type: none"> ○南北問題の意味を理解させる。 ○南北問題においてUNCTADの果たす役わりについて考察させる。 ○国連などを中心に国際的な視野、グローバルな視点から考えさせる。 ○経済発展の遅れた国々にはどのような国があるか、またなぜ経済発展が遅れたかを考察させる。 ○日本のとるべき基本的姿勢についても考察させる。 	<p>南北の経済的格差</p> <p>開発途上国は先進国と比べて、工業生産およびGNPの伸び率においてわずかに上回っているが、人口増加が急激（先進国の2、3倍）なためひとりあたりGNPの伸び率では先進国をはるかに下回っている。</p> <p>輸出の伸び率において開発途上国が先進国を下回っていることは南北間にトレード＝ギャップ（貿易格差）が存在することを示している。</p> <p>○わが国経済協力の特徴</p> <p>わが国経済協力の最近の特徴は、第1は援助規模が急激に拡大してきたこと、第2は援助条件はDAC諸国中低位にとどまっているものの2年を追って改善を示してきたこと、第3は国際協調の精神にのっとった援助を重視する傾向が徐々に強まってきたこと、第4は援助の対象地域において近隣アジアのウェイトが高いこと。</p>
167		
266	<p>第3勢力の立場の意識を把握させると共にA・A自身の努力や先進国の協力のあり方について話しあわせ、日本としての立場について考えさせる。</p>	<p>○アジア、アフリカ諸国民会議</p> <p>A・A諸国の民間代表によっておこなう国際機関で、平和と反植民主義を目的とするもの。</p> <p>○アフリカの目ざめ</p> <p>アフリカにおける植民主義、帝国主義および人種主義は破滅の運命にある。そして植民地列強がこの事実を認めることが早ければ早いほどそれだけ彼らにとっても、世界にとっても、いっそうよいことである。（1960年国連総会におけるエンクルマ大統領の演説）</p>
270-271	<p>わが国の国際社会における任務、これからのあり方について理解する。</p>	

G 発行社 — 公民的分野 —

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
<p>5. 日本経済と世界経済 世界経済のうごき 世界経済の新しい問題</p> <p>発展途上国の経済開発</p>	<p>第二次世界大戦が終了して植民地が独立したものの、経済的にはまだじゅうぶんに自立することができない。先進工業国と発展途上国とが、どのように相互に経済を発展させていくかという問題（いわゆる南北問題）の二つが世界経済における第二次世界大戦後の新しい問題として登場してきたのである。</p> <p>発展途上国の多くは、経済を発展させるためには、農業の生産性の向上をはかるとともに、工業化を促進しなければならない。そのためには多額の資金、機械、技術者が必要である。先進国は発展途上国に対して、積極的に経済援助を行っている。</p> <p>日本も現在、東南アジアの諸国に対していろいろな経済援助を行っている。</p>
<p>5. 国際政治と日本 国際政治の現状 新興独立国の問題</p> <p>国際政治の課題と日本の役割 発展途上国の問題</p>	<p>第二次世界大戦後、アジア・アフリカ地域には新しい独立国が誕生した。大部分は今日なお、農産物の供給国であり、工業化は進んでいない。こうした共通のなやみをもった国々の間に、たがいに連絡しあい、団結し、協力していこうとする気運が高まってきた。1955年にインドネシアのバンドンで開かれたアジア・アフリカ会議もこのうごきのあらわれである。また、これらの国々は国際連合などでも米ソを中心とする二大勢力に対して第三勢力として行動するようになってきた。</p> <p>第二次世界大戦後に独立したアジア・アフリカの新興国は、政治的には独立しても経済的な自立は、今日なおむずかしい。そのため、国内の政情も不安定な国が多い。しかも米ソ両陣営の対立が、これらの国のなかにもちこまれてその国の国内事情をいっそう複雑にしているばかりが少なくない。</p> <p>わが国はアジアでもっとも安定した経済力をもつ立場からも、国連を中心に進められている発展途上国への経済自立のための活動にはじゅうぶんな関心をもち、その国の国内紛争にかかわることなく積極的に協力して行くこと。</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
195—196	<p>発展途上の国々への援助により、お互いの経済発展をはかるにはどうすればよいか考えさせる。</p>	<p>資源問題 発展途上国は、今日主要な資源の大部分を生産（石油72%、鉄鉱石40%）しているが自国でそれを有効に消費する状態にない。又資源の生産にともなうべく大な利益も多国籍企業の支配のままになっている。このため発展途上国は最近「自国資源に主権を行使し、生産計画や価格設定を自ら統制して、国民的な経済発展の基礎を固めたい」という要求を強めている。</p>
198—199	<ul style="list-style-type: none"> ○ 発展途上国の経済の特徴、発展させるための条件について。 ○ 発展途上国の経済援助は先進工業国によって積極的に行なわれることにより、先進諸国にとっても貿易の拡大という利益をもたらすことを考えるようにする。 	<p>①新興独立国の問題 新興独立国はいずれも経済開発に不可欠な資金に乏しく、技術者や熟練労働者も不足している。また爆発的な人口増加が国民の生活水準の向上にマイナスとなっている。中東のように石油開発権が欧米諸国の手中にあり、その利権はごく一部の支配階級に流れ、国民経済の自立発展が阻害されている国もある。</p>
303—304	<p>アジア・アフリカ諸国の植民支配からの政治的脱却の経緯、およびその後の第三勢力としての推移などに関しては歴史学習の成果をふまえて要点を確認する。本時の中心概念は南北問題学習の伏線として、先進国との経済格差について、その由来、現状を的確に把握しておくことが肝要である。</p>	<p>②低開発国 国連では国民1人当りの年間所得水準が200ドル以下の産業構成のうち農業などの第一次産業の比重が圧倒的に高い地域をさしている。</p>
317—318	<p>南北問題と総称される事項について、その由来、経緯、解決への方向を認識させ発展途上国の経済的自立のために日本の果たすべき役割を自覚させる。</p> <p>南北問題のKey pointの確認 発展途上国= A A 諸国でないことに留意</p>	<p>③グラフ アジア・アフリカ地域の国の輸出 パキスタンを除いて、各国の輸出額は大部分が農産物である。アジア・アフリカの農業における労働の生産性の極端に低いことに着目させたい。 新興国は経済開発に欠くことのできない資金に乏しく、また技術者や熟練労働者も不足している。</p> <p>経済事情の不安定な国の多い新興国では、政治的独立、経済的自立を考える国民の</p>

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要

H 発行社 — 公民的分野 —

4 章 日本経済と世界経済 3 節 世界経済 発展途上国の経済	<p>世界の人口の4分の3近くがアジア・アフリカの工業化の進んでいない発展途上国に住んでいる。</p> <p>発展途上国の経済はほとんど第一次産業が中心であってその製品を輸出し、工業製品を買い入れている。さらに発展途上国では人口の増加が続き1年に人口が3%以上もふえている。</p>
南北問題	<p>かつての植民地であった熱帯地方の国は独立し、国民としての自覚をもつと同時に、経済の面でも、先進国の支配から独立しようとしている。</p> <p>先進国がこのおくれた発展途上国を援助すべき。</p> <p>この北に多い先進国と南に多い発展途上国の問題(南北問題)は、今後世界でもっとも主要な問題となるであろう。</p>
発展途上国の展望	<p>発展途上国は、それぞれの資源の開発に努め、新しい技術を取り入れて、経済開発を進めていかなければならない。そのためには技術と資本が必要である。わが国は東南アジア諸国に対し機械設備を輸出し、その支払いは何年間かの年賦にするという方法で援助することが多くなった。国際連合では、貿易開発会議をひらき、先進国は国民総生産の1%ていどを年々、発展途上国へ援助すべきだと決議している。</p> <p>先進国は自国の利害のみにこだわらないで、世界的な立場から、発展途上国の成長を援助しなくてはならない。</p>
第6章 国際政治と平和 1 節 国際社会の現状	<p>アフリカでは1960(昭和35)年をさかいに多数の独立国が生まれた。これらの新興独立国は、国内では社会的</p>

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
		期待にこたえることができないままに、米ソの対立、大国の利害がからみ新興諸国で政治的内紛が絶えない。

164—165	<p>○ 発展途上国の生活水準を考える場合産業構造→貿易の特色の面と人口問題の二つの面からみていく必要があることを指示。</p> <p>○ 発展途上国に対する援助をめぐる50年代の東西競争から60年代は先進国の協調が目だった。この経済協力・援助の拡大は日本をふくめた世界経済の発展と国際社会平和と幸福への努力につながる課題であることを認識させる。</p> <p>○ 発展途上国に対する経済協力の実態を教科書P166の51図によって理解させる場合、50図からは日本の経済援助が年を追って増えている事実を51図からは国民総生産において日本を下回るフランスや西ドイツが10%台であるのに日本は8%である点を指摘して今後の日本の経済協力のあり方について考えさせる。</p> <p>発展途上国 (underdeveloped area) (新興独立国の特色)</p>	<p>開発途上国というのは明確な定義はないが、一般に人口一人当りの所得水準が低く、産業人口構成の上で農業の比重が工業のそれより圧倒的に大きい国をさしている。</p> <p>南北問題 1959年、イギリスのロイド銀行頭取サーオリバー・フランクスがニューヨークで演説したとき以来東西問題との対比で使われるようになった。経済の先進国が北半球に多く開発途上国のほとんどが南半球に多い現実から両者の貧富の差が政治経済問題を起こしてきた。貧富の格差が旧植民地支配国の責任というふくみもあって先進国に対する発展途上国への援助が要求されてきたが、今後の傾向としては、先進国が発展途上国側から一次産品を大量に優先買付けすることなどにより「援助より貿易を」という要求に変わりつつある。</p> <p>発展途上国というのはほとんどがこれまで欧米諸国の植民地だった国々で、国連では、1</p>
---------	--	--

抽出一覧表

項 目 (章・節・項・小項目)	教科書における記述の概要
	<p>経済的な基礎が弱いので、経済的に自立するためには、先進国の援助を受け、先進国との経済的なひらきを縮めなければならない(南北問題)。しかしその場合も、援助を資本主義国から受けるか、社会主義国から受けるかによって、外交的立場が違ってくる。このように新興独立国や発展途上国をめぐる問題は大きく、また複雑であり、この問題を解決できるかどうか、世界の将来がかけられているといってもよい。</p>

抽出一覧表

該当 ページ	指 導 書	
	着眼・留意点	解説・資料の記述の概要
		<p>人当たり国民所得が200ドル以下の地域を後進地域と見なしている。</p> <p>南北問題</p> <p>発展途上国と先進国との間の政治的経済的問題を総称して南北問題というようになった。途上国の経済開発をして行くために、多額の資本や技術を必要とするため、先進国の援助を求めなければならないことからいろいろな問題が生じている。保守と革新勢力の対立・分裂が二つの世界の対立とからみ合っ生じている等、かかえている問題は複雑でむずかしい。</p>

抽出作業を終えて

調査担当委員の所感

齊 藤 実

教科書の内容

南北問題に関する記述は、政治的分野と経済的分野の2面から扱われている。以下は各教科書に記述された内容の要約である。

(イ) 経済的分野に関する内容

- 第二次世界大戦後の世界経済における新しい問題として、発展途上国は、政治的には独立したものの経済的には自立できず、先進工業国との間に経済的格差を生じ、これが南北問題として登場して来た。
- 発展途上国の経済的特徴としては、産業構造の中で農業のしめる比重が大きく、軽工業が主要な部分をしめている。そのため農業の生産性向上と工業化の促進が必要であり、先進国は積極的な経済援助が必要である。発展途上国の経済が発展し、生活水準が向上すれば先進諸国にとっても貿易の拡大という利益をもたらす。したがって日本もアジア諸国の経済発展に協力する必要がある。
(Q発行社)
- 発展途上国の共通的特色として、第一は農業就業人口が60～80%の農業国で、低い生産性のため食糧不足の国も多い。第二は生活水準が低いため潜在失業者が多く、栄養不足、悪い衛生状態、教育水準の低さである。第三は、社会構造が前近代的で大土地所有制による身分的支配関係が残存している。第四は、人口増加率が高いため、経済成長が見られても1人あたりの所得はなかなかふえない。
- 南北問題解決のために活躍している国際機関として、IBRD、IDA、OECD等があり、さらにUNCTADの重要性と今後の発展が期待されている。
- 先進国側は、国際連帯の立場から経済協力をすべきであり、発展途上国側は、産業振興と援助の効果的活用努力が必要である。
- 日本が技術援助や資本協力により、いずれの国とも相互の利益を尊重し合い、友好的に経済交流をすすめればアジアの繁栄と平

和のためにつくすことになる。日本はG N Pの1%を援助にあてる目標で努力しているが技術協力面では、アジア諸国から留学生や技術研修生を受け入れて訓練したり、日本から専門技術者を派遣している。また機械設備を供与したり、開発計画を援助している。(B発行社)

- 南北問題の解決努力としては、先進諸国による資本、技術援助と貿易面での協力があげられる。(A発行社)
- 南北問題は、社会主義諸国も発展途上国に対して、経済援助をするほか、貿易の発展にも努めているため、資本主義国と社会主義国との対立ともからんで来ている。
- 1960年代中ごろから先進諸国の民間資本が発展途上国に競争的に進出し、輸出代金延べ払い方式でプラント輸出が行なわれた。しかし、やがて商品輸出から資本輸出に転じ政府や民間資本との合弁会社をつくることが多くなった。
- わが国の対外経済問題としては、輸出の自主規制、中国との貿易発展、発展途上国に対しては、1972年のタイにおける「日本製品不買旬間」のような運動が広がらないためにも相互の利益尊重と、相手国の産業発展や国民生活向上に役立つ配慮が特に必要である。(C発行社)
- 先進国の人口は8、9億人に対し、発展途上国の人口は22、3億人である。しかも1人当りの国民所得は、先進国が1350ドルに対し、発展途上国は89ドルで、先進国の15分の1という貧しさである。
- 真の経済援助や経済協力のあり方として、かつての帝国主義のように遅れた国に資金を貸したり、工場をつかってやってその代償に、鉱山や資源開発の権利や自国商品の買付けを強制することなく、先進国は自国の利害のみにこだわらず世界的な立場から、発展途上国の成長を援助しなければならない。(H発行社)
- 発展途上国の経済発展のためには、大きな障害になっている南北貿易の停滞を打開することが大切である。(E発行社)

- 日本は、東アジアにおける唯一の工業国であり、近隣の東アジア諸国は、まだ工業化が不十分である。近隣諸国間により政治的関係を持つには経済関係を密接にし工業化の努力に援助しなければならない。

日本の援助は、政府開発援助の割合が低く技術協力の比重も少なく、さらに借款の条件もきびしい。(D発行社)

- 世界経済問題としての南北問題は、先進諸国とアジア・アフリカ・中南米諸国間の経済的格差が大きく、開発途上国が国連に加盟して以来南北の経済的格差についての関心が高まってきた。

(F発行社)

(ロ) 政治的分野に関する内容

- 第二次世界大戦後、アジア・アフリカ地域には多くの独立国が誕生した。これらの独立国は共通のなやみを解決するために、団結協力し合うために、1955年AA会議を開催し、国連の中でも第三勢力として行動するようになってきた。
- 新興独立国では、貧しさも原因となって、国内紛争がおり、政権が変わるという場合もあるが、わが国は、国内紛争に関わることなく積極的に協力して行くべきである。(G発行社)
- 戦後独立した約60ヶ国のAA諸国は、非同盟主義を堅持し、バンドン会議で民族自決主義と平和主義の原則を認めあい、第三勢力として国際政治の緊張緩和に役立った。
- 米ソ対立、中ソ対立を反映して、政治的、経済的基盤の弱いAA諸国が国際政治の渦中にまきこまれがちである。国際政治の安定のためにもこれら諸国の国内条件の整備を経済自立の達成が重要である。(B発行社)
- 日本の外交方針の問題点の一つとして、アジア諸国に対し経済的支配という不安を与えているので、積極的な開発協力をとおして、相互理解を基礎に緊密な結びつきを強めていかなければならない。(A発行社)
- 新しい独立国は、自国の独立を維持し、おくれた国民経済を發

展させ、国民生活を向上させるために世界の平和が続くことを強く望んでいる。

- 発展途上国は、独立後外国の権益を排除して経済面でも自立しようと努力しているが、先進諸国との経済的格差がますます開いていく傾向がある。(G発行社)
- 新興独立諸国は、国内では社会の近代化を進め、対外的には完全な自主独立を達成しなければならない。近代化のためには、国内対立を克服して一体感をつくりださなければならないが、種族や宗教問題が複雑で容易ではない。また国民の自発的な政治参加意識の向上も教育水準を高めるために時間がかかり、なかなかかどらない。(H発行社)
- 国際社会の多極化傾向の中で、新興諸国が第三勢力としての力を発揮することが困難になって来た。ベトナム、イスラエル、アラブ諸国の対立のように、新興諸国相互間にも対立紛争が生じ、国際政治はますます複雑になって来た。(E発行社)
- 戦略上たいせつな国の場合には、東西両陣営から援助競争が行われたり、援助条件によっては先進国の支配を強く受けるおそれもある。また先進国同士が相互にけん制し合い、十分な援助の期待ができない場合もある。(D発行社)
- 新興諸国の国づくりは、これらの国々自身の努力はもちろん、先進国の協力が必要である。しかし先進国が協力に名をかりて自国の勢力をひろげようとするならば、国際的な対立を引き起こすことになる。先進国は、これらの国々の立場を十分に理解して文化や物資を交流するとともに、あたたかい協力を進めなければならない。(F発行社)

指導書の内容

各指導書とも指導上の留意点や着眼点を指摘し、解説参考資料として関連用語等の解説が共通した記述内容になっている。

(イ) 留意点や着眼点として指摘されている主要事項は次の通りであ

る。

- 発展途上国への援助により、お互いの経済発展をはかるにはどうすればよいかを考えさせる。
- 先進国との経済格差についてその由来、現状を的確に把握させる。
- 南北問題と総称される事項について、その由来、経緯、解決への方向を認識させ発展途上国の経済的自立のために日本の果たすべき役割を自覚させる。
- 第三勢力の立場と意義を把握させ、A A 諸国自身の努力や先進国の協力のあり方、日本としての立場について考えさせる。
- 南北問題は、世界における経済的民主主義の確立および人権の尊重に基づく国際連帯という視点で指導する。
- 発展途上国の経済的自立が、A A 新興諸国の平和・安全の基本問題であることに気づかせる。

(ロ) 用語解説や参考資料の主要事項

- 先進国と発展途上国の経済的格差を一人当りの国民所得比較統計で指摘している。
- 南北問題とその将来については、国連活動を中心に解説している。
- わが国の経済協力の実績とあり方として、対外経済援助実施5原則を取り上げている。
- 新興独立国の問題点として、人種、宗教問題、言語問題、部族問題をあげて解説している。
- 注目すべき用語として資源ナショナリズム、後発発展途上国、第三勢力、コナクリ5原則、A A 諸国民会議、低開発国等が指摘されている。

掲 載 資 料 に つ い て

説明文に付随した写真や統計図版として活用されているものは次の通りである。

- (イ) 写真………アジア開発銀行全景 UNCTADの会議風景、電気技術研修生の研修風景、海外技術援助としてのラオス・タゴン農場風景、日本の援助によるジャカルタのホテルとデパート、ウガンダの野外教室
- (ロ) 統計図版………一人当りの国民所得の国際比較統計、東南アジアに対する日本の援助グラフ、米ソの対外援助グラフ、発展途上国に対する援助比較グラフ

所 感

- (1) いずれの教科書も、南北問題を政治的側面と経済的側面の二面性で扱え、最低53行(E発行社)から最高102行(M発行社)にわたるスペースをさいて記述しているように、各教科書の記述内容に大幅な量的差異が指摘できる。
- (2) 全体的には、経済的側面の記述に重点がおかれ、先進国と発展途上国の経済的格差の実情説明(主に統計図表による)と先進国の経済的、技術的側面からは、第二次大戦後の新興独立国の成立と国際政治に果たす役割、それらの諸国がかかえている悩みや問題点、それに複雑化した国際政治の現状指摘にとどまっている。
- (3) 一般的にどの教科書も経済援助や技術協力による国際協力の重要性を指摘し、それを裏付けるための説明として写真や統計図表を活用しているが、真の国際理解や国際協力のために不可欠な要素としての人的交流や文化交流の必要性を説いている教科書がない。これは、国際理解の推進をめざす公民的分野の教科書としては片手落の感をまぬがれない。
- (4) 特にアジアにおける日本の立場と将来のあるべき姿を考えさせるためには、日本人としての自覚ある責任や任務を単なる抽象的説明にとどまることなく、人類的課題としての資源の有限性や貧困の現実的問題を具体的に取り上げて、国際協力と理解の認識を高める内容説明がもっと必要である。
- (5) 国際協力のあり方を先進国から発展途上国に対する経済協力と

いう視点で把握されがちであるが、73年のアルジェにおける第4回非同盟首脳会議やUNCTAD会議で濃厚になって来た発展途上国同士の水平的統合による集団的活動という新国際経済秩序の樹立という新しい価値観と動きについては、今後の教科書改訂の際に是非指摘されるべき事項であると考え。

- (6) 南北問題を国際的政治上の対立概念としての視点から、国家のワタを超えて人類統合に向かおうとする可能性を秘めた開発協力のための人類的課題として、グローバルな視点に立脚した意識づけの理解を深めさせる方向づけが重要である。以上の視点から記述されている教科書が少ないのは大変残念なことである。

広い国際的視野から平和問題を考えさせるためにも、人類共同体としての地球市民的意識の養成をめざした、新しい世界秩序の確立というビジョン形式を意識づける努力が、南北問題を通して教科書の中に表現されるべきではないかと考える。

— 調査結果のコメント —

— 調査とアンケート結果のまとめ —

金 谷 敏 郎

国立教育研究所企画調整官
アジア地域研修室主任研究員

青少年育成国民会議「地域活動に関する専門委員会」委員。かつては、郵便友の会、中央青少年団体連絡協議会などで国際交流や青少年施策にたずさわる。論文には「東マレーシアとシンガポールの教育発展」「1966年以後のインドネシアにおける教育発展」「フィリピンの教育目的」最近では「アジアにおける教育核心研修」を発表。

青年海外協力隊事務局で、小・中学校の教科書にあらわれた「南北問題」に関する研究を始める、ということは、しばらく前にうかがっていたが、その研究をまとめた資料をみせて頂く機会をえた。もとより私は教科書研究や社会科教育を専門とするものではないが、アジアや国際理解教育に関心をもつ者のひとりとして、資料を読んだの感想を、いくつか述べさせてもらうことにする。

調査のねらいと方法に関連して

調査のねらいは、「開発途上国理解のためのとりくみ」が、義務教育段階で、どのようになされているかを、社会科教科書の分析を通じて、調べることに、あったようである。

そのねらいにもとづいて、調査委員が手分けして、小学校5年、6年及び中学校の社会科教科書と、それに付随する教科書会社発行の指導書の、関連部分すべてをあたり、別項のような資料として、まとめあげた。短期間の集中的な作業のすすめぶりに、敬意を表せざるをえない。

この種の教科書調査は、皆無とはいえないまでも、ごく僅かな先行研究があるだけである。ここにまとめられた資料は、今後、この分野の研究を進めていくうえで、大きな役割をはたすものに違いない。

しかし、この調査のもつ基本的意義や委員各位の努力は、高く評価するものの、調査のすすめかたについては、いくつかの意見がある。あらゆる研究につきものの、時間的、経費的制約が、当然、この研究にもつきまっていたことを承知のうえで、この資料を利用していくうえや、今後の作業をすすめていくうえで、考慮してほしい、いくつかの点を、感じたままに、述べさせてもらうこととする。

(1) 文脈をどうとらえるか

教科書を分析する場合に、もっとも基礎となるのは、調査しようとする事項——この場合は「南北問題」——がどの程度とりあげられているかという量的分析と、その記述の正確性の検討であろう。今回の研究は、前者に主眼がおかれ、後者については、あまりふれ

られていないように、みうけられる。

しかし、教科書には、俗なことばで表現すれば、それ自体で完結する単行本ではなく、一連のシリーズもの、という性格がある。したがって、たとえば、中学の歴史的分野の教科書を調べるだけでよいというのではなく、地理的分野の教科書にも、公民的分野の教科書にも、関連する事項はとりあげられているわけであって、歴史的分野の教科書における、たとえば「南北問題」の記述量が少いから、それをふやせばよい、というとらえかたは成立しにくいものである、ということになる。

同時にそれは、1冊の教科書のなかの、相互関連性の問題である。たとえば、第二次大戦後の現代史における開発途上国の取り扱いかたをとりだしてくるだけでは不完全であって、そこにいたるまでの過程で、対象となる開発途上国あるいはその地域が、どういう扱いかたをされているか、というところまでさかのぼって、点検しなければ正確な分析とはいえない、ということになる。

教科書の内容吟味にあたっては、対象とする事項を点としてではなく、平面的と同時に立体的にも吟味する方法を考えなければならぬ、ということである。それは教科書というものの性格上、そうせざるをえないのであって、「南北問題」がどういう構成、文脈、関連の中で記述されているかをみきわめることが、教科書評価の第一歩といえるだろう。

(2) 教科書の役割をどうとらえるか

教科書調査においては、教科書が実際の学習活動でになっている役割を、はっきり想定してかからなければならない、というもうひとつの問題がある。

教室内の学習活動は、教科書だけに頼ってすすめられているわけでは、決してない。たとえば、小学校6年のある教科書で、世界の人口について2ページ、500字ぐらいをさいているからといって、世界の人口についての学習が、この500字に相当する教科書の部分を読んで終わり、ということではない。

教科書は教師によって、さまざまな取り扱いかたがされている。

教科書は学習課題を説明する材料だと考える教師がいたり、問題提起だととらえたり、学習の導入用に使うもの、あるいはまとめ用に使うもの、さまざまな利用の仕方が、教師により、あるいは単元によって、試みられる。少くとも社会科学の授業においては、そう考えておいて間違いない。そして、教科書と同時に、さまざまな教材、新聞の切り抜き、各種事典、年鑑、スライド、映画、物語、などが使われている。

そういう教科書の扱われかたを念頭におくと、単に量的な記述の分析だけでは、その教科書における調査項目の取り扱いかたの当否を判断するわけにはいかなくなる。学習場面における教科書のはたす役割との関連において、どう分析評価するかという方法を考えないと、教科書研究が成立しないということである。たとえば、今回の調査において多くの委員が指摘している表現の抽象性、生きた事例の不足、などについては、教科書の役割からみればそれが当然なのであって、教科書に記述されていることを、どう具体化し身近なものとしてとらえていけるかが学習活動なのだ、という反論は容易に成立するところだろう。

(3) 分析の視点をどこにおくか

義務教育を終了するまでに、「南北問題」についての学習は、少くとも教科書をみる限り、一通りなされている、という結論が、今回の調査から導きだされてくる。しかし、調査委員は、その所感のなかで「南北問題」の扱いかた、特にその視点について批判的見解を述べている。そして、残念ながら、その批判的見解が必ずしも説得性をもつとは思えないのである。

説得性を感じさせない理由は、いくつかあげられよう。すでに述べた研究の方法論的疑問もそのひとつであろうし、調査委員の立場からは、批判的見解を述べるスペースの不足などといったことも、あげられる。

しかし、その大きな理由のひとつは、調査委員の間で、「南北問題」の記述を取りあげる視点についての、はっきりした共通見解がなかったせいではなからうか、とも考えられる。もちろん、調査委

員ひとりひとりが南北問題についての考えかたを確立していらっしゃることについては、疑問の余地がないが、調査委員会としての見解ということになると、別であろう。

そのことは「南北問題」に対する国民的コンセンサスが成立していないことにも通ずる。もちろん、いわゆる総論賛成的なコンセンサスはある。開発途上国に対する協力援助は不必要である、と主張する人は、まずいないだろう。だが、一步進んで「なぜ」と問われると、その答えは、実にさまざまである。国際社会のおつきあい、原資材入手のためのパートナー、経済進出、人類史的視点、人類愛、その他、いくつもの答えがでてくる。だから、教科書の記述には、このさまざまな答えのニュアンスがそれぞれこめられていて、網羅的理由づけと解釈されるようになっているのも、やむをえないのかもしれない。

だから、たとえば「経済至上主義的観点で開発援助の必要性をとらえている」と批判しても、その別のところでは国際協力の精神に気づかせるような配慮をしている、と批判をそらすことも可能である。経済至上主義的観点がいけないというのは、その程度の問題なのか、基本的にいけないことなのか、これは現在の開発援助のありかたを問う人すべてが答えなければならない問題であろう。

教科書の内容に関連して

方法論に関する意見をいくつかのべたが、だからといって、現在の教科書のアジアや開発援助の記述が、すべてよしとするわけではない。したがって、多くの点で、調査委員の指摘に共感するところがある。

たとえば用語の問題である。「開発国 developed country と開発途上国 developing country」という用語の使いかたが現在、国際的に通用するものだと思うが、教科書には、そのほかの用語が、使用上の必然性なしに、使われているようである。新興国、後進国、低開発国などという用語には、第二次大戦後30年の間に、それぞれが使用された歴史的、思想的含意があるはずなのであるが、そういう配慮は、教科書からうかがうことはできないよう

である。文化という用語や、その概念についても、調査委員の指摘しているとおりであろう。

あるいは、いくら教科書という限界を考慮にいれても、ボルネオが焼畑農業に代表されるような取り扱い（小学校6年）については疑問をもつ。ボルネオがインドネシアではカリマンタンと呼ばれ、マレーシアでは東マレーシアと呼ばれ、そのほかにイギリス保護領のブルネイもまたボルネオ島の中にあるのだという政治地誌的な理解は生まれてこないし、ブルネイの石油生産、東マレーシアの材木輸出ブーム・乱開発といった経済地誌的な理解も、ここからは生じない。

そういう理解は小学校6年段階では困難だという反論もあるだろう。しかし問題は、小学校6年で、ボルネオは焼畑農業、原始的生産様式、未開発、遅れている、といった一連の先入観を与えかねない、という危惧にある。この項は「赤道に近い熱帯地方の自然と人々の生活（中略）について、具体的事例を通じて、その特色を理解」という指導要領にもとづいているのであるが、具体例の不用意な引用が、あやまった全体像を導きかねない、という例にもなるだろう。

もうひとつ、調査主題と関連して考えさせられるのは、開発援助をうける側の論理に気づかせ、考えさせるような記述がないことである。教科書を読んでいくと、開発途上国すべてが、工業国からの開発援助、協力を待望しているような印象を与えないか、という危惧を感じる。これも学習時における取り扱いかたに大きく左右されることであるが、開発途上国には、それぞれの開発戦略があり、援助を期待していない国、援助の分野や方法、条件についての主張をもっている国、など、さまざまな個性がある、ということに気づかせる配慮は、あまりみうけられないように見える。小学校6年のある教科書に「これらの国（開発途上の国）の人々が、なにを願い、なにを必要としているか、よく理解して、援助や協力をすることがたいせつです」という記述がある。もしこの原則をあてはめるとすると、開発援助や国際協力について考えさせるためには、援助する側の立場だけ（つまり日本の立場）からではなく、援助をうける側からの論理をきちんと学習させることが必要だろう。相手の立場に

立って世界各地の人のくらしや開発を考えていくための材料が、どれだけ現行の教科書にとりいれられているだろうか。

再び研究の方法に関連して アンケート調査の結果から

教科書の学習活動の中での使われかたについて、先に述べた。それと同じことが、現代においては、学校教育がはたす役割についてもいえる。たとえば世界の国々についての知識を、子どもたちは学校でだけ知っているわけではない。子どもたちの日常の生活の中の情報源というのは、ほう大な量に達する。したがって、学校で教える南北問題は、どういふとらあげかたをしなければならないのかという視点が、やはり教科書分析に欠くことができないものとなってくる。

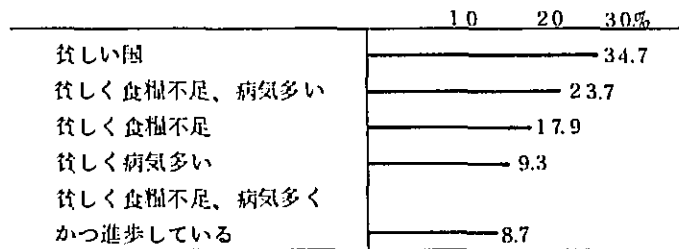
それを立証するのが、事務局が、ごく簡単に、東京都内のふたつの中学校、265名の3年生を対象に行ったアンケートの結果である。

このアンケート調査は、サンプル数も少く、対象も限られているし、質問あるいは回答選択肢の設定のしかたも必ずしも十全であるとはいえないが、少なくとも中学校3年生の南北問題に対する反応の一端を示しているともみることができよう。設問及び回答の状況は資料として別項に掲載されているので、それを参照して頂きたいが、私の関心をそそられたのは、第3と第4項目に対する回答状況である。

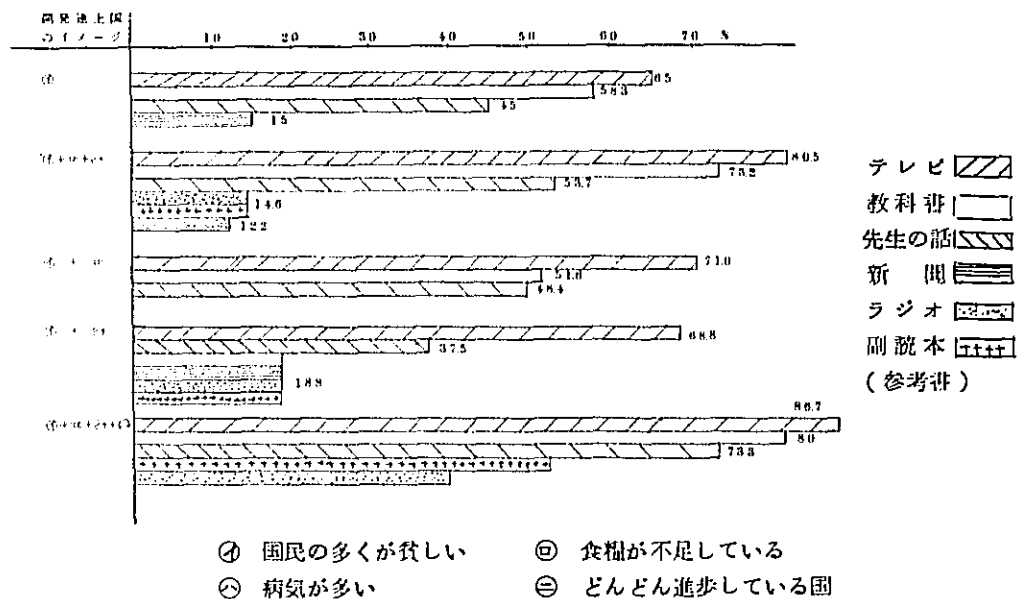
Q4は「発展途上国（開発途上国）について知ったのは……」という設問で、回答選択肢は①教科書、②先生の話、③映画、④副読本（参考書）、⑤テレビ、⑥ラジオ、⑦その他（オープンアンサー）から成り立ち、複数回答を認めている。その結果は、教科書52.1%、先生の話46.4%、テレビ40.4%、副読本（参考書）13.6%、新聞11.3%、ラジオ9.4%、と続き、私の予想以上に「教科書」をあげる率が高く、「先生の話」と合わせると98.5%で、ほぼ全員が、発展途上国についての情報源を学校での学習活動（社会科のとおいてよいだろう）としている。

同時にQ3で「発展途上国（開発途上国）について、どんなこと

を知っていますか」と質問し、①国民の多くが貧しい、②食糧が不足している、③病気が多い、④どんどん進歩している国、という選択肢をあげ、いくつでも選ばせている。その結果は① 64.2%、② 41.1%、③ 30.6%、④ 27.6%となり、開発途上国イコール貧しい国というイメージをもつ者が過半数をしめるということを示している。しかし、貧しい国というイメージと他のイメージの組み合わせをみると、次の図のようになる。



これは①の貧しい国と答えた者を取りだして、他の選択肢との組み合わせぶりの上位5位までみたものであるが、以上のようなイメージを開発途上国についてもつ者が、その情報源をどこにしているかを示すものが、次の図である。



開発途上国は「貧しい国」とだけ思っているのは、貧しいという選択肢を選んだ者の3分の1であり、残りの3分の2は、貧しいことに加えて、他のいくつかのイメージをもち、なかでも、貧しく、食糧不足、病気が多い、というマイナスイメージを重ねてもっている者は5人のうち2人、貧しいというイメージだけのものを加えると4人のうち3人までが、そうだということになる。その逆に「どんどん進歩している国」というプラスイメージだけをもっている者は、全体の15.5%であるが、この選択肢を選んだ者の43.8%は同時に貧しい。食糧不足などというマイナスイメージをあわせてもっている。

今、これをマイナスイメージ、プラスイメージと便宜的に区分けしたが、このふたつをあわせもつ子どもたちは、むしろダイナミックなイメージをもっているのだ、とも考えられよう。開発途上国は

「貧しい」けれど「どんどん進歩している国」というダイナミックなとらえかたをしている子どもたちが、（幸いにもというか、残念ながらというべきか）全体の27.6%、4人に1人の割合で存在している。

貧しい国というイメージをもっている子どもたちの情報源は、先にあげた2番めの国で示されているが、Q4で平板的に情報源をとらえると教科書、先生の話、テレビの順になるのに対して、貧しいというイメージの情報源のトップにはテレビがくるのである。

設問においてQ3（開発途上国のイメージ）とQ4（情報源）を直接関連させているわけではないが、開発途上国について知ったのは？という問に対して、学校の教室で課されたアンケートという心理的制約があったことを考慮にいれるにせよ、大多数が教科書あるいは教師の話をおいているのに対して、開発途上国に対するイメージ別に情報源に対する回答を調べると、テレビが筆頭にくるのは、いかにも象徴的である。恐らく、どんなイメージであれ、生きたイメージを与えるのは、現代社会においてはテレビであるというのも、ごく当たり前のことであろうし、それが社会科における南北問題の学習に影響を与えているはずなのである。

したがって、教科書における南北問題のとりあげかたを吟味検討する際には、学校教育での南北問題の学習がどうあるべきか、という視点を整理してかからなければならない。ということになる。テレビ、その他の学校外のさまざまな情報メディアから、子どもたちが任意に入手している南北問題についての知識の量と質を無視して教科書を分析検討するのは非現実的であって、学校教育では南北問題のなにを、どう教えるべきかという、視点をはっきりさせることが必要とされるだろう。

以上、調査委員会でまとめられた資料について、いくつかの点を卒直に述べさせてもらったが、せっかくまとめられた基礎資料である。青年海外協力隊だからできる「学校教育における南北問題の取りくみ」に関する提言といわれるものが、さらに今後の研究活動によって具体的に発表されることを期待する。

調査を終えて



調査委員会において作業計画をたてる委員（於 協力隊会議室）

今日、いわゆる「南北問題」が単に南の途上国だけでなく、北の先進国をも含む全地球の問題であることは多言を要しない。国内経済の存立を海外に依存しているわが国にとって、南北問題はまさに最重要課題であるといえよう。にもかかわらず、わが国民一般の南北問題への関心は決して充分であるとはいえない。

こうしたわが国の状況にひきかえ、欧米の先進工業諸国では、第三世界のかかえている問題への国民の積極的関心を喚起する努力が行なわれている。その努力の一つに、「開発教育」(Development Education)とよばれるものがある。すなわち、グローバルな地球全体の平和の追求のためには、南北の格差を是正することが不可欠であり、北は南の途上国の開発を自分達の身近な問題として考えようとする教育である。子どもたちに、第三世界について、事実や、ありのままの姿にもとづいた知識を与え、そのことによって彼らの心の中に「他人の不幸、苦しみを自分のものとして」感受できる、そういうあたたかい心を育むことが開発教育である。

この調査を終えるにあたって、わが国における開発教育が一日も早く実施され次代を担う青少年の心に国際平和への関心が養われることを願わずにはいられない。調査方法や調査結果が、必ずしも満足なものではないことを自認しつつ、にもかかわらず、これを契機に関係者の方々による努力がさらになされることを期待したい。

(調査委員一同)

中学 3 年生 社会科アンケート結果

教科書のできるまで

教科書発行社一覧

中学3年生社会科アンケート（内容）

1. 「南北問題」は何のことだと思いますか
イ、南北朝鮮のこと ロ、先進国と発展途上国の問題
ハ、アメリカの南北戦争 ニ、よくわからない
2. 次の言葉をきいたことがありますか（あるものに○を）
先進国 後進国 開発途上国 発展途上国 開発国
低開発国 第三世界 後発展途上国 先発開発国
3. 発展途上国（開発途上国）についてどんなことを知っていますか
イ、国民の多くが貧しい ロ、食糧が不足している ハ、病
気が多い ニ、どんどん進歩している国
4. 発展途上国（開発途上国）について知ったのは……
教科書 先生の話 映画（どこでみたか ）
副読本（参考書） テレビ ラジオ その他（ ）
5. 日本が発展途上国（開発途上国）へ協力をしているのは、なぜだ
とおもいますか。
イ、同じ人間として気の毒な人のため、 ロ、日本は貿易国だ
から ハ、日本は石油がないから ニ、日本はアジアのリー
ダーだから。
6. 日本と発展途上国（開発途上国）はどんなふうになすけあわなけ
ればならないか、どんなふうに協力しあうべきか、おもうことを
書いて下さい。

アンケート集計

調査日 1977年3月12日

アンケート依頼数 265校
 回答数 265校
 実施校 小金井市立小金井第一中学校(3学級)
 中野区立中野第三中学校(4学級)

項目	人数	割合
先進国と発展途上国の問題	85人	32.1%
南北朝鮮のこと	79	29.8
よくわからない	71	26.8
アフリカの南北戦争	16	6.0
合計	251	94.7

項目	人数	割合
先進国	257人	97.0%
発展途上国	231	87.2
開発途上国	214	80.8
後進国	178	67.2
開発国	142	53.6
第三世界	79	29.8
低開発国	61	23.0
後発展途上国	36	13.6
先発展途上国	36	13.6
合計	1,234	465.8

項目	人数	割合
国民の多くが貧しい	170人	64.2%
食糧が不足している	109	41.1
病気が多い	81	30.6
どんどん進歩している国	73	27.6
合計	433	163.5

項目	人数	割合
進歩してない	2人	
工業がさかんでない	2	
第一次産業がさかん	2	
人口が急増してる	1	
教育受けてない人多い	1	
東南アジアに多い	1	

項目	人数	割合
教科書	138人	52.1%
先生の話	123	46.4
テレビ	106	40.4
劇脚本	36	13.6
ラジオ	25	9.4
映画(学校6人 家1人) 映画館3人	10	3.8
新聞	30人	11.3%
本(雑誌)	6	2.3
親の話(兄の話)	3	1.1
マンガ	2	0.8
なんとなく知った	2	0.8
現地へ行っていた	1	0.4
合計	482	182.4

項目	人数	割合
日本は貿易国だから	101人	38.1%
同じ人間として気の毒な人のため	83	31.3
日本は石油がないから	82	31.0
日本はアジアのリーダーだから	54	20.4
合計	320	120.8

項目	人数	割合
日本の商品を売りたいから		
国連から		
世間でいわれているから(日本が世界に対して)		
食料、資源確保のため		
日本人はいはっているから		
貿易のため、利益のため		

6. 日本と発展途上国(開発途上国)はどのようなふうになすけあい、協力しあうべきと思うか。(文章による回答)

- <回答の多かった内容>
- 技術援助すべき(ボランティア精神をもって)
 - 技術援助をし、資源(石油、原子力)を輸入する。
 - 途上国を理解すること(国の実状について知ること)
 - 人間の基本的人権を尊重しあい、助け合う
 - 「お金」をあげるべき(資源を高値で買ってやる)
 - お互いの利益を保証しあう
 - 学校、病院をたててあげる。医師を送りこむ
 - 技術援助をし、食料(農産物)を輸入する
- <その他の特徴的な回答>
- (途上国の)悪い生活や知識をバカにしてはいけない
 - 途上国は日本の自然環境に協力してほしい
 - 途上国の言葉(語学)を学ぶべき
 - 戦争しないこと
 - 食料を送ってあげる
 - 日本の政治・経済のしくみのいい所を知らせてあげる
 - 日本は、いばらないで低姿勢でいくべき

教科書のできるまで

徳 山 正 人

教科書センター・常務理事

小・中・高等学校等の教科書が、どのようにして出来上り、どのようにして学校で使われるようになり、その間どのくらいの期間が必要なのか、などのことは、一般には必ずしも十分に理解されているとはいえない。

この調査報告書を読み、理解してもらう背景として、調査対象となった教科書が、どのようにしてこの形にまで仕上げられたのか、この間の事情を概説しておくことは、無駄ではあるまい。

1. 教育課程の基準の改訂

小・中・高等学校等で行なわれる教育の内容すなわち「教育課程」については、全国的な教育水準の維持向上を図るという観点から、戦後の学校教育法の体系で、文部大臣がその基準を定めることとなっている。

この教育課程の基準は、戦後数回に亘って大改訂が行なわれてきており、それにつれて、学校の教科書も新しいものに変えられてきているのである。たとえば現行の小学校教育課程の基準は、昭和43年7月1日付の文部省告示による「小学校学習指導要領」によるものであり、現行の教科書は、この学習指導要領に示された教育内容をもとにして編纂され、3年後の昭和46年4月から使用されるようになったものである（もっとも、その後各教科書とも2回の改訂を経ているが、基本は昭和43年の学習指導要領の枠内であることにちがいはない）。

ところで、ニュースで御承知のとおり、現在、小・中・高等学校等の教育課程の全面改訂のしごとが進行中であり、昭和52年度には、新しい小・中学校の新しい学習指導要領が公けにされるという段階にある。しかも、ここまでこぎつけるのには、長い年月が費やされているのである。

近來の例を見ると、教育課程の基準は、大体10年ひとくぎりて全面改訂が行なわれ、社会の進進に即するようになっているが、こんどの新教育課程についても、文部大臣が、その諮問機関である教育課程審議会に対して、「小・中・高等学校の教育課程の改善につ

いて」の諮問を行なったのが昭和48年11月である。それから、たいへんな回数の審議を経て、教育課程審議会から文部大臣あて答申が出されたのが、昭和51年12月18日で、この間3か年余りが経過している。

教育課程審議会の答申の内容は、改善の基本方針や、教科・科目の編成、授業時数等、各教科・科目の内容の重点、主な改善点等が示されているが、これらはいわば骨組み的な基本方向を示すものである。各教科別に、目標、内容や取扱い方等は、この答申をもととして学習指導要領に示されることとなり、ほう大な人数の学識経験者が動員されて、この作業にあたってきている。その内容が確立した後、告示となるのである。

新教育課程（新学習指導要領）による新しい内容をもち込んだ教科書は、この新学習指導要領を見て、各教科書発行者が、これと検定基準とをよりどころとして編集をはじめるのであり、その後の検定申請→合格、展示会→採択、製造供給などの段階を経て、新教育課程による小学校の新教科書の使用は、昭和55年4月新学期からということになる。文部大臣の教育課程改善諮問から計算すると、7年ぶりで新教科書が日の目を見る計算になるのである。

2. 現行教科書のできるまで

このような経過が必要であることを頭において、今回調査対象となった小・中学校社会科教科書のできるまでを説明してみよう。

教育課程の大改訂期の中間期にも、教科書は改訂が認められている。義務教育諸学校では、同一の教科書を使用する期間が3年ということに政令で定められており、これに見合って、各教科書発行者は、3年ごとに教科書内容を改訂して検定を受け、展示→採択替えの機会が許されている。そこで、今回調査対象となった小学校社会科教科書についてみると、昭和46年頃から各社は改訂版の編集に取りかかり、47年4-5月頃文部省に検定を申請し、その年度末頃に検定合格がきまる。検定済みの教科書は、都道府県内の採択地区別に展示され、地区ごとに採択本の種類と冊数が決まる。この集

計に基づいて各社は供給本の印刷をはじめ、翌49年新学期には全国の各児童の手に確実に渡されなければならない。この教科書が昭和49年～51年の3年間使用されるわけである。（この調査書が公けにされる4月からは、小学校ではこの次の、昭和51年検定済の改訂版が使用されていることになる。なお、中学校は、この経過が1年おくれとなる）

だから、調査対象となった小学校の現行教科書調査といっても、その編集は、はるか6年前の昭和46年頃に編集され、検定の段階で文部省の指示事項を検討し、修正すべきものは修正して検定合格が決まる（すなわち教科書記述の内容が確定する）のは48年3月ということになる。

ただし、統計資料を新しい年次のものに改めたり、国家の興亡など客観的事実の変更による一部の改正については、「正誤申請」という手続きで、検定後も行ないうる途が開かれているので、発行者は、その負担において、新情勢に対応する努力を最後まで続けるのだが、供給本の印刷は、大体前年の8～9月から開始されなければ間に合わないので、新情勢に基づく部分的変更も、この時までのことである。

小・中・高を通じて毎年約2億冊というぼう大な印刷が行なわれる教科書が、編集から使用まで、長い年月を要することがおわかりになったことと思う。日々の新聞や週刊誌のような小廻りがきかず、それだけに、カレント・トピックスを追うような態度でなく、国民教育として、基礎的・基本的事項を精選して教科書にのせ、時事的な問題の理解や解釈などの力のもとになる内容、これが「主たる教材」といわれる教科書の使命でなければならない。新しいインフォメーションを与えたり、考え方や新情報に対処する力をつけるのは、教師自身の仕事になるといわなければならない。

教科書が使用されるまで（小学校の例——中学校は1年ずつ遅れ）

昭和46年度	47年度	48年度	49年度	50年度	51年度	52年度
企画 ・ 編集	検 定	展 示 ・ 採 択	製 造 ・ 供 給	使 用	継 続 使 用	継 続 使 用
				企 画 編 集	検 定	展 示 ・ 採 択

社会科教科書の種類、点数、需要冊数（昭和51年度用）

	種類（発行者数）	点数（上・下分冊等計）	需 要 冊 数
小 学 校	6	54	1,594,336
中 学 校	地理的分野 8	8	1,690,646
	歴史的分野 8	8	1,647,055
	公民的分野 8	8	1,598,858

教科書発行人一覧

	発行人	教科書番号	教科書名	定価	指導書名	定価	所在地
1	中教出版	社会 5111	新版 小学生の 社会科 5上	162	新版小学校 社会科研究 5	1600	〒101 千代田区西神田 2-3-16 TEL 03(263)1351
2		社会 5112	" 5下	159			
3		社会 6111	" 6上	175	新版小学校 社会科研究 6	1600	
4		社会 6112	" 6下	172			
5		地理 710	中学生の社会科<<地理>> 新版 日本と世界の国々	374	中学校社会科研究 新版日本と世界の国々	2700	
6		歴史 713	中学生の社会科<<歴史>> 新版 現代の社会	374	" 新版 現代の社会	2700	
7		公民 914	中学生の社会科<<公民>> 新版 日本の歩みと世界	374	" 新版日本の歩みと世界	2400	
8	日本書籍	社会 5101	小学社会 5上	162	小学社会 学習指導書 5	1400	〒112 文京区小石川 4-14-24 TEL 03(813)8111
9		社会 5102	" 5下	159			
10		社会 6101	" 6上	175	小学社会 学習指導書 6	1500	
11		社会 6102	" 6下	172			
12		地理 714	中学社会 地理的分野	374	中学社会の研究 地理的分野	2600	
13		歴史 712	中学社会 歴史的分野	374	中学社会の研究 歴史的分野	2900	
14		公民 912	中学社会 公民的分野	374	中学社会の研究 公民的分野	2400	
15	東京書籍	社会 5071	新訂 新しい社会 5上	179	新訂 新しい社会5上 教師用指導書	1850	〒101 千代田区神田和泉町1 TEL 03(862)4111
16		社会 5072	" 5下	142	" 5下	1550	
17		社会 6071	" 6上	220	" 6上	2300	
18		社会 6072	" 6下	127	" 6下	1250	

	発行社	教科書 番号	教科書名	定価	指導書名	定価	所在地
19	東京書籍	地理 709	新訂 新しい社会 地理的分野	374	新訂新しい社会教師用 指導書 地理的分野	2700	
20		歴史 711	" 歴史的分野	374	" 歴史的分野	2,950	
21		公民 909	" 公民的分野	374	" 公民的分野	2,600	
22	大阪書籍	社会 5081	小学社会 5上	146	小学社会 教師用指導 書 5年上	1200	〒557 大阪市西成区北津守 2-4-5 TEL 06(561)7731
23		社会 5082	" 5下	142	" 5年下	1200	
24		社会 6081	" 6上	168	" 6年上	1200	
25		社会 6082	" 6下	144	" 6年下	2600	
26		地理 712	中学社会 地理的分野	337	中学社会 研究と資料 地理的分野	2600	
27		歴史 710	" 歴史的分野	337	" 歴史的分野	2600	
28		公民 916	" 公民的分野	337	" 公民的分野	2600	
29	教育出版	社会 5091	改訂 標準社会 5年上	153	改訂標準社会 5年 教師用指導書	1,450	〒101 千代田区神保町 2-10 TEL 03(261)0191
30		社会 5092	" 5年下	168			
31		社会 6091	" 6年上	229	" 6年	1,450	
32		社会 6092	" 6年下	118			
33		地理 715	改訂標準中学社会 地理	374	改訂標準中学社会地理 教師用指導書	2500	
34		歴史 714	" 歴史	374	" 歴史	2900	
35	公民 913	" 公民	374	" 公民	2,400		
36	学校図書	社会 5121	小学校 社会 5年上	162	小学校社会 5年 教師用指導書	1,700	
37		社会 5122	" 5年下	159			

	発 行 社	教科書 番 号	教 科 書 名	定 価	指	定 価	所 在 地
38	学校図書	社 会 6121	小学校 社会 6 年上	220	小学校社会 6 年	1,800	〒140 品川区北品川 1-1-14 TEL 03(472)2811
39		社 会 6122	" 6 年下	127			
40		地 理 711	中学校 社会 地理的分野	374	中学校社会 学習指導 資料 地理的分野	2800	
41		歴 史 709	" 歴史的分野	374	" 歴史的分野	2900	
42		公 民 910	" 公民的分野	374	" 公民的分野	2800	
43	帝国書院	地 理 713	中学社会科 地理 初訂版	374	中学社会科 地理 初訂版 指導書	2500	〒100 千代田区神保町 3-29 TEL 03(262)0831
44		歴 史 715	" 歴史	374	" 歴史	2500	
45		公 民 911	" 公民	374	" 公民	1,900	
46	清水書院	地 理 716	日本の国土と世界 地理的分野	374	日本の国土と世界 指導と研究	2800	〒162 新宿区東五軒町5 TEL 03(260)5261
47		歴 史 716	日本の歴史と世界 歴史的分野	374	日本の歴史と世界 指導と研究	2800	
48		公 民 915	日本の社会と世界 公民的分野	374	日本の社会と世界 指導と研究	2800	

おわりに

なつかしい気持ちで教科書を開いた。

そしておどろいた。小学生の頃、こんなにも多くの知識を学んだのだろうか。

どの教科書をもても、とてつもなく多くの事柄が、息もつけない程、びっしりつまっている。いま、子供たちは、こんなにも多くを学んでいる、学ばされていることを知った。

調査の意義に賛同し、委員になることを承諾された方々も、いざ作業にかかる段になって、この膨大な内容におどろかされた。

おどろいてばかりはいられない。さっそく 88 冊の教科書、指導書を読まなければならない。委員会が終ると、風呂敷いっばいの本を持って帰宅する。そして次の委員会に、風呂敷づつみを持った委員がやってくる。徹夜してしまった、休暇をとった、そんな苦労話が変わされる。事務局の私たちも通勤電車の中で教科書を開く日が続く。色刷りの、ひらがなの多い小学校の社会科の教科書を熱心に読む大人を他人は何とみただろうか。

それぞれが抱え込んだ作業で手いっばいなのに、調査の過程でボンボンとアイディアが出てきた。欲もでてきた。教科書を使っている生徒たちの反応が知りたい、現場の教師の意見がききたい。……本報告書中のアンケート調査は、こうして行なわれた。

お会いした先生方は、「途上国のこと、特にそこにいる人びとの生活のことをもっと知りたい。子供たちもそうだが、私たちももっと生の情報がほしい」とみないう。

都内のある中学校で、途上国で協力活動をする青年海外協力隊員の映画をみせたことがある。感想文を書かせたら、その中にこんなのがあった。

「フィリピンって何て貧しい国なんだろう。あんな不便な所で、一生懸命働く日本の青年たちは、とてもえらいとおもう。でも、自分にはとてもできない。だから日本から応援したい。」

短期間ではあったが、この教科書調査を通じて、途上国理解ということのむずかしさを痛感した。途上国に対する大人たちの偏見や誤解をなくす努力も大切だが、子供たちにより正しい情報を与えることはもっと大切だとおもう。南と北の国ぐけの相互理解、そして相互協力がますます必要とされる時代は、彼らの時代であるからだ。

(事務局 板本)

新たな「開発教育」をめざして

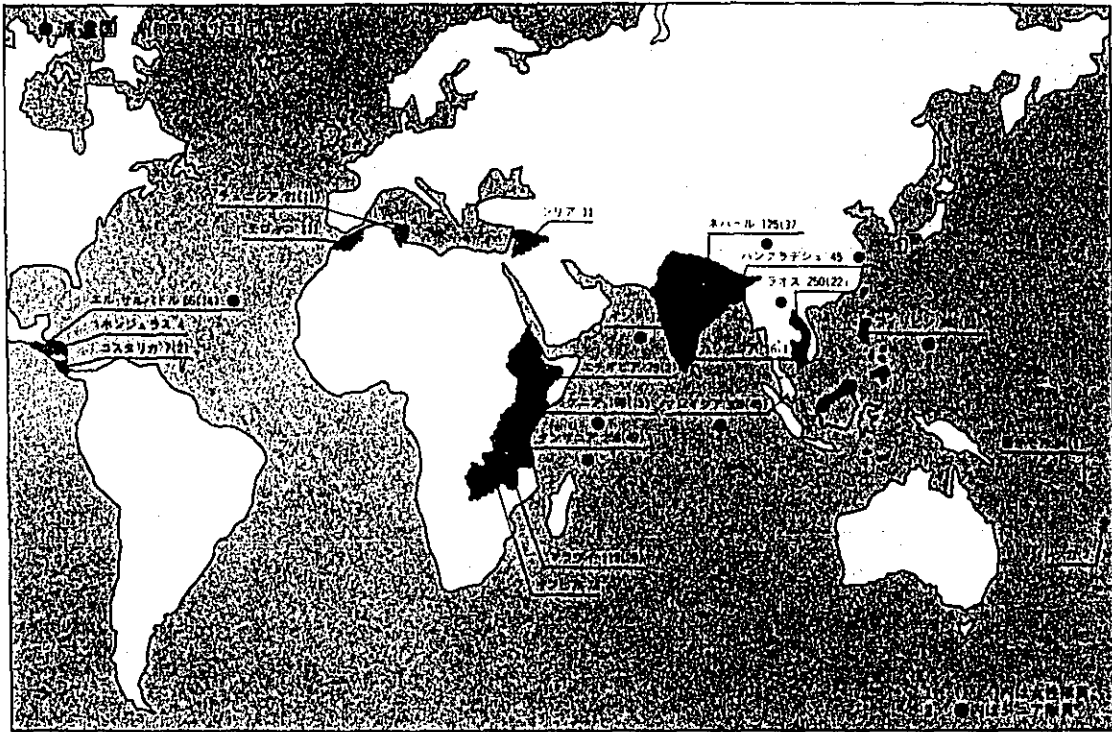
南北問題・開発途上国に関する教科書調査報告書

1977年4月

編集 ● 教科書調査委員会

発行人 ● 青年海外協力隊事務局
事務局長 黒河内 康

発行所 ● 国際協力事業団
青年海外協力隊事務局
東京都渋谷区広尾4-2-24 TEL.03-400-7261
(印刷 巧房仲村 0429-42-8575)



〈青年海外協力隊〉

アジア、アフリカ、ラテン・アメリカ一開発途上国とよばれる20の国々にて、2年間、その土地の住民とともに、汗水流して国づくりのために働らく、青年海外協力隊（JOCV—Japan Overseas Cooperation Volunteers）の若者たち。

1965年の発足以来、その数は2100人をこえ、いまも 500人近い若者たちが、世界各地で活躍している。

農林水産・家畜飼育・機械・建築・教育・医療など、活躍分野も実にはばひろく、どこの受け入れ国でも高い評価を受けている。